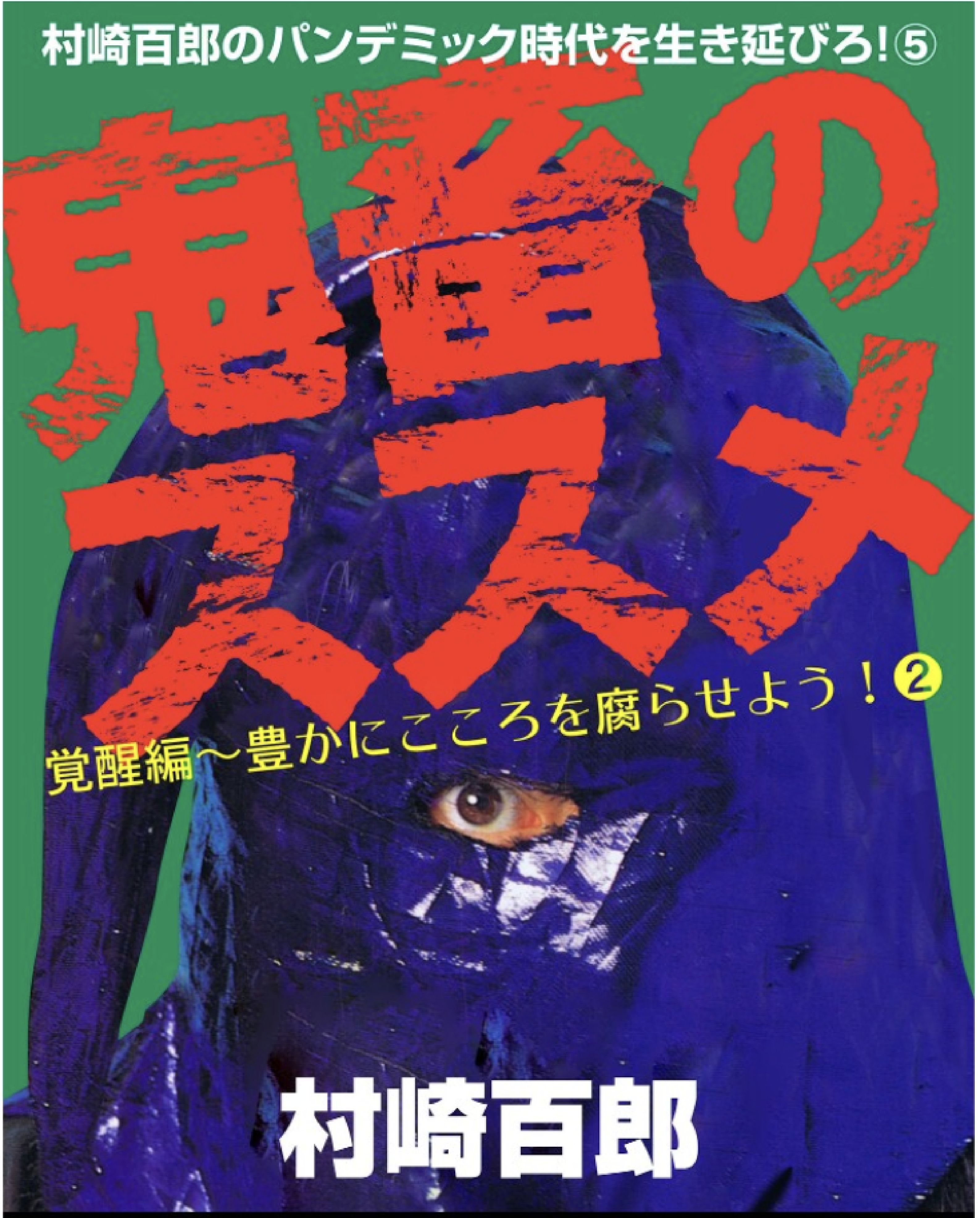


村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ!⑤

鬼畜のススメ

覚醒編〜豊かにこころを腐らせよう！❷

村崎百郎

社会は「巨大で複雑な共同の妄想」であると気がついているか？

目次

ゲス

鬼畜メディア論



しい。それ以外の読者の皆さんは、「キ●ガイの発想をより深く理解する参考資料」としてこの原稿を深く読み味わってほしい。もっとも理解したところで、どーなるわけでもないけどな。

★電波系の俺へのファンレター

俺は自覚のあるキチ●イとして、生まれつき俺を苦しめ続けた幻聴&幻視の症状を細密に告白した『電波系』（太田出版刊／根本敬と共著）や『別冊宝島／特集　隣のサイコさん』（宝島社刊）が刊行された後、俺よりも症状の軽い奴らから無責任な抗議がきた場合、絶対に出かけて行ってそいつの奥歯が全部折れるまで一方的にブン殴ろうと心に強く決めていた。その後にも、十年単位のブランクを置いて相手を完全に油断させておいてから、そいつの孫や子供まで襲って最終的には本人にとどめをさしてやろうと計画を立てていた。もちろんこんな発想がマトモなことだとは俺自身も微塵も思っちゃいないが、30年以上の長年にわたって電波受信による精神的苦痛を経験すると、人は心が荒みきって、とびきりネガティヴな発想や、明確な対象を欠いた莫大な憎悪が自然に育ってくることもあるんだということを〝正常な〟皆さんにも（っても、何が正常なんだか俺にゃあさっぱりわからねえが）知っておいて欲しくてここに書いてみた。俺のように暴力的で執念深くて粘着性の強いキ●ガイと不用意に関わることの危険性というのを少しでも感じて頂ければ幸いである。これは冗談でも何でもない。パラノイアとはそうしたものである。

（写真付き）／ニオイつきパンティ＆下着のプレゼント（女物に限る）／エロビデオの差し入れ／おめ●券同封の〝私と一発やりませんか〟の手紙／「現金」などである。理想と現実のギャップがいかに大きいものかお分かり頂けると思う（まあ、俺のように意識の低い最低の人でなし鬼畜に真面目にファンレターを出そうなどと考えた時点で、そいつはすでにアウトなのだが……）。

さて、俺の見たところ1から3までのタイプの手紙の出し主は、入院歴がどうのと書いている奴も多いが、それを客観視して手紙を書いているという点を考えると、それほど問題のない健全な精神を有した人間だといえるだろう。

この手の連中に問題があるとすれば、「俺のような鬼畜の心配までするお人良しな性格」という点である。心配してくれて恐縮だが、「お前ら、そんなに簡単に他人に共感したり同情したりするんじゃねえ！」とだけは言っておこう。こんなに腐った時代と国で、下手に他者への思いやりなんて持って生きていたら、善意を逆手に取った詐欺に合うだけだから気をつけろ。ハナクソ以下の価値もない「優しい心」なんかさっさと下水にでも流しちまえ。頼むから俺なんかに騙されるなよ！　俺はお前らが一日も早く改心して、俺に「お前電波系なんだってェ？　いいざまだな、俺ァとうに治ったぜ。もっと苦しめ！　苦しめ！　できるだけ苦しんでさっさと死んじまえ、このクソ野郎！」という強靭な憎悪と悪意に満ちた呪詛の手紙を出してくれることを心から望んでいる。病院から〝卒業〟したお前らがこの世で強く生きるにあたって必要なのは、神をも欺く狡猾さと一片の雲りもな

●チガイによるキ●ガイのためのキチ●イ批判
『電波系』のファンはやっぱり電波系？
「思い上がるな、お前が死んでも地球は回る！」

電波系鬼畜ライター村崎百郎

数にすればそれほど多くもないのだが、俺に来るファンレターの半分以上は（書いている内容を信用するならば）精●病院に入院歴のあるという少々個性的な連中である。そして残りの半分近くも、そのほとんどが俺の見たところ、近い将来に輝かしい入院生活が約束されているような素晴らしい個性の持ち主である。そんなふうにキチ●イどもになつかれるのは同じキ●ガイとして嬉しくも何ともないが、これも電波系の鬼畜ライターをやっている以上、当然といえば当然のことなんだろう。

しかし、筆不精のうえに「義理人情指数ゼロ」の鬼畜な俺は、ファンレターにいちいち親切な返事など書いたことなど一度もなく、たまに気が向いても実際に書くのではなく、アタマの中から直接〝電波〟で送っているだけなので、相手がそれを受信できたかどうかはほとんど分からない。そういう意味で、今回の編集部からの執筆依頼は良い機会でもあるので、心あたりのある●チガイどもはファンレターの返事代わりにこの原稿を読んでほ

まえ！　キ●ガイにキチ●イ話を相談するんじゃねえ！　……などと怒ってみても仕方がない。俺もこいつらも同様のキチガ●なのである。こいつらが過度の他者依存を止めて、不器用でもいいから開き直って、根拠なんかなくてもいいから自信を持って、自分のやりたいように生きはじめたら、俺にこんな手紙など出さないだろう。徹底的に人でなしの鬼畜になれば悩まなくて済むのにな。もっとも、それができねえから相談の手紙を書くんだろうが……。

★電波ファンレターの観賞と分析

それでは、次に例をあげて4のタイプの電波手紙を徹底分析してみよう。

読者との信頼関係上（鬼畜の俺にそんなもんねえけどよ）モノホンの手紙をそのまま掲載するわけにはいかないので、ここでは類例として、俺のアタマに直接やってきた電波をいくつかリミックスして多少の固有名詞をずらしたものをモデルタイプとして掲載する。細部はそれぞれ人によって違うが、電波系の連中はどいつもこいつも似たり寄ったりの内容を書いてくるものである。

電波ファンレターの一例（制作／村崎百郎）

謹啓　村崎百郎先生　文久三年の冬以来のおひさしぶりにございます。

私は現在人生の指針について大いに悩んでいるところです。ことは私だけの問題ではあ

しかし、そういう希望に反して現在に至るまで俺のもとに見当違いの抗議の手紙が届くことはなかった（ひょっとして、編集者が気を使って俺に犯罪を起こさせないように握りつぶしてくれていたのかもしれないが）。それればかりか、この鬼畜な俺に賛同や励ましや病院の紹介のお便りが届くのだから、世の中もずいぶんと慈悲深いものだと思った。これでは、まだまだ日本を下品のどん底に墜とすには腐敗が足りない。もっと努力しなければいけないようである。

★電波ファンレターの傾向と対策

俺に届くファンレター（現存する物質として届いたもの&電波で届いた無形のもの）を大別すると次の5つのタイプに分けられる

1　これからもがんばって下さい
2　私も入院していました
3　いい病院ありますよ
4　私の悩みを聞いて下さい
5　言語以前（全く意味不明）

参考までに、俺が貰ってホントに嬉しいファンレターは「私のお●んこを見て下さい

望む声は日増しに強くなるばかりで、最近はいつも気ばかりあせって何も手につかない状態が続いています。

賢明なる村崎先生ならばすでにご承知のことと思いますが、この世紀末には大銀河系を代表する最高次の善霊が転生した5人の人間が、5大陸にそれぞれ一人ずつ現れます。

私はそのなかでも最高位の黄色で、アジアを統一し、星でいえばシリウスを象徴する黄帝＝バラモン＝ゾロアスター＝ケツァルコアトルの生まれ変わりらしいのですが、惜しいかな転生のさなかに暗黒波動にもまれて記憶の一部と経験の45％をなくしてしまいました。そのせいかリモート・ビューイング能力者以外の周囲の人間は親さえも私が大きな使命を背負って生まれたことに気がつかないようなのです。私の出現については世界中に現存する全ての予言書に全て記載されており、聖書はもちろんコーランや法華経などにも予言されており、フランチェスコや明恵やノストラダムスや出口王仁三郎など、多くの覚者によっても予言されています。庭のハイビスカスの花も秋だというのに咲きました。この地上に転生した他の4人の仲間が誰であるのかもわかりません。今すぐ村崎先生に教えて頂きたいのは私を導く「導師」はどこにいるかということです。破壊と浄化の予言された世紀末の審判の日は近いので、どうぞよろしくお願いいたします。本当に悩んでいるのです。

敬具

因業寺大輔（仮名／18才）

い徹底的な悪意である。

　また、正常な人間から見ると、５のタイプの手紙を出す人間が一番深刻で悲惨そうに見えるだろうが、はっきり言ってここまで行くと何をやっても手遅れだろうし、本人もそれなりの境地に達しているので（おそらく自分の中では釈迦やキリストよりも偉くなっている）、社会生活を送るうえでも大きな支障はあろうが、本人はそもそも周囲の反応なんか気にならないだろうから、これも問題なしということにしておこう。死ぬまで自分の妄想の迷宮で踊っていれば、それなりに幸福でいられるのだから、ある意味でこいつらは幸福な連中ともいえる。何も治療によって無理矢理〝正常〟に戻すことだけが、その人間にとっての最高の幸福とは限らない。お前らはヘタに正気に戻ったら悲しくなるかもしれないから、そのまま死ぬまで狂い続けて王様のままで死ねるといいな。

　そして、今回俺が問題にするのは４のタイプの「悩み相談」の手紙を書いてくる連中である。俺にしてみれば、こういう中途半端な「半キ●ガイ」が一番やっかいなのだ。

　いちいち書くまでもないが、こいつらの最大の過ちは、よりにもよって相談相手に俺のような最悪の●チガイ鬼畜を選んだことである。俺は相談の手紙を貰う度に、相談者の馬鹿ぶりに眩暈がする思いだ。だいたい、人を人とも思わないこの俺がマトモに他人の相談を聞いて心配するとでも思ってんのか？　優しい言葉でもかけてくれると思ってんのかァ？　寝ぼけンなよ、このバ～～～カ！　俺は絶対にお前らに同情なんかしねえぞ。ウダウダ悩むなら死ね。鬱陶しいから死ね。どいつもこいつも死にたい奴はさっさと死んじ

る。なぜなら、前世妄想は霊界妄想と一緒で、心霊詐欺の基礎中の基礎アイテムであるからだ。今後も、俺の目の前で俺の前世がどうのこうのと言い出す奴がいたら、俺は言い終わらないうちに絶対にそいつの奥歯が全部折れるまでモノも言わずに一心不乱に殴り続けるだろう。俺は霊を自称する奴らの声は聞こえるし、たまに姿も見えるが、低能オカルティスト（詐欺師）どもの語る霊だの霊界だのは一切信じない。つまらん妄想が見えたり聞こえたりするぐらいでギャアギャアギャア騒ぐなよ馬鹿。人間の感覚ほどあてにならないものはないんだからな。

私は現在人生の指針について大いに悩んでいるところです。

はあ、〝青春〟というやつですかァ？　よくあることですよねえ……。

ことは私だけの問題ではありませんので今回村崎先生に手紙を書くことに決めました。

「お前だけの問題だよ！　簡単に決めるンじゃねえ！　そんな理由で俺に気軽に手紙書くなァ！　俺は深夜放送のパーソナリティじゃねえぞ〜！」と叫びたくなるね。

このようなことを相談するのは常識に照らし合せて明らかに狂気の域に入っている人間のようにも思われますが、全ては地球と人類の未来にかかわる重大な事実なので、どうか最後までお読み下さい。

りませんので今回村崎先生に手紙を書くことに決めました。このようなことを相談するのは常識に照らし合せて明らかに狂気の域に入っている人間のようにも思われますが、全ては地球と人類の未来にかかわる重大な事実なので、どうか最後までお読み下さい。

さて、世の中には他人の心を読んだりできる「リモート・ビューイング能力者」と、できない種類の「普通の人間」がいます。私はリモート・ビューイング能力者なのですが、まだ覚醒度が低くてそれほど強く能力が開花していません。『電波系』を読んで村崎先生も同様の種類の人間だと思いました。

私はこれまで私のまわりの多くのリモート・ビューイング能力者たちから「あなたこそこの世の危機を救うスーパー・リモート・ビューイング能力者=最終世界救世主である」と何度も言われ続けてきました。

しかし、私は自分の人生の指針さえも明確に自覚できない弱い人間なのです。どうしてそのように救世主扱いされるのかわかりません。私は一体どうすればいいのでしょうか?

もしかすると、高次元の主護霊と精神を持った高次エネルギーにあふれた優秀な人間と会って話し合えれば、私は私の使命を理解できると思うのですがいかがでしょうか?

そこで、村崎先生にお願いなのですが私の覚醒を指導して頂けないでしょうか? そうすることが人類の未来のためになると考えられます。でなければ、どなたか優れた高次エネルギー人間を紹介しては頂けないでしょうか? 私のリモート・ビューイング能力はまだまだ不完全で自分の未来さえはっきり分からないのです。多くの能力者たちが私を待ち

のない妄想ってのは傍から見ても魅力がないぜ。

私はリモート・ビューイング能力者なのですが、まだ覚醒度が低くてそれほど強く能力が開花していません。

「ああ、やっぱりそうでしたか、私もあなたがそうではないかと思ってたんですよ！」って思って欲しいのかねえ？　「自分は人より優れた超能力を持った人間である妄想」ってのがこいつのエリート意識（妄想）の中核になっているらしいねえ。全くつまらねえ妄想だな。エリート意識を持たなければ生きていけないのかねえ？

『電波系』を読んで村崎先生も同様の種類の人間だと思いました。

キ●ガイ特有の淋しさからか、この手の連中は、こうやって自分の妄想の中に他人を引きずり込もうとするものだ。同じキチ●イでも、こいつと俺との明白な違いは、「自分の妄想を妄想だと自覚しているか／していないか」だけなのだが、そこが重要なポイントだ。こいつのようにどっぷりと妄想にひたりきっていると、なかなか自分の姿は客観的には見えてこない。もっと自分のことを「どーでもいい存在」と思いながら冷めた目でいいかげんに見ることができたら、こんなに悩まなくても済むだろう。こいつは「現実」が見えないのではない、見ようとしていないだけなのだ。

二度読むと頭痛がしてきそうな悪性の電波文書だが、これは八〇年代後期に発病者の多かった「戦士症候群」の一種であろう。全く罪深い妄想である。返事を考えるよりも、呼びつけて殴り殺した方が早い気もするが、『電波系』のどこをどう読んで俺にこんな手紙を書いてきたのか聞いてみたい気もする。なぜなら『電波系』は、こうした妄想をいかに妄想と認識して、それに取り込まれないように強く生きるかを考える本であったからだ。

　しかし、まあ、本をどう読むかなんて読者の勝手だし、自分に都合の良い部分しか読まないのが我々●チガイの特徴でもある。こんな手紙が何通も来るところを見ると、俺の企画意図はあまり有効に伝わらなかったようである。やれやれ……。

　それでは、気をとりなおして、一行ずつ俺なりに分析して読み味わってみよう。

「謹啓　村崎百郎先生　文久三年の冬以来のおひさしぶりにございます。」

　こいつは謹啓という挨拶を入れているだけマシな方。多くは冒頭から突然相談事を書きはじめるから始末に困る。まあ、礼儀正しければ良いというわけじゃないが……それにしても勝手に「先生」って書くのはムカつくよなあ。たかが鬼畜に敬称なんか付けるんじゃねえ！　いつ俺がお前の先生になったんだよ！　そして、こいつはその後の一文が完全にアウトだ。こいつは〝前世〟とか〝転生〟とかを信じてるタイプなんだろう。俺も電波でそういう記憶が突然流入してきたりもするが、前世妄想は一切相手にしないことにしてい

んなを救う救世主。だけどこんなにも謙虚。どうです、偉くて凄いでしょう？」と得意満面な笑みを浮かべるこいつの面が見えてくる。もしも俺が「死ね！」と答えたらお前ホントに死ぬのか？　その気もないくせに、人に教えを乞うようなペテンをするんじゃねえ！　こいつは自分の望んだ回答が返ってくるまで別な人間に同じことを聞き続けるだろう。

もしかすると、高次元の主護霊と精神を持った高次エネルギーにあふれた優秀な人間と会って話し合えれば、私は私の使命を理解できると思うのですがいかがでしょうか？

何べん言ったら分かるんだ、このド阿呆！　この世に特別な人間なんて一人もいねえんだよ。いいかげんに目ェ覚せよ。何でそうやって自分が「特別な人間」であることを欲するんだ？　「特別」じゃなければ生きてる価値がないのか？　今はまだいいけどそういう「自意識過剰」は二十代前半ぐらいまでで卒業しろよな。「自分にとって自分は特別」ぐらいの意識で満足しとけよ。人は超能力者や救世主じゃなくても充分この世で楽しく生きられる。俺のような鬼畜でさえもだ。

そこで、村崎先生にお願いなのですが私の覚醒を指導して頂けないでしょうか？　そうすることが人類の未来のためになると考えられます。でなければ、どなたか優れた高次エネルギー人間を紹介しては頂けないでしょうか？　私のリモート・ビューイング能力はまだまだ不完全で自分の未来さえはっきり分からないのです。

このあたりもなんか妙に脅迫に近い言説だなあ。「地球と人類の未来」などとハナシが大きくなるあたりが充分イッちゃってるぜ。誰がそんなこと考えてくれってお前に頼んだよ？　お前は人類がどうだとか自分に関係の遠い大きな事柄を考える前に「シロウト童貞を捨てたい」とか「アナ●セッ●クスがやりてえ」とか、もうちょっと若者らしい即物的で矮小なコト考えて悩めよ。自慢じゃねえが、俺がお前ぐらいのトシのときは年間の射性回数は一千回を軽く越えてたぞ。「地球」とか「人類」とか「未来」とか、スケールの大きな語句を並べて、一人で大局的にモノを考えすぎるとキ●ガイの妄想が増幅しやすい環境が揃ってしまうから気をつけな。絶えず目線を高いところに置いて下界を見下ろす気分でモノを考えると、自分が偉くなったような錯覚を起こすから要注意だ。

さて、世の中には他人の心を読んだりできる「リモート・ビューイング能力者」と、できない種類の「普通の人間」がいます。

世の中には他人のパンティを盗んでせ●ずりのオカズにする「下着泥棒」と、盗まない「普通の人間」がいるようなものですかね。そうやって人をばっさりと選別して、この世界を「分かったつもりになる趣味」は、放っておくと「他人が馬鹿に見えて仕方がない妄想」につながるのであんまりお薦めできねえな。このあたりの記述から差出人のエリート意識がムクムクと頭をもたげてきているのが興味深いね。オカルト雑誌の『ムー』の読み過ぎか、超能力モノの漫画やアニメの見過ぎとしか思えないね。ここまでオリジナリティ

賢明なる村崎先生ならばすでにご承知のことと思いますが、この世紀末には大銀河系を代表する最高次の善霊が転生した5人の人間が、5大陸にそれぞれ一人ずつ現れます。知らねえよ。中卒のパープリンつかまえて「賢明」とか言うなよな。しまいにゃ怒るぞ。

私はそのなかでも最高位の黄色で、アジアを統一し、星でいえばシリウスを象徴する黄帝＝バラモン＝ゾロアスター＝ケツアルコアトルの生まれ変わりらしいのですが、惜しいかな転生のさなかに暗黒波動にもまれて記憶の一部と経験の45％をなくしてしまいました。偉いねえ。何だか知らないけど盆と正月が一緒になったような、もの凄く豪華な偉さだねえ。さすがにこの部分は、何度読んでも怒りがこみ上げて手が震えてくるぜ。かける言葉も見当たらないくらい完璧な電波だよ。よくもよくも、こんな陳腐な妄想を人に与えられたもんだ。お前も、こんな典型的な電波を受け取って舞い上がってンじゃねえ！

そのせいかリモート・ビューイング能力者以外の周囲の人間は親さえも私が大きな使命を背負って生まれたことに気がつかないようなのです。

誰も死ぬまで気がつかないと思う。ここは軽い「迫害妄想＆被害妄想」が入っているのでで分かりやすいねえ。「この世は悪がはびこっているので正しい教えは迫害を受ける／真

私はこれまで私のまわりの多くのリモート・ビューイング能力者たちから「あなたこそこの世の危機を救うスーパー・リモート・ビューイング能力者=最終世界救世主である」と何度も言われ続けてきました。

ここはこいつの妄想の成長過程が良く分かる一文。「まわりの多くのリモート・ビューイング能力者たち」ってのはおそらく実在する人間ではなく「電波」だろう。でなければ、他人の言葉がそのまま聞こえないほど症状が進んでいて、他人が何を言っても「救世主である自分に対する賛美の言葉」に聞こえてしまうのだろう。自分が聞きたいと思っている言葉以外、何一つ聞こえないという状態は自分ではなかなか認識できないものだ。

こいつは、「この世には特殊な才能のある人間とない人間がいる」→「自分は超能力者（エリート）」→「自分はこの世界を救う使命を持つ最終世界救世主」の順番に妄想が膨れたようだ。これも「こいつ自身の世界では」というカッコ付きでくるならば、妄想ではなく現実ともいえる。「自分の世界」を救うのはやっぱり自分自身であるからだ。

しかし、私は自分の人生の指針さえも明確に自覚できない弱い人間なのです。どうしてそのように救世主扱いされるのかわかりません。私は一体どうすればいいのでしょうか?

「そうだよ、良くわかってるじゃないか」、などと納得してはいけない。これはこいつ自身が冷静であることを装っている文だ。「それでも私は救世主」という鼻持ちならないエリート意識が全体にプンプンと漂っている。俺には、こう書きながらも「私はあんたらみ

「ああ、そうか！　俺ってこんなにも重要な人間だったんだ！」と思い込むことで、こいつは社会にとって取るに足らない自分の存在を許すことができるんだろうな。そんなに役目が欲しいのか？　黙ってダラダラできないなんて、とことん勤勉な野郎だぜ。

庭のハイビスカスの花も秋だというのに咲きました。

ここだけ意味不明。こいつの中の別の人格が何かを言いかけたのかもしれないな。時々はフッと正常に戻ったりして何事にも断片的で首尾一貫していないのが我々●チガイの特徴でもある。「ハイビスカスの狂い咲きが何かの奇跡を予感したり象徴しているのだろうか？」なんて真面目に考えたらその時点でこいつの妄想に取り込まれるので、ここはそのまま無視してパスだ。

この地上に転生した他の４人の仲間が誰であるのかもわかりません。

よしよし、お前、ホントは友達が欲しいんだな？　正直になれよ、真面目に生きているとそのうちきっと見つかるぞ（ウソ）。その退屈な救世主妄想を捨てればの話だけどな。

今すぐ村崎先生に教えて頂きたいのは私を導く「導師」はどこにいるかということです。破壊と浄化の予言された世紀末の審判の日は近いので、どうぞよろしくお願いいたします。本当に悩んでいるのです。

何でゲス鬼畜の俺がクソ人類どもの未来のために協力しなけりゃならねえんだ？　俺は「救世主相談所」の看板を出した覚えはねえぞ。参考までに言っておくけど、自分は高次元の人間だなんて自称する奴がいたら、そいつは間違いなく詐欺師かキ●ガイなんだから不用意に近づくなよ、尻の毛までむしられるぞ。それと、未来がわからねえのはお前だけじゃないんだから悩むなよな。予知妄想を持った奴らのタチの悪さは、その妄想を自分のまわりにばらまいて自分の妄想を現実化しようとする所にある。破滅の予言を頻繁に語るキチ●イの根底にあるのは「自分が特別視もされず支配もできない世の中なら、いっそ滅びてしまえ！」というとびきり矮小でワガママな思いがあって、そんな奴の妄想につきあう義理も義務も我々には全くないんだから「もうすぐ世界が終わる妄想」は、完全無視しとけよ。確かに世界はやがて終わるだろう――ただし、それは自分がこの世から死ぬときに「自分の世界」が、だ。

多くの能力者たちが私を待ち望む声は日増しに強くなるばかりで、最近はいつも気ばかりあせって何も手につかない状態が続いています。

〝電波〟って奴は、確かにこのようにくり返し囁きかけて人をそそのかすものだ。俺の経験では、そういう時は、スポーツで汗を流すか、猿並みの連続セ●ズリにチャレンジして思いきり疲れると良く眠れるぞ。何も手につかないんなら徹底的に黙って何もするなよ。

いんだからな。書かれた文字を疑え、語られた言葉を疑え、一番悪いのは何か自分以外の者に過度に期待して判断を全面的に他者依存することだ。むやみやたらと他人を尊敬なんかするんじゃねえぞ。全ての文字には嘘があると思って間違いない。俺がお前らを騙そうと悪意を持って文を書いていることを忘れるな」

の救世主は必ず悪の勢力に迫害される／自分は救世主なのに誰も自分に注目しない↓世界は自分に悪意を持っているのだろう↓それでも自分は衆生を救済しなくてはならない↓救世主であることの恍惚と不安が大きくのしかかって孤独を感じる」という定番の図式が見えてくる。他人に「自分が救世主である」ことを語れば語るほど、周囲は引いてこいつの孤独は一層つのり、救世主妄想の症状は進むというわけだ。まあ、どっちに転んでも自分に都合の良い方向にしか考えが行かないのが我々●チガイの特徴なのだ。自覚する以外に解放の道はないが、なかなかそれは難しいんだよなあ……電波の言うことを真に受けて聞いていると、それなりに気分ハッピーになれるからな。「あんたはエライ」って誉められてりゃ悪い気はしないだろうしな。その変わり何の進歩もないぜ。

私の出現については世界中に現存する全ての予言書に全て記載されており、聖書はもちろんコーランや法華経などにも予言されており、フランチェスコや明恵やノストラダムスや出口王仁三郎など、多くの覚者によっても予言されています。

もう見渡す限り、電波、電波、電波、電波、電波の嵐です。まさしく「電波じかけの明け暮れです」ね。文書に限らず、どのようなものを見ても「これは自分へのメッセージである」と思い込んでしまうのは、正常な人間にはきわめて困難な作業ですが、一度キ●ガイになってしまえば比較的楽なのでこうした妄想も珍しくありません。むしろ、このような精神状態のもとでは、自分以外のことを書いている文章を探す方が困難なぐらいです。

電波系的妄想身体論（または純粋妄想批判）

村崎百郎

注意／以下の文章は、私自身が〝電波〟からの防御を意図的にギリギリまで外して、イメージを暴走ぎみにさせながら書いた無秩序な文章です。断片的でわかりにくい部分もありますが電波系の人間の内的心理を表した作品とご理解下さい。

★〝電波系〟の人間

すでに〝キ●ガイ〟と同義語になりつつある〝電波系〟の身体イメージについて語ろう。

私は物心ついてから36歳の今日まで、意識のある状態でほとんど絶え間なく幻聴や幻視を体験してきた〝電波系〟の人間である。

受けとる〝電波〟は、意味不明の雑音から神や悪魔を自称する輩のああしろ、こうしろという明確なメッセージまで多種多様だが、幸運なことに、やってくるメッセージの種類が秒単位でコロコロ変わったり、神と悪魔が同時に何体も頭の中で好き勝手なことを言っ

んな奴はどこにもいねえよ。だいだいお前、そんなに気が遠くなるぐらい偉いんだったら、何で俺みたいなゲス鬼畜に相談するんだよ。そういう矛盾にも気がつかねえのか？同じキ●ガイとして俺はもの凄～く情けないぞ！

以上が電波相談ファンレターについての分析である。

何がこいつの不幸なのか、お分かり頂けたと思う。こいつの発想の根底にあるものは「優秀なもの＝善＝存在が許される／優秀でないもの＝悪＝存在が許されない」という単純で陳腐で醜悪な善悪二元論構造である。要は絶対正義の側に立って自己の存在を肯定しつつ「世界の王様」になりたいんだろう。皆さんも、こいつの中に自意識過剰からくる思い上がりや支配欲やエリート意識の醜さが感じられたら、自分の中にも同じものがないか検証してみるがいい。持ってしまった妄想は仕方がないかもしれないが、それを捨てるのも、全て妄想と分かっていながらもそれを持ち続けて適当な夢を思い描くのも、一応は個人の自由なのだ。

人の心の不安や淋しさにつけ込んで囁きかけてくる〝電波〟の声には耳を貸すな。

最後に、俺にファンレターを書くおめでたい連中に言っておく。

「簡単に人を信じるなよ。易々と他人に影響されるな。文字なんか活字に組まれて本になってるとそれなりにご立派なコト書いてるように見えるけど、言葉なんて大したことな

たりするので、どの〝電波〟も全く信用することができず、これまでも〝電波〟の言うことを真に受けて行動することはほとんどなかった。

しかし、いつでも無視できると言うわけでもなく、こちらの体調が悪いときなどには、頭の中の〝電波〟がうるさすぎて自分を押さえることができず、発作を起こして叫んだり暴れたりする場合もあり、その結果、発作中の私の声に驚いた近隣住民が警察に通報したり、アパートの大家から「今度騒ぎを起こしたら出ていって貰います」という警告書を受け取ったりと言うことは、現在も続いている。

そんなわけで、「客観的に考えて私がキチ●イであることだけは間違いのない事実だろう」という程度の自覚はある。

そして、そういう部分が、他の自覚のないキ●ガイどもよりは多少マシではないかとも思っているのだが、発作を起こして暴れた後に、部屋で自分が壊した電化製品や、壁にあいた大穴などを見ると「やっぱり同じかなあ……」と憂鬱な気持ちになる。

とにかく、幻聴を聞きっぱなしの人間がマトモなはずもなく、キチガイであることだけはマチガイないだろう。

以下の文はそういうことをふまえて読んで頂きたい。

一応はこの文章は発作を起こしていない〝冷静な状態〟で書いているつもりであるが、それでも百パーセントの自信はない。

書いている私が正気かどうかは読者の皆さんが文を読んで勝手に判断して頂きたい。

★どこまでが〝自分〟なのか？

さて、私は基本的には自分の立場しか語れないキチ●イなのだが、一般的な〝電波系〟特有の身体イメージ（妄想）と言うと、「どこまでが自分でどこからが他人かわからない」、「この意識や思考は誰のものだろう」、「自分と他人の区別がつかない」などの例があげられるだろう。

確かに一瞬で厖大な量のイメージやメッセージをともなってやってくる〝電波〟の受信が強力すぎて自分の正気に自信が持てないときなどは、〝自分〟と言うものがとてもあやふやで希薄なものに思えて、何かとまざりあってどこかに行ってしまう不安にかられて、誰かと一緒にいることすら恐ろしくなり、絶えず「自分はどこの誰それで、いまこうしているのはこういうわけがあってのことだ」などと確認しなければ普通に立っていることさえ困難な気分になる。

そういうときは、道を歩いていても、〝自分〟が自分の身体からこぼれ落ちてなくなってしまうような気がして、平穏に歩くことなどできないのだ。

ひどいときは、道にしゃがみこんで自分の体を自分で抱きしめて、〝自分〟がこぼれ落ちないように必死で押さえることさえある（妄想）。

おそらく全ては「キチ●イ特有の妄想」なのだろう。

情けないことに、アタマでは妄想だと分かっていても、身体が言うことをきいてくれないのだ。

私はそういうときに「肉体と精神の乖離」を明確に感じてしまう。

たぶん「〝自分〟が自分の身体から出ていってしまうのではないかという怖れ」は、〝自分〟という精神が〝身体〟という乗り物を操縦している感覚（これも妄想）からくるものだろう。

〝自分〟の操縦する〝村崎百郎〟が〝自分〟とは全く別な、どこの馬の骨とも知らない〝電波〟に乗っ取られて好きなように操られてしまうのではないかという怖れ――これま

で生きてきて〝電波〟の受信で私が最も怖れてきたのは常にそうした事態であり、「せめて自分の身体の主人ぐらいは自分でありたい」と言うのが私自身の最低限の希望だった。

★身体拡張妄想

こうして書いていても、私は自分の中に〝自分〟とは全く別の、無数の異なる〝意識〟の存在を明確に感じる。

それは、自分や〝電波〟について書くことを妨げようとする意識や、積極的に書こうとする意識や、それらに対して無関心な意識など様々である。

当然だが、そういう状況下で思考することは困難が伴うし、果たして私が本来の意味で他人と同じように〝思考〟しているかどうかは大いに疑問である。

こんな状態が長年続いているせいか、たまに私は私のことがどうでもよくなって、「生命の危機」や「社会生活を送るうえで重大な支障をきたす犯罪」さえおこさなければ、自分の中の大部分が〝別のもの〟にすりかわっても、他人から見て〝村崎百郎〟に見えるのだからかまわないかも？　という気になったりすることもあるが、それすらもやはり〝電波〟が与える〝安心妄想〟であることは間違いなく、自分では安易に安心することは危険なことであると理解している。

そして私は現在、書きながら少なからぬ不安を覚えている。

このように〝書く〟のに没頭することは、〝おふでさき〟や〝自動書記〟などと同様に電波を呼び招く行為に近いものがあり、それは〝自分〟の存在と、この身体内部での〝自分〟の支配領域をあいまいにする危険な試みでもあるのだ。

いま、この文章を書きながら、私は次第に自分が「自分と自分でないものの境界線」を意図的にあいまいなものにしていることを感じている。

そうすると、「自分が消えてなくなる不安」以外にも、「自分がこの世界に拡散していく感覚（これもおそらく妄想）」が生じる。

この妄想は受容していてなかなか気持ちの良い部分もあるので救われる。

いつの頃からか、私はそういうときに、妄想で自分の身体イメージを拡張していく一人遊びをするようになっていった。

初めは目に見える自分の身体に沿って数センチ単位に外側へふくらんで広がるだけだったが、慣れると部屋一杯に広がったり、家の外まで行けるようにもなった。

その頃から私の中に自分の身体の毛穴から伸縮自在の無数の金色の糸のようなものがさかんに出ていくという不気味な妄想が生まれた。

これは〝自分〟の意志で制御可能などこへでも伸びていく妄想の神経繊維のようなものなので、便宜上「妄想神経」と呼んでいた。

私はどこまでもするすると伸びていく妄想神経を使っていろいろなところへ〝侵入〟した。

最初のうちは他人の家の中や、他人の頭部に侵入して他人の家の中や人の思考を探査していた。

探査で知った情報が本当なのかどうかはあまり気にならなかった。

妄想神経で知った情報が現実の情報と奇妙に一致することもしばしばあったが、あくまでも遊びのつもりだったので気にもとめなかった。

その当時はイメージで自分の身体を拡張していくと言う行為そのものが非常に快感だっ

たのだ。

やがて、自分の身体の一部を、探査しようとする場所に残していくと、妄想神経を伸ばすのが容易になることに気がついて、自分の身体を持っていった先々で髪の毛を抜いて置いてくるようになった。

私自身の妄想の中では（ホログラム理論ではないが）たかが髪の毛の先とはいえそれは私自身であり、どんなに小さな私の細胞の中にも私自身の情報や意識が全てとはいわないまでも宿っているような気になって、とてもいとおしく思えたのだ。

本体であるこの身体から切り離されても、私は私として身体の一部に明確に存在している。そんなふうな気がしてならなかったのだ。

そんなわけで、私は上京以来18年あまり、都内全域をはじめとして仕事や遊びで行った先々で意図的に髪の毛を何本かずつ引き抜いてはばら撒いてきている。

東は九十九里浜から西は箱根のふもとまで、北は宇都宮のあたりから南は東京湾岸まで、可能な限りいとおしさをこめて自分の身体の一部を行った先々にばらまいてきた。

私はそうやってこの都市に自分の身体をなじませてきたのだ（妄想）。

夜、布団に入って眠りにつくと私は夢のなかで、自分の身体から無数の輝く妄想神経繊維が四方八方に拡散していくさまをありありと感じる（妄想）。

焼かれて粉になって舞い上がった髪の毛もあるだろう。

夢の島のゴミ処理場に運ばれた髪の毛もあるだろう。

それらすべてが私の一部であり、私の一部は塵となって東京上空を舞っていたり、汚水にまじって東京湾の底にヘドロとなって沈んでもいる。

そうやって関東全域に広がった自分の妄想身体が、夜の中で海からの風に吹かれてゆらゆらとゆれるさまを感じるのはなかなかの快感である（妄想）。

そのとき私は妄想神経が通過する建造物や機械の存在はもちろん、他の多くの人々や動植物、土の中の微生物、ウィルスなどの多くの生命体の意識と身体の存在を感じて複雑な感慨につつまれるのだ（妄想）。

ちなみにこの妄想神経繊維は、私の妄想が肥大していくにしたがってさらに成長して、最近では時間も超えて過去や未来にまで届きはじめている。

信憑性など考えたこともないが、受けとるイメージが増えてきたことだけは確かである。

こんなにも厖大で、荒唐無稽な不気味な妄想が生まれたのは、ひとえに「私自身がなくなってしまうのではないか？」という存在の不安が極限まで大きくなった反動と考えられるだろう。

「自分が無くなるくらいなら、世界全体に自分を拡げて、この世界のまるごと全体が自分になればもう安心」という単純な発想からきたものに違いない。

我々電波系＝キ●ガイは、こうした妄想を抱きやすい、極端に自意識過剰な人種なのだ。

★オカルティストの身体イメージ

こうした「身体拡張妄想」がどこからくるものか、もう少し考えてみよう。

たとえば、これは単純に世界の広さに対しての自分の存在の矮小さを自覚したときに感じる〝さびしさ〟に起因するものとは考えられないだろうか（妄想）。

大自然の中に立ち、満天を埋めつくす無数の星がまたたく夜空を見上げれば、誰でもその大きさに畏怖を感じるだろう。

自分の存在や意志とは無関係に広がる宇宙と世界。

宇宙の大きさを考えれば考えるほど、自分自身の存在が完全にカヤの外に置かれているような気がするだろう。

広大な宇宙に比べて何と自分の小さなことか……古のオカルティストがことさら「世界と人間」の間に「大宇宙と小宇宙の照応」という関係妄想をかぶせたのも、そうした〝存在の不安〟が元になっていたことは想像に難くない。

人類が自分たちに対してもっと確固たる自信があれば、わざわざ自分たちの身体の器官と宇宙の星を関係付けるような妄想を持たずとも良かったろう。

ある意味でオカルティズムとは、〝世界にとって自分が特別な存在でなければ許せない〟と言うような自意識過剰な人間たちが、その肥大しきった自我で造り育てた大きすぎる妄想であるとも言える。

そして、これも妄想かもしれないが、私の頭に頻繁に届く神や悪魔を自称する輩の声や意識や思考は、そうしたオカルティストの連中が過去に造り出し、彼らが空間や時間に刻んだ〝強烈な思い込み〟からきているような気がするのだ。

しかし、それらの妄想を〝電波〟として自分の中に呼び込んだり取り込んでいるのはほかならぬ私自身なので、意志さえしっかり持てば一掃できる可能性もあるかもしれない。

★思考物質と妄想身体

また、電波系の私にとっては〝思想〟や〝思考〟も立派な物質であり、存在であり、無形の身体の一部であるという認識がある。

だから、私の思想（妄想？）を記述した文章の書かれたこの本も、私にとっては立派に私の身体の一部であり、私の思考の再生装置なのだ。

読者がこの本を開き、私の文を読んだ瞬間に私の一部は読者の頭の中で再生（または新たに生成）され、私は読者であるあなたの中に侵入して、確実にあなたの一部となって同化して生き続けるだろう。

これを読んでいるあなたはもうすでに私の一部であり、私もまたその関係を通してあなたの一部になる。

書かれたものが残り、それを読み取る人間がいる限り、私の思考身体はどこまでも時間と歴史の中で再生／成長をくりかえすだろう。

そんな不気味な妄想に浸るのも電波系ならではの特徴であり、私には常に世界中で交錯する無数の身体の無限の思考物質や妄想身体たちの交わりを感じて（妄想）目が眩む思いだ。

そして当然だが、私もまた書物を読むと〝私〟とそれを書いた人間の思考や妄想身体とが明確に交わるのを感じてしまう。

だから、こうして書いている私の中には再現された多くの作家やジャーナリストの想い

や思い込みや執念や喜怒哀楽が渾然一体となって誰が誰やら分からなくなっている感覚が常につきまとっている。

一体私は誰と誰と誰と誰と誰と誰と誰の集合体で、いつからどこまで〝私〟なのだろう？　肥大した自我と自意識だけが激しい横滑りをおこして、どこまでも奈落へ墜ち続けているような感覚が常につきまとう。

それが妄想だと知りつつも、〝私〟はなぜか感じることをやめようとしない。

★妄想宇宙身体

自分と他人の区別の妄想についてだらだらと思うままに書いてはきたが、もし仮に、この宇宙の創生についてビッグバン理論が正しいのなら、ビッグバン以前にはこの宇宙の存在全ては一つのかたまりだったことになる。

そうすると現実に生きている人間を構成する物質は、現実の物質も、妄想物資も全ては一つのかたまりであったことになり、その中では誰もが自分であり、自分もまた全ての他人であったという過去が存在することになる。

そう考えると、自分と他人の区別に悩んだり、人間関係に悩んだりすることが馬鹿みた

いに思えてどーでも良くなるのは、これもまた〝電波〟のもたらす妄想なのだろうか？

私は10歳の時に海で溺れて死にかけたときに神秘体験を伴う臨死体験をしている。

その体験の全てを言語化するのは甚だ難しい作業なのでここでは省くが、その中で私の五感が感じ取った無数の電波や幻想の中に次のようなものがあったことを26年後の現在も不思議と良く覚えている。

それは我々の宇宙の創生にまつわる物語だった。

そして、それは我々の宇宙をはるかにしのぐ大きな〝場〟での物語だった。

そこには我々の想像も及ばないほど大きく複雑な〝世界〟があり、そこでは数多くの〝存在（我々の考える〝生命体〟のパターンをはるかにしのぐ複雑な存在／一にして無限／個にして全／などの観念をはるかに越えるもの）〟が無数に生息していた。

その世界にも我々には複雑で理解不可能な個性的な秩序があり、我々の考えるものとは大きくかけ離れた〝社会〟のようなものが存在しているようであった。

そこである個体（と言っていいのかどうかわからないが……）が取り返しのつかないような重い罪を犯した（これも少し違う感覚なのだが適当な言葉がみつからない）。

そして、その個体は、我々の世界で罪を犯した者に罰が下されるように、他の多くの〝存在〟の手によって別の〝場〟に運ばれ、そこである〝力〟によってその個体は爆発／分解／拡散をしたのである（ビッグバン？）。

その結果生まれたのが我々の住むこの宇宙であるという。

バラバラに分裂したその個体は、今もこの宇宙の広がりとなって拡散を続けている。

無数に分解され無限に拡散していくことが、その個体に枷せられた罰であるというのだ。

したがってその個体が贖うべき罪は宇宙のすみずみにまで行き渡っていて、たとえばこの地球では、バラバラに分かれた〝もとは一つの個体〟の部分同士が、動物になったり、植物になったり、人間になったりして、お互いを傷つけあったり、喰らい合ったり、殺しあったりして現在に至るのだという。

分裂した自分同士が未来永劫絶え間なく争い続ける——本当ならば、果てしなく因業な物語である。しかし、こうして文章にしてみると、まるでできそこないの神話か、安いSF小説のような陳腐な妄想でしかなく、書いていても「もう少しマシな妄想を受け取れなかったのか?」と、いたたまれない気分になる。

とりあえず、この妄想が現実とどういう繋がりがあるのか(ないのか?)、私には知ったことではないが、この現実とこの世界が不完全であやふやなものであるということだけは確かなような気がする(妄想?)。

私はこれからも、この〝現実〟という名の〝妄想〟の中を、他の無数の〝妄想〟や〝自分〟たちとともに(死ぬまで/死んでからも)生きて行くことだろう。

それが何になるか、どこへ行くか? 考える余裕も義務も義理も人情も私にはない。

私はこれからも可能な限り無数の〝妄想〟を受容/生成し続けるだろう。

ゲスメディアとゲス人間

全国の良識ある市民諸君、全ての死刑反対論者、神父や坊主、その他の宗教団体関係者、人の心の素晴らしさを信じるヒューマニズムあふれる善男善女の諸君、ボランティアに励み募金箱にお金を入れる心優しい人々よ。そして性善説を信じて疑わない連中にもこれが最低の警告だ。心して聞くがいい。俺が言いたいのは、世の中にはどんな善意も屁とも思わない、決して更生しえない救われない汚れきった醜悪な魂があるという事だ。俺も含めてそういう鬼畜はお前ら善人どもがどんなに善意と誠意を以て向かっても、決してゲスな生き方や考え方を止める事はない。これは途中で改心して自分の罪を悔いるようなぬるい連中の話をしてるんじゃねえ。「口を開けば嘘以外何も言えない」「全ての善意に悪意を感じる」「わけもなく暴力的で破壊的」「あらゆる不正や悪を面白がる」「人の不幸を自分の幸福のように感じてしまう」「言ってる事と思ってる事が全く違う」……以上のような人間のクズはまちがいなく存在する。お前ら善人どもが身を犠牲にどんな美しい行為をしようとも、心を開かない悪意に溢れた腐ったゲス人間がいる事を覚えておけ。

そして、この文を書いている村崎百郎は、おそらくは日本でも最高峰の根性の腐り切って悪意に満ちた腹黒い醜悪な最凶最低の汚穢主義者のゲス人間だ。俺はそのことに誇りと憤りを同時に感じている。いいか、他にどんなやつがいようとも俺が最低だ。俺が一番の

最低だ。だが何で俺ごときが最高の最低人間なんだ？　お前らレベルが低過ぎるぞ、反省しろ。善人どもに告ぐ、これから俺が書く最低の文章もまた人の心の暗黒面としてこの世に確実に存在するものと知れ！

恐怖のゲス人間

それでは、まずゲス人間について説明しよう。

俺自身がゲス人間として最高の見本なので、最低のゲス野郎というのが普段どんな事を考え、行動しているか、その隠された内面世界を一挙公開だ。

業が深いのか、俺にはもともと体質的にゲス人間として恵まれた素質があったと思う。その素質とは、生まれつきの電波系（頼みもしないのに脳内にいろいろな電波が届き、神やら悪魔やらの声が常時聞こえるラジオいらずのナイスな体質。もちろんＮＨＫと同じく受信料は払ってねーよ）で、ちょっと幻視系（気を抜くと突然目の前に極彩色のサイケな抽象画像がだらだら見えるドラッグいらずのグッドな体質。映画観てる時コレが始まるとツライんだけどね、セックスの時は綺麗さ）というわけだ。

加えて、これは脳や神経がイカれているせいかもしれないが、何かを見たり読んだりして、それに対して一つの感情を持つという事ができない。何かを見るとその一瞬で数多く

の複雑な感情や思考が心の中に溢れるのだ。それは決してコントロールできない。

うんと簡略化して例をあげてみよう。たとえば道端で小猫を見かけたとする。「あっ、かわいい」「ふーん」「みにくい」「だからどうなの」「殺したい」「石をぶつけたい」のような対象と関係のある簡単な感想から始まって「猫でオ●ニーできるかなあ」「飼い主探してケリを入れたい」「●●に金借りてたな」「日米貿易摩擦問題は最近とってもセクシー」「ああ、この瞬間全世界で死んだ人が８人。内訳は男が３人、女が４人、ち●こを切ったおかまが１人。踏み殺されたもぐらが１匹。屠殺された動物は……」「そういえば12年前の５月12日に俺の汚い格好を見てさげすみやがった●●●、突然憎いなあ。あと２か月ぐらいたったらアリバイ練りあげて襲撃しなくちゃ」「いま爆発した星がある」「ラーラララー、ラーラララリラリラー（めちゃくちゃな曲）」「キンコンカンコンカン（どこかの教会の鐘？）」「おとうさんはお前を信じているぞ」「４６３８ＡＢＫ２４ＡＬＧＭＯＲ３ＹＸ……」「き●玉のウラのスジがいいっ！　もっとナメて！！」「この世界では1+1が4になる事がある」「三日とろろなんてマズくて喰えねえよ」「30分待った。先にヒヒノケツ上流で待つ」……などなど性的な事や社会情勢、記号、音や匂い、意味不明のささやきなどが洪水のように絶えず頭の中に押し寄せてくるのだ。説明しにくいが「どこかで誰かが欲情している音」さえも聞こえてくる。むし暑い夏の夕夜などは東京じゅうの若いオスやメスが欲情して発する淫波に頭が痛くなる。幸いな事に、現在の俺はＴＰＯをふまえて感情を選び行動できるので、昔のようにすぐ暴れたりはしない。

ただ、そうしてさまざまな感情を想起できても、その感情を実際に実感として感じることができない。特に罪の意識などはいくら罪を重ねても、それを注意されても「悪い」というのはわかるし、謝罪もできるが、心から「悪かった」というのを実感できない人間である。感情に浸るという事が、どうしてもできないのだ。だから無感動な人間でもある。

日常生活はかなり気を使っている。行動だけ見れば、俺は単なるどこにでもいる善良なあんちゃんである。他人の迷惑になる行為は極力慎み、横柄な態度は人前ではとらない。なるべく謙虚につつましく生きる事を信条に、道でお金を拾ったらネコババなどせず正直に届ける。寄付や募金を乞われればこれに応じ、バスや電車ではお年寄りの方に席をゆずる。人前では不正や悪を憎んでみせるし、ゴミの分別も几帳面に行い、正しく納税し、警官に呼び止められても嫌な顔をせず、権力には媚びへつらい、行きつけの定食屋では巨人ファンのふりをして、近所のおばさんたちへの挨拶も欠かさず、いつもニコニコして良き市民として平和に静かに暮らしている。「見た目は普通の人間だが、その実心の中はドロドロで鬼畜」というライフスタイルが俺には一番かっこいいゲスな生き方なのだ。バカにされてもヘラヘラしよう。心に臭いうんこを秘めた人間というのは、他人に少し抜けているバカだと思われるぐらいが丁度いいのだ。

そんなわけで俺の内面世界はドロドロのキ●ガイだが、運が良いのとずる賢いので、まだ精神病院からスカウトが来た事はない。多分、いま病院内は良い選手で一杯なのだろう。

汚穢主義万歳！

そして俺は小さいころから美しいもの、綺麗なもの、自由、平等、博愛、正義、善意などという全ての良いことが好きだったが、同様に醜いものや汚らしいもの、けがらわしいもの、臭いもの、人間の行う裏切りや野蛮で下品で卑怯な行為、ずるがしこいこと、全てのおぞましくて醜悪なことを見たり聞いたりするのが大好きだった。矛盾しているじゃないかと指摘されそうだが、それは多分、俺の気が狂っているせいなんだろう。

そういうわけで汚いものが好きだから俺はＴＶのワイドショー番組が好きだ。ただ誤解しないで欲しい。決してワイドショーが下品だと言っているのではない。並外れたゲス人間のこの俺が、ゲスな妄想を一番楽しめるのがワイドショーだというだけだ。決して皮肉で言ってるんじゃないぜ。くっくっくっ。日本一下品なゲス野郎の俺が高く評価しているのがＴＶのワイドショー番組だということだ。けけけけけけっ。

これからそのワイドショー番組の魅力について一緒に考えてみよう。

ワイドショーが持つ暴力性や下品さはいつも最低で新鮮だ。「言論の自由」「報道」という大義名分のもとに行われる下品蛮行の数々はとても正視にたえないと上品な知識人たちは言うだろうが、ゲスな俺にはワイドショーは最大の娯楽であり、俺はこれに対して最

大級のどんな賛辞もおしまない。
最近の芸能人の色恋沙汰の報道は、事務所とも綿密な打ち合わせ済みの宣伝を兼ねたデキレースの場合が多いから大人しくて盛り上がりに欠ける。そのせいか去年の暮から年明けにかけては事件報道が異様に盛り上がっている。ヤラセっぽくないのが受けるのだろう。そういえば連続幼女殺人事件の容疑者宮崎勤の父親が自殺していたそうだが、彼を死に追いやったのは間違いなくマスコミ報道と我々世間の目というやつである。俺も人を殺したようでまんざらでもない気分だ。ワイドショーのスタッフや報道関係者はさぞかし寝覚めが良かったろう。「今更自殺しやがって」「フン、あてつけがましいったらありゃしない」俺の脳にはそういう連中の怒りの声が電波でビンビンに届いていた。
つくばの母子殺人事件の報道は特に凄かった。被害者の殺された母親の過去が必要以上に暴かれて連日報道され、被害者だか容疑者だか分からない状態だった。殺された上に過去まであばかれてもう踏んだり蹴ったりとはこの事だ。俺は事件そのものよりも連日の憶測ノゾキ報道の方が面白かった。弥次馬が何百人もつくばの被害者宅へおしよせて、とうとう弁当屋が出たという、ほのぼのした心暖まる醜い話が好きだ。
悲惨な事件も娯楽番組のネタに成り下がるんだから、この国の下品さもまだまだ捨てたもんじゃないってとこか。ワイドショーの撮影スタッフやクルーの横暴さってのは決してＴＶじゃ放送されないから凄いんだってなー。とにかく断わりもなくマイクとカメラを向けて強制的に撮影しちまうんだから強●よりタチが悪い。

だいたいワイドショーのやりくちというのは卑怯卑劣非情非道と四拍子揃った鬼畜行為で成り立っているので見ていて楽しい。事件の被害者や遺族にマイクを向けて「いまの気持ちを一言で言うとどんな感じですか?」というおきまりの質問は、いつ見てもゾクゾクするねえ。「見て分かる質問するなよ、馬鹿!」としか思えない酷い行為だが、みんな素直に答えている。そういう質問は視聴者が知りたいからしているのだということらしい。いったい何時からこの国の住人は、人が家族を亡くして号泣している光景を見てその気持ちを思いやれない馬鹿に成り下がったというのだろう。それを「視聴者は真実を知りたがっている」の一点張りでマイクを向けて「いまの気持ちは?」という質問をくり返す鬼畜女性リポーター。「もう、かんべんして下さい」と泣きだす遺族の姿を執拗に追いかける非情な鬼畜カメラ。そのウラに視聴率のことしか頭にない鬼畜プロデューサーと自社製品の広告効果しか頭にない鬼畜スポンサーというのが揃っている。こいつらの汚れきったドス黒いオーラの色もいいねえ。日常生活ではこれほど愚劣で醜悪な行為や構造はめったに経験できないので、ゲスな俺はひたすら興奮するぜ。行為が醜悪であればあるほどゲス人間は興奮するんだ。いいよ。だいぶいいセン行ってるよ。あんたらも俺と同じ人間のクズなんだね。愛してるよ。

そして、ワイドショーの最も醜悪な部分は、本気かどうかは分からないが出演している連中に正義の報道行為をしている意識があるということだ。

これは、番組の取材中のトラブルなどでときどき明らかになるものだが、芸能人にゲス

呼ばわりされたりするとリポーターも司会者も本気になって怒るから驚きだ。だってゲスだろ？　基本はノゾキ趣味なんだし、怒る必要なんてないじゃない。素直に「俺はゲス野郎だ」って認めて下品にやればカッコイイのに、何でわざわざそれを否定するんだろう。ワイドショーがニュースと同じ「報道番組」だなんて思われてるとでも思ってるんだろうか？

ワイドショーの良さはニュース番組よりも下品で下らない所にあるんだから、そこをしっかり認識しなきゃダメだね。まあ、俺はワイドショーが見苦しく「報道」を名乗る場面が一番面白くて興奮するからいいけどね。

リポーターはアーティスト？

そして芸能リポーター達は、俺のようなゲス人間にはスーパースターである。彼らの言動や活躍には、いつもガラにもなく少年のように心ときめく俺だ。なんといっても梨本勝氏はウルトラマン並みの超ヒーロー。もう十数年来のファンだ。梨本氏は俺のまわりのゲス人間にも大人気で、俺の勤務していた工場の三時休みでも、ワイドショーの記者会見の場面で梨本氏の質問の声が聞こえると、みんなで「それ行けーナシモト‼」「やっちまえ‼」「いいぞ梨本！　ガンガン行ったれや！」とやんやの声援がＴＶに向かって飛んだ

ものだ。エネルギッシュで精力的な所がたまらない魅力でデブ専ホモにも大人気だったけど最近スマートになってきて俺としては健康面でちょっと心配。長生きしてほしい人である。

あと、特に俺が好きで敬愛してるのが須藤甚一郎氏。品性と趣味の良さがにじみ出ている下品な顔がシブい魅力なんだよねぇ、年くったらああいう顔になりたいもんだ。ヘビかナメクジみたいなねちっこい声も一流だし、いやらしい質問の間の取り方なんか最高だよ、ホントに芸術的で絶品なんだから。梨本氏が体力で攻めるタイプなら須藤氏は技巧派かな。とにかく彼らクラスの大物が参加する記者会見は一味も二味も違うから見逃せない。

この梨本氏と須藤氏に、若手ナンバーワンの井上公造氏を加えた「トリオ・ザ・地獄耳」という座談会が「東京スポーツ」に不定期に掲載されるんだけど、これぱもうゲス人間には絶対必読！　親の死に目より重要である。いつだったか一面トップで、統一教会での合同結婚式が話題になっていた桜田淳子の「結婚まで純潔を守った」という発言を受けて「緊急座談会　桜田淳子34才処女説を検証する」というのがあったが、もの凄いインパクトだった。仮にも新聞を名乗るメディアがこんな話題で一面使って「緊急座談会」とは最高だ。三人とも「冗談じゃない！」「34にもなって」「ふざけるものいいかげんにしろ！」って怒りまくってたけど話し手の熱意がヒシヒシ伝わる本当に良い記事だった。

他にも良いリポーターはいるが、俺はこの二人が特に大好きだ。とにかく芸能ニュース

はリポーター次第で、彼らの質問は非常に高度な技術を要するものである。やばい質問を切り出すタイミング、間の取り方、回答の矛盾点を鋭く指摘する頭の回転の早さとつっこみ技、高い知性と教養がなければ行えない仕事である。このような高度な技術が芸術として正当に評価されないのはこの国の文化情況が貧しいためだろう、本当に残念だ。そのへんのつまらない文学や映画の類よりもワイドショーの意義の方がよほど芸術的で重要である。それは俺が保証する。リポーターの皆さんは、どなたも高い知性と教養を持ち合わせた方々で本当は皆、善良な知識人なのであろう。それをあえてひがみ根性まるだしの下品で低能ゲス野郎の我々視聴者の為に、自らの品性を鬼畜にまで落として我々に娯楽を提供して下さっているのだ。これを感謝もせず「くだらない、下品だ」と批判するのはあまりにも人の善意を侮辱した非人道的な行為というものだ。番組スタッフ、スポンサー、ワイドショーに関わる全ての方々にこの場を借りて心から感謝したい。ありがとう。貴方達のおかげで俺達は下品な妄想にふけれます。本当にありがとう。貴方達のおかげで俺達は身も心も腐りきったうるおいのあるゲス生活を送れるのです。

妄想誘発インタヴュー

しかし、ＴＶのワイドショーは残念ながら俺のようなゲス人間にはいささか上品すぎ

る。

たとえば男性芸能人の愛人の釈明記者会見があったとしよう。

★例

リポーター「●●さんとは男と女の関係だったんですか？」

女優　「……はい」

ワイドショーでよくある質問と回答である。もちろん、ゲス人間の俺はこの短い会話からも充分ゲスな情報を脳内電波で妄想できるが、多くの視聴者はそんなに妄想力があるとは思えない。以下は、俺のようなゲス人間がこの会話から一瞬で受けとる妄想の受信例である。本当はこんな大人しい妄想ではないが、一応やや上品なものに抑えた。

★脳内電波による妄想受信例

「●●さんとは男と女の関係だったんですか？」

（何とりすました面してやがるんだ、やったか？　やったのか？　やったんだろお前。わかってんぞこのクソが。すかしてんじゃねえ！　やったって言えよ。それも一発や二発じゃねえだろ、あそこがすり切れるくらい何度もハ●狂ってんだろが！　俺はそんなもんどうでもいいけど番組をご覧になってる全国の視聴者様はおめーらがどんなオマ●コやっ

たかどうか気ンなって夜もろくすっぽ眠れねえんだとよ！　さっさと吐けよこのド淫●が。オイオイ何様のつもりだよ舞い上がってんじゃねえぞ、こんなに大勢呼びつけやがって会見ったってただのお●んこ話じゃねえか聞かされる身になってみろよ、全くたまんねえぜ！

　あーあ、お前、臭いだろ？　臭いだろ？　あそこ臭いだろ？　こんなに離れてもニオッてくるぜ。臭えんだよ、匂うんだよ、たまらねえんだよ‼　オラオラオラオラどうしてくれる、どう責任取ってくれんだよ！『良き先輩で尊敬する人です』なんて答えじゃあ、俺も視聴者も日本中が納得しないぞ！　ま●わったかって聞いてんだよ！　そいで●●のチ●ポはそんなに良かったのかよ？　太かったか？　長かったか？　硬かったか？　うっとり思い出すんじゃねえ！　てめえら脳なしどもの倫理のカケラもないうす汚ねえま●わいでこの国の風紀やメディアが汚れるんだ。ちったあ恥を知れや！

　だから下品で無知無能で猿にも近い無教養な視聴者のバカヤロどもが一番知りたいのは、てめえらの退屈な歌でも貧しい芸能活動でもなくて、うす汚ねえ性生活の全てなんだよ。どーやって口説かれて股開いたんだ？　最初に●●とま●わったのはいつだ？　どうせお前から誘ったんだろうが！　その時試した体位は？　持続時間は？　愛してるんなら全部言ってみろよこの恥知らず！　やった体位が正常位だけだなんて誰も納得しねえぞ！

　まさかこの後に及んで清純面するんじゃねえだろうな、きょうびお前ら芸能人が清いなんて幻想持ったお目出たい馬鹿は北は樺太から西は満州（ねえよそんな所）、南は南極ま

で人はおろか犬猫馬糞だって本気で信じちゃいねえぞ。
　なあ、お前らケダモノは当然だろうけどフ●ラチオもやったよな、根本までしゃぶる生●尺だよな、口内●射もスペ●マゴックンも顔●もみーんなやりつくしてるよな！　どうなんだよ！　●●の臭えマ●汁はどんな味がしたよ？　飲んだんだろ？　この恥知らずの超●乱因業地獄牝犬牝豚性●野郎が！　お前らが泊まった部屋にバ●ブやらロ●ターやら大人のおもちゃが散乱してんのを見たって奴までいるんだよおい、元清純派のくせにア●ルまで開発されてどういうつもりなんだ！　お母さんにすまないと思わないのか？　俺だってお前の実家に行って「娘さんは恥知らずにも●●にけ●の穴を調教されてア●ルセ●クスまでしていたようですが、どういう教育したんですか？　このぶんじゃあ、ホテルで刺身の出前取って女体盛りぐらい平気でやってますよ、ええ、もちろんワカメ酒も。ご近所の皆さんも心配しています。ところで今の気持ちを一言で言えば？」なんて聞くのはもう嫌なんだ。だから頼むからバイブぐらい片付けてけよ！　マン●リ返しであそこナメられてよがってんじゃねえよ！　どうだったんだよ、イッちまった時の快感についてできるもんなら２００字以内にまとめてみな、どうせ漢字もろくすっぽ書けないノータリンのバカヤロ様なんだろうが。俺はこれでも国立の大学出てんだぞ。その俺が何でてめえみたいなカエルよりも馬鹿で頭の悪そうな芸のかけらもねえ脳なしジャリタレにへりくだってこんなくっだらねえ質問しなきゃならねえんだ。俺だってこんな一所懸命やったってのぞき趣味って馬鹿にされるようなクソ番組好きでやってんじゃねえぞ。どうせ百年たったたっ

て人間はおろか犬にも評価されねえ事ぐらい承知してるよ。できれば政治部の記者とかニュース番組のキャスターとかちゃんと「ジャーナリスト」って世間様が認めてくれるような報道やりたかったよ！　あっ、おい！　お前、いま●●とのセ●クス思い出してやがったな！　俺の質問を何だと思ってる！　畜生、あああああ馬鹿馬鹿しいっ！　俺の人生を何だと思ってるんだ！　こうなったのも全部おえめえらのせいだ！　野放図にさかりやがっていいかげんにしろ‼

あ、しかもお前、俺の事馬鹿にしてんな、見下してるんだろ？　冗談じゃねえぞ立場考えろよ勘違いするなよ俺はおめえみたいな爛れ切ったお●この臭い女なんかと寝るような趣味はねえぞお前のあそこにち●ぽこ突っ込むぐらいなら肥溜めに飛び込むわ。うす汚い期待すんじゃねえこの好きもんがあ！　別に●●じゃなくても誰だって良かったんだろうがそんなに好きなら馬でも飼えよ馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿。

オラオラ、どっち向いてんだ、カメラはあそこだよ、ブラウン管の向こうから何千何万という無知で下品で醜悪な視聴者の皆様が期待に股間を濡らして馬鹿面下げて見てくださってるんだ！　日本は湿地帯なんだよ。わかってんだろ早くハメましたって言えよグズグズすんじゃんえこの日本のクズがあ‼……（キリがないので後略）

「……はい」

（うっせえな！　下卑た面で言いにくい事遠回しに聞くんじゃないわよ！　このゲス野郎。いい年こいて何やってんだよ。やれやれあたしゃ馬の糞かよ、こんなハエ以下のウジ

みてえなゲス人間にたかられてさ……情けないなア、仕事とはいえ年がら年中何聞かれてんだか……何だよ何偉そうに人に訓たれれる立場かよ。年がら年中人の不幸と下ネタ追い回して恥を知れよな。あんた子供いるか、いたら泣いてるぞ。あたしら他人のおま●こ話で飯喰ってるくせに頭が高いんだよ。屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑屑日本の屑。恥恥日本の恥。あたしは、あんたらノゾキ野郎とは根本的に違うトレンディでクリエイティブなアーチストなんだからもっと口の聞き方考えてよね！　あんまり気安く近寄らないでよ下品が移ったらどうすんのよ。それにあんた、その眼は何よ、物欲しそうにどこ見てんのよ！……はああ、あんた私をオカズにして抜いてるんでしょ！　ああキモチ悪い、いくら私が魅力的だからってこんな下品な顔したゲス親父に、たとえ妄想とはいえからだをけがされるなんて本当に私って何てかわいそうなんでしょう！　何妄想してんのよこのウジ野郎！　祖●ンのくせに何よ！　あんた絶対仮性包●でカ●裏に恥●がびっしりたまってるタイプよ、ああっ、冗談じゃない、イカくさいわ、不潔よ！　不潔だわ！　これって、ぜえったい理不尽よ！　悲劇だわ！　でも唐突だけど私より人気があるアイドルや女優が憎い！　本当に死んでくれないかなー。私以外のアイドルも女優も一人残らず死ねばいいのよ。ああ事務所にもっと力があれば殺し屋でもやとって憎いライバルの顔に硫酸ぶっかけてもらうのにな。歌手は念入りにノドも潰してもらおうっと。どっかごついヤ

クザの組がケツ持ってくんないかなー。これでヘアーヌード写真集出せば今年イチバンの話題ね、落ち目女優の腐ったヘアーヌードなんか目じゃないわ、男性誌のグラビアは総ナメよ、全国何千万の若い男性のオ●ニーのオカズになるのね。私のヌードでどれだけたくさんのスペル●が流れるのかしら？　うふっ、精子で一杯のプールがあったら凄いだろうな、そいで周囲一キロはイカくさいだろうなっ。ところで本当にちゃんとカメラうつってるんでしょうね！　それが会見より重要なんだから！　私の美貌ちゃんとお茶の間に届けてよ！……ったってこういう番組見てるのは若い男の子なんかじゃなくて、家庭入ってヒマこいてブクブク太った、とうに女辞めてる醜いブタが大部分なんだろうしぃい、まあ、いっかあ……あーあそこがうずくわたまんない、不倫が何よ、私は女優だから何をやってもいいのよ、不倫の一つや二つは芸のコヤシよ、今度は誰を食べちゃおうかな●●さんのアレはもう飽きたわ。バ●ブもいいけどア●ルはね、……ああっ、みんなが私を観て欲情してるんだわ！　私と●●さんのセ●クスを想像してち●ぽこをしごいている人がたくさんいて凄いわ！　みんながわたしのあそこを夢見て精●を飛ばしているんだ！　みんなの激しく荒々しい息づかいが聞こえる、ああっ！　白濁した臭いものが波のように押し寄せてくる、こんなビッグウエイブは10年に一度よ！　私、精●まみれで今すぐ妊娠してしまいそう！　紅白に呼ばれるかしら？　その時妊娠してたらヤバイな。日本中が私に釘付けよ。でもとにかくとりあえず、だれでもいいから男が欲しい！　アレが欲しい！　太くて硬いすごいのが今すぐ欲しい！　誰か、突いて突いて突きまくってェ〜！……（アホらし

いので後略）

ゲス人間が夢見る理想のワイドショー番組

無理を承知で妄想すれば、ゲス人間が夢見る理想のワイドショーとは次のようなものだ。とにかくやってる事は鬼畜なのに、全体にうわべは上品すぎるので、そこを改めて欲しい。

★まず、メインの司会者の顔を、上品な連中じゃなくて、もっと脂ギッシュで品性の下劣さが顔に出ている感じのイイ顔の親父&ババアにする。発言も、全て嫌味たっぷりの押しつけがましいものにして、口汚くやっかんだりひがんだりして人間の醜さをあますところなく見せて欲しい。また、鬼畜ワイドショーの司会者が「正義」だとか「良識」を口にするほど見ていて笑止千万なものはない。そんな事を言われてはシリアスなゲス番組が、たちまちお笑い番組になってしまうし、誰もゲス司会者にそんな良識ある発言など期待しないので発言は不謹慎で下品なものに限る。

★リポーターにはもっとダーティで下品なヒーローを演じてもらおう。発言は超下品でズル●ケたイカくさいものに限らせる。格好も、男は上半身は裸にネクタイのみ、下半身は縞のサルマタか褌一丁（又は未開人が良く付けてるペ●スケース）がいいし、顔や肌にギ

トギトのアブラを塗って見た目の下品さをチャームポイントにしよう。女はなるべく若くてケバい日焼け茶髪のイケイケ●スがいいな、そのほうが醜い庶民のひがみ根性が反映できていいぞ。持たせるマイクも勃起して血管の浮かび上がったぺ●スを型取ったものがお似合いだ。（バ●ブレーター機能付きならモアベター）。男女関係の突っ込みなら「大人の関係」なんて言葉は使わないで、「おま●こ」が言えないのなら最低「やったのか」「一発キメたんだろう！」ぐらいは言って欲しい。芸能人がそれを認めてもそれでやめないで、その時試した体位、持続時間、フィニッシュの情況、アナ●セ●クスの有無、アクメの瞬間に見えた向こう側の光景などを根掘り葉掘り追求するべきである。リポーターがみんなで寄ってたかって押し倒して服を脱がせてマイクであそこを●すぐらいの光景は見たいもんだねえ。

★ゲストコメンテーターには、もっと下品な妄想力の優れたゲス人間を呼ぶ。そこで気が遠くなるような下品な妄想を無責任にだらだら語らせる。専門的なゲス話というのもなかなかいいもんだ。とにかくニュース番組じゃああるまいし、真面目な発言なんて一言だって聞きたくない。

★事件報道はもっと過激に。被害者や加害者の家族に対する攻撃は「土足で踏み込む」という字の通り、本当に家のドアを蹴破って土足で居間まで踏み込んで強制的にやって欲しい。加害者の家族はとりあえずジジババから0歳児に至るまで全て袋叩きかな？　俺は「真実の報道」の為なら何をしてもいいというあんたらの気合いがぜひ見たい。ネチネチ

とした質問も、加害者の家族をその場で発作的に自殺に追い込むぐらいの暴力的なものが望ましいね。ゲスジャーナリストならそんな自殺風景をぜひとも中継してみたいだろう。
　そしてカメラには、加害者の家族を自殺に追い込むたびに、おチャメな自殺マークが貼られる。そのマークも20や30は当たり前だ。１００まで届いたら、俺がゲス人間を代表して「惨一等肥後ずいき勲章」をやるよ。
★「芸能人のお宅拝見」コーナーは退屈なので、「アイドル歌手のうんこ拝見」に変更して、リポーターは便所のドアをむりやりあけて用便中のアイドルを便座からひきはがし、便器の中のうんこをわしずかみにしてカメラに突きつけ「うっわあー、くせえ！　可愛い顔してとんでもねえ太い一本グソひりだしやがるぜこいつー！」というのをやってほしい。この時、アイドルには嘘でも恥じらって泣いてもらう。うまく恥じらって見せれば人気急上昇は間違いなしだな、けけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ（笑）。

　要はこうしたＴＶのワイドショー番組を評価するのは俺らゲスゲスのゲス人間達なんだって事を言いたいわけよ。俺は下品で醜悪な人間が大好きだ。そして下品で醜悪な人間達の愚劣で卑劣で醜悪な行為を見るのが大好きだ。俺は、「それら人間の弱さや情けなさや醜さを見る事が出来たとき、初めてその人間の事を理解して愛せそうな気がするんだ」なんて一昔前の安い芝居や文学みたいなたわ事は言わねえぜ。とことん見たいだけだよ。要はひまつぶし、ただそれだけだ。悪意だよ、ただ純粋な悪意からなんだよォ！

ゲス人間に栄光あれ！

さて、この年末から年明けにかけてＴＶのワイドショーは実に充実した活気に満ちたものだった。何せ、良い事件が目白押しだ！　この国にも確実に下品の波がおしよせてきているようだ。国家にしろメディアにしろ、リンゴにしろ、ぬか味噌にしろ、ものごとが腐っていくのを見るのはけつの穴から臓物を引き抜かれるような、何とも言えない快感だなあ。ひひひひひひひ……俺はもっともっと腐った夜が観たい！　品川駅構内での医師射殺事件、つくばの母子殺人事件、いじめ自殺の同時多発、八戸の地震っていうのもあったな。犬の調教師による大量殺人事件……夕方のニュースで悲惨な事件が報じられるとき、多くの人間は食堂や家で晩飯のオカズにそれを見てる。そんな飯が美味いか？

ワイドショーの連中はこれから何人の善良な人を泣かせて自殺に追い込むんだろか？　どれだけ多くのゲス人間の退屈を癒してくれるんだろう？　せいぜい頑張れよ、罪の意識は一緒に持ってやるからな。淋しくなったら糞でも掴めよ。

そして、ワイドショーばかりじゃねえ。全てのマスメディア、官公庁の報告書、ミニコミ、壁新聞、ガキの学級新聞のたぐいまですべてのメディアに宣言する。すかしてんじゃねえ！　お前らがどんなタテマエのもとにいかに上品な文章を載せようが、俺達ゲス人間

はそこからいくらだってド最低の情報を妄想できるんだ。どんなに心暖まる上品な美談を紹介しようが、そこからいくらだって便所の底を突きぬけて地球の裏側までとどきそうな下劣な物語を妄想できるんだ。もう一度言う、すかしてんじゃねえ。お前らが上品か下品かなんてのは俺の心掛け次第なんだよ。誰も人が心に想う事を止めることはできない。妄想力は人間に残された最後の下品な可能性だ。糞尿が溢れる黄金の大海原を夢想した事はあるか？　空いっぱいに飛びかう善男善女の淫波を脳で受けとめた事はあるか？　糞の匂いの中には最も人間的な温かさと醜さが同居していて心地良いんだ。
さあ、あんたも来いよ。俺は肥溜めの底で待ってるぜ。

村崎百郎（むらさき・ひゃくろう）元工員

ヒステリー女の魅力――内なる混沌を抱えたもの

村崎百郎

「ヒステリー症の女の子は魅力的だ。何をしでかすか予想がつかないから、恋人にして付き合うと毎日がスリリングで面白い」――なんてことを書くと、精神科医のセンセイ方から「何を無責任に呑気なことをほざきやがって！」と叱られそうだが、無責任ついでに言わせてもらえば、相手をする男の方に少々の覚悟と体力があるなら「恋人にするなら断然ヒステリー女だ！」というのが二十代前半までの俺の人生の金科玉条だった。男のヒステリーは論外だが、女のヒステリーは病気かも知れないが決して愛せない種類の病気ではない。むしろ付き合う男の度量が試される病気といえよう。本稿は、「いままで付き合った女のほとんど全員が巫女系のキ●ガイ女ばかりだった」という俺の、みっともなくも情けない最低の体験談だ。こんなゲス話が精神医学の役に立つとは到底思えないが、たまにはこういうギャグを読むのもいいだろう。笑いながら心に余裕を持って人間存在のありかたでも考えてみてくれ。

愛した女はヒステリー

さて、ヒステリーといってもいろいろあるだろうが、俺がこれから本稿で紹介する「ヒステリー女」とは、もちろん厳密に精神医学用語に基づいてカテゴライズされた各種の症例全てを合わせ持った女のことではなく、一般に「ヒスをおこす」などという言葉で理解されるような、激しく怒ってかんしゃくを起こしたりするタイプの、ド派手な症例を持った連中のことをさすものだ。そのへんの曖昧さも承知して読んでほしい。

そういう意味での「ヒステリー女」のいちばんの魅力は、彼女たちの持つ独特の「激しさ」である。そばにいるだけで、こちらの肌にビシビシと針が刺さるように伝わってくる彼女たちの「激しさ」は、感情の実感が希薄な、俺の様なサイコパス傾向の強い人間にはとても刺激的なのだ。彼女たちが感情を爆発させるのを見る度に、俺は心の中のある部分で「ああ、人間ってあんなふうに怒ったりできるんだ」などと余裕で眺めながら、同時にそこまで自分の心を動かせる「こだわり」を持っている彼女たちに羨望を感じていた。

普段は平和に暮らしているのだが、いくつかある「こだわり」には絶対に妥協を許さず、そのことでしばしば周囲と衝突して激しい喧嘩をはじめてしまう女の子――彼女は一度怒り出したら手がつけられなくなって、相手が警官だろうがヤクザだろうが遠慮なく喰ってかかった――の場合も、俺は彼女の怒っている姿が妙にいとおしくて、いつも喧嘩を止めるのも忘れて、茫然と争いに見入っていたものだ。自らを焼きつくさんばかりの激しい「思い入れ」を持った女の子の、●気にも似た「こだわり」は見ていて本当に羨ましい。それは、根性の腐り切った、基本的に何だってどうだっていいんだという、いいかげ

んな態度の俺には絶対にできない純粋な反応なのである。

思い上がりの十代

ここで恥をさらして告白するならば、俺がヒステリー女に魅かれた理由のひとつは、俺自身の鼻持ちならない思い上がりによるものである。

「十代の頃、恋愛は重大な問題だった」というのは、化石の森でももう滅多に見られないジュラ紀以前の氷河紀ギャグだが、今より三十倍は確実に馬鹿で浅薄だった十代の頃、俺はこともあろうに「人が人に対して何かできる」などという大胆な思い上がりを前提に、女について次のように考えていた。

「美人で賢くて性格も良くて、周囲の誰からも好かれるような女に興味なんかない。どうせそんな奴はほっといても幸せになるに決まってるんだから。付き合うなら、なるべく人に理解されなくて心に深い闇をかかえて苦しんでいる女がいいや。俺にしか理解できなくて俺としか幸せになれないような女と付き合いたいな」

こんなたわ事を字にして書く恥かしさは、「丸裸で肛●にキュウリを３本ぶち込んだまま、銀座の歩行者天国を四つん這いで終日往復する」ぐらいでは到底表現できないものだが、いかにもチ●カス臭い十代の低●クソガキの思いつきそうなことではある。自分の卑

しい性欲にもっともらしい意味だの意義だのを持たせて、底の浅い人類愛を装わなければ女一人好きになれないなんて本当に情けない限りだ。闇なんて誰の心にだってあるんだし、冷静に考えれば自分でなければ駄目なことなんか、恋愛に限らずこの世にはほとんどないだろう。人は大きな群れを成して世界を変えていく動物である。蟻の世界と同じで、ある程度の数をキープしていれば、誰が何の役割を演じようが大した違いがないのは明白だ。俺の替わりなんかいくらでもいるし、ものごとの結果を「運命」と呼ぼうが、「偶然」と認識しようが、大した違いはないだろう。だからこそ、嘘でも「俺でなければ」という意識を持ちたかったともいえる。全くお安い人生だ。

さらに、この「思い上がりの勘違い」を今読んでどうにも許せない部分は、弱点や欠点を見いだした相手でなければ――自らの優位を確認しなければ――付き合う気になれないという、くだらない男のプライドが明白に感じられることだ。情けない話だが、この当時の俺は、自分より頭が良かったり、美しかったり、絵や音楽やスポーツなどの才能のある女とは対等に付き合える気がしなかった。相手の中に自分よりも劣る部分を見つけなければ安心して好きになれなかったのだ。何と矮小な器量の男だろう。

そういう歪んだアタマで女を見ていたものだから、人に嫌われていている女ばかりに目が行った。これは女友達の少ない女も合格だった。同性に嫌われて孤立している奴はだいたい性格に問題があって素晴らしいものだ。当然欠点だらけで人から疎まれるヒステリー女は超合格の優良物件である。「この女を理解してやれるのは俺だけだ」などと勝手に思い込み、根拠のない奇妙な使命感に燃えて、好んでそういうヒステリー女とばかり交際していた（人気がないから競争率も少ないしな←ああ何とさもしい根性なんだろう！）。この嗜好は成人してからも最近までずっと引きずったままで、一緒に何年も暮らした女も何人かいたが、心の底で「この女は俺よりダメなクズ人間」と蔑みながら付き合っているのだから、そんな関係が健全に続くわけもない。ヒステリー女というのはある部分で非常に鋭いカンを持っている。日常生活で露骨に相手を罵倒しなくても、思っている事は伝わるものだ。そうなると一緒にいればいるほど、お互いを傷つけ合うような不毛な関係が深まっていく。しかもあきれたことに、俺はそうやって日々神経をすり減らしながら相手が感情を爆発させて自分に牙を剥いて向かってくることを、半ば期待しつつ情況の悪化を楽しんでいたのである。

妙な話だが、冷静に考えると、俺は好意を抱いた相手には同時に憎悪の感情も持っていた気がする。「誰かを好きになるということは、他の誰かよりも、その誰かを好きになるということで、実は愛こそ差別のはじまりなんだ」と書いていたのは確かカート・ヴォネガットだったような気がするが、誰かに恋をして心を奪われるということは、ある意味で

本来一番大切なはずの自分が二番目に格下げされるという破壊的な精神活動でもあり、自己保存本能にとってみれば恋愛の相手こそ憎むべき仇敵であるはずだ。そう考えると愛情が同時に憎しみを合わせ持つのも納得が行く。もっとも、その上に立つ「種族保存本能」にとってみれば恋愛はその目的に合致した行為なのかもしれないが、人類種の未来なんてどうでもいいと思っている俺には、そんなことは知っちゃいない。そういう幻想があるなら好きに利用させてもらうだけだ。

とにかく、そんな不純な気持ちを抱きつつ続ける交際が良い方向へ向かうわけがない。具体的に結果だけ書くと、俺は二十代前半までにヒステリー女に刺されたり切られたりという刃傷沙汰を三回経験した。一回目（ナイフを蹴り落として足を深く切った）も二回目（カッターで背中を刺される）もかなりきわどかったが、三回目（鈍器で額を割られて、包丁を逆手に持って突っ込んでこられた）は死を覚悟した。その詳細は精神衛生上非常に良くないのでなるべく思い出さないようにしているが、確かあの時は死を覚悟して逃げずにじたばたしなかったおかげで、相手が冷静になってくれて生き延びることができたのだ。いずれの場合も他の女との関係が発覚したり、言ってはいけないことを言ってしまったりと、全部こちらが「刺されて当然」のことをしてしまった結果である。たとえば三回目に殺されかけたときなどは、同棲相手がいるにもかかわらず他所で極めて清純なプラトニック・ラブにハマリ込み、純愛相手と清いデートをしたあとで家まで送ってさわやかにさよならを言い、その足でとうに飽きた同棲相手の処に直行して有無を言わさずシモの欲

望だけをその女で解消していた。もちろん頭の中はプラトニック・ラブの彼女のことばかりを考えながらなるべく性●相手の顔を見ないようにしてズコズコ腰を振るんだからこれ以上人を馬鹿にした●交というのもないだろう。ケダモノのような俺に一瞬でもプラトニックな恋愛が可能だったのは、ちゃんとそうやって裏で性欲処理をしていたからである。そんな欲望処理の性●に前戯も後戯もあったものではない。飽きた女に射●が終わってからウダウダまとわりつかれると本当に頭にきて罵りながら蹴飛ばすぐらいのことは平気でしていた。相手の女の名前を呼びながらフィニッシュしたことさえある。こんな鬼畜にも劣る行為を半年以上も続けてたんだから、包丁を向けられない方がどーかしているだろう。俺が女の立場なら、とうに寝ている男のチ●ポを切り落として殺したうえで、切ったチ●ポを町内会の掲示板に五寸釘で打ち付けて「不良品」と但し書きをつけて晒しものにしているところだ。まあ、これは「殺されかける奴にはそれなりの理由がある」という例である。俺は今もこの事については客観的にみてもひどい事だとは思うが、残念ながらサイコパスなので罪悪感がまるで感じられない。いったいどうやったら「悪かった」と実感できるんだろう。そういうわけで、反省が足りないせいか、この他にも俺の手や足には女につけられた切り傷が十数ヵ所も残っている。ヒステリーの発作を起こしたときに、いつも腕をつかんで発作がおさまるまで押さえてあげた女がいたが、半狂乱になって俺の腕の同じ場所に肉が裂けるまで爪を立てるものだから、今でも跡が消えずに残ってしまっている。以前、工場で同僚のSにその傷口を見られて、「女だろう?　それ」と言われ、思

わず「分かる？」と聞き返したことがある。Sによれば「女につけられた傷は消えねえンだよ」ということだが、情念というのは恐ろしいものだ。これは笑い事では済まされない。

このように書くと、「やっぱりヒステリー女は切ったり刺したりするから怖い」と思われるかも知れないが、それは本当に彼女たちの責任だけではないのだ。俺を刺したり切りつけた女の子は、3人ともその後で口を揃えて同じようなことを言っていた。「あんたが相手でなけりゃ、わたしはこんなことしなかったわよ」と。

ヒステリーの生まれる関係？

ひとの人格なんか対人関係次第でいくらでも生成されるものだと信じている俺には、彼女たちの言うことは真実に聞こえるし、「鬼畜行為のしっぺがえし」を棚上げして考えても彼女たちが俺にだけヒスを起こすという要因はいくつか考えられる。

第一に、見た目にも頑丈そうな俺の体格なら、安心して感情をぶつけたり暴力をふるえるということがある。実際俺を刺した彼女たちの一人は普段から露骨に「あなたが華奢で弱々しいひとならこんなに殴ったりなんかしないわ」と言っていたし、ヒステリー症の中でも「演劇的要素」を持った連中というのは、案外と冷静に情況や相手を見て暴れている

らい、彼女ばかりではなく彼女の家族や親類縁者や飼っている犬猫に至るまで、徹底的にいわれのない誹謗中傷をでっちあげて罵倒しまくった。彼女が「もうやめてェ〜！」と泣き崩れたらとたんに態度を豹変させて優しくする。「ごめんよ、ごめんよ、キミがあんまり可愛いんで苛めたくなったんだよ〜」などと思ってもいない事を言いながら頭を撫でてやさしく抱きしめて慰め、女が泣き止んだらとたんに「チョーシこいてンじゃねえ！　この○○○○アマがあ！」と態度を豹変させて前にも増して更に酷く罵倒するのだ。そして彼女が泣き出したらまた慰めて……と、これを一晩に何度もくり返せば発●しない方がどーかしている気がするが、こんな事を平気でするような男といればヒステリーを起こすのもあたりまえというものだろう。

自分で書くのも何だが、俺という男はホントーにひどい鬼畜野郎だと思う。

実際、こんなのはまともな恋愛じゃないし、オ●ニーの延長上の自己愛としか思えないひとりよがりの恋愛のほうがまだ気がきいていて数万倍もマシというものだ。そう書いていながら、心の底では全く反省もしていない自分にもそろそろ飽きてきたので、建前の自己批判はこのへんでやめておこう。やっぱり俺に「心からの反省」なんて到底無理なようである。俺にもいつか「すまない」とか「うしろめたい」とかいう感情を実感できる日が来るのだろうか？

のかも知れない。だとすれば第二に「彼女が起こすヒステリーを可能な限り全身で受けとめてあげたい」と考えていたこちら側の姿勢こそ問題で、「そういう態度をとらなければ彼女たちもそんなにひどいヒステリーをおこさなかったかも知れない」と今になって思ったりもするのだがどんなものだろう？　ちなみに俺は女に殴られたり刺されたりしなければ勃●できないようなマゾヒストではない。剥き出しの感情をぶつけられると真剣に愛されているような錯覚でも起こせるかなと考えたりもしたが、ヒステリーというのは、ご承知の通り起こした本人以外にはなかなか楽しめない物件なのだ。

　結局のところ、俺は多少気の合うヒステリー症の女を見つけては付き合って、その症状を増幅させて悪化させたあげくに別れて、この世の因果を深めていただけのような気がする。これを読んでいる読者の皆さんも、そろそろお気づきのことと思うが、何を隠そうこれを書いている俺自身も立派なヒステリー持ちのキチ●イである。その程度の自覚は当然ある。だからこそ彼女たちのことも理解できる気がするし、ヒステリーを起こして感情を爆発させるのが多幸感を伴う大きな快楽であることも知っている（自分でもヒステリーを起こしたフリをして暴れるのは簡単にできるけど、なかなかそれほど幸せな気持ちにはなれないのが残念）。

　俺はとにかく感情が希薄なので、何でもいいから人間が人間らしく振る舞うさまが見たくてたまらない。だから女たちの感情を逆なでて怒らせたり泣かせたりさせようとずいぶん酷い実験をしたものである。相手の気にしている欠点や弱点をねちねちと陰湿にあげつ

女の中の女の部分

話をヒステリー女の魅力に戻そう。イロイロ書いたが、相手の欠点や思い上がりがどうのという話を抜きにしても、何をするかわからないヒステリー女は魅力的だ。いや、「何をするかわからない」というよりも、「何をしていいかわからなくなってヒステリーを起こしてしまう不器用な女の愛らしさ」という魅力もこの世には確実に存在する。俺は人との距離がつかめなかったり、作為的な儀礼ができなくて、ヒステリーを起こしてしまうタイプの女の子が嫌いではない。愛想笑いが下手だったり、口に出さなくても感情が明確に顔に出てしまう嘘のつけないタイプの奴らも同様に好きだ。現実の社会では、礼儀正しくTPOをわきまえて、どんな場合でもファーストフードの店員のように流暢な口調でお客に対応できる奴らの方がウケが良いに決まっている。だけど世の中には（少数派だろうが）、笑顔を伴った「ポテトもいかがですか」という、高度に資本主義的な優しさにあふれた細やかなコトバ遣いが何よりも嫌いだというひねくれた奴もいるものだ。

自分がそうだから断言できるが、人前で大げさに泣いたり怒ったりできる感情表現の得意な奴らは、実は大嘘つきで全く信用できない。了解しておいて欲しいのだが、何も感情を持たないのがサイコパスなわけではない。サイコパスは人間の〝感情〟をとことんナメ切って、自分以外の他人をとことん馬鹿にしているからこそ、どんな〝感情〟でも持った

フリができるし、その感情を自然に演じることが可能なのだ。俺は自分が大嘘つきだからこそ人間の感情表現なんか一切信用しない。だから感情表現の下手なタイプのヒステリー女にはどうしても好感を持ってしまうのだろう。

そして、彼女たちのコトバはどれも額面通りに受け取れないから好きだ。狂●に片足をつっこんだヒステリー女のコトバは「五感の全て」どころか、あるかないか分からない第六感まで感覚器を全部使って判断しないと何が言いたいのか分からないし、それでも判断がつかなくて、さんざん悩んだあげく「そうか、何も言いたくないんだな、いまは」と理解したつもりになる場合もある。わかりやすい例をあげるなら愛情表現を考えるといい。「好きよ」とか「愛してる」という直接の表現以外にも情況次第で「星が綺麗だね」とか「あっちへ行けよ！」などというコトバも立派な愛情表現になるのが言語の奥ゆかしさというやつであろう。極端な話が「だいきらいよ、あなたなんて」という否定の言葉が正反対の意味で語られる場合もあるし、言葉以外にも態度で伝わる場合もあるのだ。

たわけた話だが、若い頃の俺は付き合う相手を追い詰めて、刺されたり切られたりすればするほど〝本当に愛されたような気になって〟そのことに満足していた。本当の気持ちは追い詰めないと出てこない。「好きです、愛しています」などという、道端の馬糞でも語り出しそうな愛の言葉を貰うよりも、ナイフ一振りの剥き出しの憎悪の方が純粋な愛情のように思えて嬉しかったのだ。全く馬鹿な話である。刺された当時、傷口が深すぎて血が止らずに病院へ行き、医者に何針か縫って貰ってからアパートに帰り着くと、刺した本

人は謝るどころか「私のせいじゃない！　みーんな百郎が悪いんだ」とそっぽを向いてふてくされていた。何を、どう表現すればいいのか、どんな態度を取ればいいのかさっぱり分からなくなった彼女のヒステリー状態は続いているようだった。しかし、俺には女の少し涙ぐんだふくれっ面こそが何よりの謝罪の言葉に思えて、その女にはいとおしさ以外の何物も感じることができなかった。「愛とは美しい誤解である」という妄言があるが、「己の死を感じつつ緊張感を持ってする恋愛こそ最上のものである」などと言うつもりは現在の俺には全くない。イキガガリ上、命懸けのおつきあいになってしまうというのがヒステリー女の「かわいらしさ」であり「魅力」なんだろう。「好きな女のかわいさぐらい命がけで感じてみろよ」と主張するつもりは毛頭ないが、これこそ「エロティシズム」というものなんだろう。自分で追い詰めて刺させといて言うのもなんだが、疲れるハナシではある。

まあ、そういうわけで、大人しくて冷静で平和な女の子は、突然刺される心配をせずに付き合えるという点では素晴らしい気がするが、そういうのはきっと平和過ぎて俺には退屈だろう。

俺が考える女の魅力ってのは、やっぱり訳の分からない部分を持っていることだと思う。以前、さる高貴なお方が女性について問われたときに「自分と同じ価値観の人」というのを理想としてあげられておられたが、全てにおいて優れておられる高貴なお方ならいざ知らず、俺のような下々のゲスと考え方や価値観が全く同じ女なんか、付き合っても何

の向上にもつながらないと思うし、やっぱり自分と同じような人間と付き合うのは自分自身と付き合うようでつまらないに決まっている。

だからこそ理解不能のものは貴重なのだ。もちろん不思議さのない女なんていないけど、どうせならその不思議さは大きい方がいい。ヒステリー女には何をしでかすかわからないリスクがあるが、同時に抱え込んでいる理不尽や混沌も大きいから素晴らしい。そういう女の子を抱きしめるなら、できるだけ心の闇の大きい女をその闇ごと抱きしめて包み込みたいものだ。

恋愛もまた、俺にとっては生きることと同じように妄想戦のひとつである。出会ったときに瞬時に相手の位置する妄想世界を感じて理解し、相手の放った妄想を受けとめてその妄想ごと増幅して相手を包み込むことができなければ、深い闇を背負った良質の因業女たちとは付き合えない。感情の浅薄な俺は、相手の思い込みや背負っている闇が深くて強烈であればあるほど、疑似的で嘘っぱちの愛情を燃やすことができるのだ。だからこそヒステリーな女の子が大好きだ。ヒステリー症こそ女の子の中の女の子の中の女の子の部分といっても過言ではない気がする。

若い頃、発作がおさまって静かに寝息を立ててる女の寝顔を見ながらよく思ったものだ。

「ヒステリーでも何でもいい。このコを受けとめられるのは俺だけなんだって、そんなの妄想だって知ってるけど、嘘でもいいから実感してみたい。俺は俺のことを必要としてく

れる奴にならば、少々切られようが刺されようが全然かまわないや。感情が希薄で愛情を実感できなくても、切られた痛みはホンモノだ。殺されない程度なら刺されたって切られたっていいじゃないか。よしんば殺されたとしても、好きな女の子に殺されるのは心底嫌な奴に殺されるよりも数千倍もマシってもんだ」

どうせ好きになるなら自分の存在なんかどうでも良くなるぐらい熱烈に相手を好きになりたいものだし、俺は今後も恋人付き合いをするのなら、殺されてもいいなあと思う女の子が理想である。それは、「交尾のあとに喰われるオスのカマキリの気持がわからないでもない」ということではなくて、くり返し言うようだが「平和に安定した女もいいけど、内部に混沌をかかえ込んだ女の方が面白いじゃないか」ということなのだ。

最後にヒステリカルなエピソードをひとつ。

あるところにアイドル歌手をめざしている、もうあまり若くない女の子がいた。彼女は芸能界のゴシップ情報にはやたらと詳しくて、オーディションにも何度かチャレンジしているがいまだに芽は全く出ない。

彼女にはいろいろと複雑な事情があって、本意ではないのだが現在は風俗産業に従事している。元々生真面目な性格なのでサービスも一所懸命でお客の評判もいいようだ。年も30を越えているし、常識で考えてもこれからアイドルになるのはかなり大変だろう。それだけならば「少し哀しい話」で済むのだが、彼女の勘違いとほんとうの悲劇は、歌の練習

なんかちっともせずに、自分がデビューして有名になってから風俗嬢をやっていた過去が発覚したときに備えて、釈明記者会見のいいわけばかりを延々と真剣に考え続けていることだ。

そして俺は彼女を全く笑えない。俺の探しているものも彼女がやっていることとたいして変わらない気がするからだ。墓穴は掘っている本人には自覚できないようである。

鬼畜文書 村崎百郎の鬼畜流ビザール読書術

第1回課題図書：『ゴールデンボーイ』スティーヴン・キング著／新潮文庫

ナチはいいぜえ、ナチはよおおお！（BGMは『気●いナ●ス』（カルカッタレコード）がおススメ）

寛大なる編集部のご好意で、醜悪な相互カマ掘り関係にある鬼畜文化とビザール文化の接点について好き放題に語れるコーナーを頂いたので、ここでは俺の大好きな精神荒廃アイテムを思いつくままランダムに紹介していこうと思う。初回はスティーヴン・キングの中篇小説『ゴールデンボーイ』を課題図書にして、20世紀最悪といわれるナチ文化の魅力について適当なデタラメを語ってみよう。とりあえず押さえておきたいのは「我々が日々享受する精神腐敗文化振興の最大の功労者はヒトラー総統率いるナチスドイツ第三帝国による非人道的な残虐行為の数々である」ということだ。選民意識、大量虐殺、オカルト、毒ガス、人体実験……異論はあろうがイメージとしてのナチの中には、フェチもSMも制服も変態性欲も全てが渾然一体となった強烈な磁場が形成されていて、「何にしても基本

はナチだよね」という共通了解事項がビザール文化や鬼畜文化愛好家の根底にあるのは否定しようのない事実である。良識があってなおかつ善良な●穴の糞野郎どもが、口からアワを飛ばしてどれだけナチの非人間性や残虐性を訴えかけようとも「それにしてもナチっていいなあ！」と感動してしまう正直なビザール野郎は確実にこの世に存在する。『ゴールデンボーイ』は、そんな根性のヒネた〝ナチおたく〟の糞ガキが主人公だ。物語は現代アメリカを舞台に、近所に住む元ナチの捕虜収容所長の老人の正体に気づいた少年が、「よォ爺さん、黙っててやるから俺に収容所でのユ●公大量虐●話をねんいりに聞かせろよおおおおお！」と、前代未聞のユスリをかけて、本人がもう思い出したくもない陰惨なユダ●人捕虜大量●殺話を毎日のように根掘り葉掘り（まるで治りかけた傷口をえぐるようにネチネチと）聞き続けるという、地獄のような設定である。明るく成績優秀な少年は、老人の語る〝ぞくぞくするような〟収容所の残虐非道エピソードの数々に興奮してチ●ポ立ちまくりで勉強も手につかなくなり成績もガタ落ちになる。老人の方も、収容所の話なんて記憶の彼方に封印していた忌わしいだけの嫌な思い出の筈なのに、少年に強要されて嫌々語っているうちに、次第にまんざらでもない気分になっている自分に気づくのだ。中でも少年が「クリスマスプレゼントだ」といって老人にナチ親衛隊の制服とブーツのレプリカを押しつけ、それを無理矢理着せて、号令をかけて部屋の中を行進させる件りのおぞましさはスティーヴン・キングの著作中でも最高峰のレベルで、俺などは何度読んでも激しい勃●が抑えれれない。

少年と老人は、そうした「放課後のナチ文化強制個人授業」を通して、お互いに内に秘めた狂●と残虐性を増幅させ、夜毎悪夢にさいなまれて寝汗にまみれ、果ては浮●者殺●にエク●タシーを感じるキチ●イ鬼畜になってしまうのだ。このように「相手に寄せる信頼が全くゼロの状態で、激しく憎しみ合いながらもお互いを必要とし合う麗しい関係」などというものは、ＮＨＫの朝の連続テレビ小説を二百年間毎日観続けても絶対にお目にかかれる代物ではないので大変に貴重である。

ホラー小説に詳しい風間健二氏（4人の子持ち翻訳家／『スティーヴン・キング　恐怖の愉しみ』など著書多数）によれば、この小説は映画化も企画されていたが話があまりにリアルで陰惨なせいか、見事にお蔵入りしたとか。まあ、この内容では無理もないか……。

註：このコラム書いてから何年か経って映画『ゴールデンボーイ』は完成して公開されて観たけどなんか退屈になって途中で寝た。原作の方が妄想できるから好きかも。

第2回課題図書：『アホダラ帝国』キャシー・アッカー著／ペヨトル工房刊

それにしても昨年はずいぶんと有名人が死んだものだ。ウィリアム・S・バロウズの場

合は、死んだと聞いてても「歳も歳だし、あれだけさんざんヤクやってカマ掘って女房撃ち殺しても長生きできるなら人生ってイイもんだな」ぐらいの感想しか持てないが、「女バロウズ」を自称していた作家のキャシー・アッカーの訃報ともなれば「ウソだろ、まだまだ若いのに……そんなことアッカー！」と叫んだポストモダン小説愛好家は俺だけではなかったろう。末期の乳癌で死にかけているという噂は聞いていたが、何分突然のことなので、「ポール乳癌（ニューマン）！」とか「ゲイリー乳癌（ニューマン）！」などというつまらない追悼侮辱ジョークしか思いつけなかったのは、「人の不幸を己の幸福」としか感じられない鬼畜の一人として非常に残念である。このうえは、さっさと速やかに生まれ変わって、性懲りもなく愛と憎悪と暴力に満ちた強烈で凶悪な物語を生み続けて欲しいものだ。

　そんなわけで、今回はパンク姐ちゃん作家のキャシー・アッカーを追悼して『アホダラ帝国』が課題図書だ。初めて読むなら性と暴力と想像力（創造力）がメインテーマのタイトル通りのフェミニズム汚穢小説『血みどろ臓物ハイスクール』（白水社刊）もいいだろうが、個人的には『アホダラ帝国』の方が馬鹿馬鹿しくて好きなのでこちらを推薦する。簡単な略歴を記すと、アッカーは一九四八年四月十八日ニューヨーク生まれ。十代の頃から詩人やアーティストやミュージシャンなというロクでもない連中に囲まれて育ったおかげか、七二年頃からビートの詩人と関係の深いブラック・マウンテン派の詩人として創作活動を開始。ドラッグやセ●クスに溺れた自らの体験を断片的なカットアップで綴った散

文作品を小さな出版社からいくつか刊行したがあまり話題にはのぼらず、生活のために42番街のポルノショーに出演したりと〝身体を張って〟逞しく生きていたようだ。
八〇年代に入ってから、グローブプレス社から刊行された『大いなる遺産』（思潮社近刊）、『血みどろ臓物ハイスクール』、『ドンキホーテ』（白水社刊）などが批評家たちの話題を呼び、一躍「ポストモダン・パンク小説の旗手」としての地位を確立。ルックスもモロパンクで、スキンヘッドに近いプラチナ・ブロンドのツンツンヘア（しかも頭のテッペンだけ黒く染めたりしてる）と、ボディビルで鍛えた身体に刻まれた大きな薔薇の刺青がトレードマーク（映画『タンクガール』の主人公のパンク姐ちゃんみたい）。彼女について的外れなヘボい批評を書くと、ハーレーに乗って家まで直接やってこられて「何だオメーは！」とねじこまれるという怖い噂まであったというから全く大したものである。彼女の小説の特徴は過激なまでのポルノ言語と、昔の大作家たちの小説からの「剽窃」だが、初期の小説群に通底する「私は愛されていない、もっともっと愛が欲しい」という女性特有の不毛な妄執（？）も、この『アホダラ帝国』あたりから微妙に変化して、「ああもう何でもどうでもいいや、別の神話でも作るか」的な、新しい段階に進んだような印象を受けるので興味深い。本書のストーリーはあってないようなものだが、基本は近未来を舞台にサイボーグの黒人女と、海賊に憧れるポン引きをめぐる激しいパンク話の数々だ。ラストの〝自分が何が欲しいのかもまだわかんないのか、と思った。何が欲しくなくて誰が嫌いかは充分に分かってる。それだけでも大したもんだ。〟って台詞が俺は好

きだぜ。

☆村崎百郎∧非公認∨ＷＥＢより☆

「とんでもねえ本」について

★どんな本でも「とんでもねえ本」として読める鬼畜意識変容法

他人の不幸をひたすら己の喜びとしか感じられない人でなしキ●ガイ鬼畜の俺が心底「とんでもねえ」と思う邪悪な本とは、当然のことながら良識や道徳や正義をあたりまえのように主張する、一般には「まとも」と思われている書物類全てである。

俺にはどうでもいいことだが、あんなものを普段から不用意に目にしたり読んでいるから、この世に生きる大方の連中は簡単に騙され易い「クソ善人」に堕ちてしまうのだろう。そういう「善人」どもの末路は実に哀れだが、鬼畜の俺にはどうでもいい話である。まあ、政治家やエリート官僚どもを見ても、「この世は先に腐ったモン勝ち」というのは容易に理解できるだろう。だから、こんな便所の糞以下の腐った時代に「隣人を愛せよ」なんてフザけたキレイごとを大真面目にほざく連中がいるとしたら、そいつらは間違いなくサギ師でなければ超一流のキチ●イなんだから、そんな寝言が堂々と書かれている宗教書の類は全て「とんでもねえ本」以外の何物でもない！

クドクド書いたが、ここで俺が言いてえのは「書物はテクストであり、それを読む人間

の考え方一つで、どんなに清いことが書いてある聖典であろうが、いくらでも〝どんでもねえ邪悪な本〟になりうる」ということを再認識しとこうというわけだ。

だから、「とんでもねえ本」が読みたいというなら、わざわざ探す必要などない。本を読むあんたらがいままでの日常意識を一八〇度反転させて腐った人でなし鬼畜になればいいだけの話である。何度も言うが見方を変えれば世界も変わる。俺のように、この世の腐敗と他人の不幸を切に願い、徹底的に卑怯&卑劣に生きることに喜びを感じ、他人から浴びせられる「バ●！」「ひと●なし！」「人間のクズ！」などの罵倒の言葉が全て自分を讃える「誉め言葉」としか聞こえないという超最低の鬼畜になりさえすれば、ハエの糞以下の現政府（主に自民党）を熱烈に支持する気になるだろうし、高慢なうえにコー●ン好きの各省庁のエリート官僚どもにも大きな好感が持てるようになるだろう。そうすれば接待汚職だの、収賄だの利益供与というどんなに腐ったニュースを見ても腹が立たないから血圧も上がらなくて健康にも良い。そして、あいつら自民党や官僚どもをおだてあげ、徹底的に増長させてノーチェックで政治や行政を全て任せっ放しにしておけば、確実にこの国は今よりもっともっと駄目になる。ああ、その時がホントに待ち遠しいねえ。

さっさと腐れ！　いますぐ腐れ！　この世の全てが悪徳と破壊と腐敗に満ちる真の汚穢世界の到来を切実に願うぜえええええええええ！

……というふうに、自分の意識を「自民党&官僚様万々歳」という卑屈で最悪な鬼畜意識にチャンネルを切り替えて本屋に向かえば、政治関連や市民運動の書棚の本は書名を見るだけでも激しい怒りがこみあげてくる「とんでもねえ本」だらけである。

たとえば、自民党の政策を批判するような本は全て「とんでもねえ本」である。また、政治家でもないくせに、好き放題にお上のやることにいちいち文句をたれる政治評論家どもの著作は全て残らず「とんでもねえ本」である。そして、国の行政にアヤをつける環境問題や市民運動などを扱った本は一冊残らず言語道断の「もの凄くとんでもねえ本」である。薬害エイズ関係の本も、ゴミ処理場付近から検出されるダイオキシン関係の本も、農薬汚染や公害関係の本も、御政府様や御官僚様側にしてみれば、「たかが国民の分際で、メシやま●こやクソ以外のことを考えるとは何とナマイキな！」という、全て残らず超余計なお世話の「とんでもねえ本」なのだ。

★「想像力（妄想力）暴走法」

以上のような「鬼畜意識変容法」以外にも、新しく本を探さずに簡単に「とんでもねえ本」を読む方法がもう一つある。それは次に紹介する「想像力（妄想力）暴走法」である。これはどういう方法かというと、本を読む際に**自分の持っている妄想力（妄想力）を最大限に暴走させて、文章の背後やメタファーどころか、裏の裏の**

裏の裏の裏の裏の裏の裏の裏の裏の裏の裏の裏の裏の裏の裏の裏の裏の「誰がそんなことまで想像（妄想）してくれって頼んだだよ！」というところまで妄想してしまうというやり方である。鬼畜であるばかりか電波系（生まれつき神だの悪魔だの霊のを自称する輩の声が常時アタマの中に直接響くという受信機いらずのラジオ体質。とってもウルサくてかなわねえ。詳しくは『電波系』（根本敬と共著／太田出版刊）を読んでくれ）の俺は、何か対象に一つ触れると、自分の意志とは無関係に、そこから想像可能な事柄や画像が無限に頭の中で暴走を引き起こして、瞬時に音とイメージの大洪水がアタマの中にあふれるのだ。これが俺が突然発作を起こして周囲の人や物に殴りかかったり、たいした理由もなく何年も執念深く人をつけ狙って、嫌がらせをしたり、その人間の家族や周囲の人間を襲ったりする理由なのである。たとえば、新たに人に会うと、その人間の顔を見た瞬間に「こいつとは三年と八か月後にモメるな」などということが直観的にわかってしまう（たぶん妄想）。そうすると「いちいち三年と八か月後まで待てるかよ！」と猛烈に頭にきて、その場で相手が油断したところをすかさずブン殴るのである。こんなのは誰がどう考えても完全に狂●の沙汰なのだが、この国がぬるま湯のような民主主義国家なおかげで、どうにか現在も平然と世の中をうろつくことが出来るのだ。今も夜中の発作が激しくて、ときどき近隣住民に「叫び声がうるさくて眠れない」と警察に通報される以外は、いたって平穏な生活を送っているが、いつ何時、やりすぎて

殺人事件を起こさないとも限らないので、想像力の暴走はほどほどにしといた方が賢明だということだ。平和ボケした連中はわからないだろうが、俺のように、突然目的も理由もなく周囲の他人に平気で危害を加えることのできる人間は、少なく見積っても全国で約三千万人以上はいるので、日常生活で気を抜くのは命取りになるぜとだけは言っておこう。まあ、ありもしねえ霊やタタリなんかよりも生きている人間の方がよっぽど恐ろしいってことだ。

　話が大きくそれたが、「想像力（妄想力）暴走法」の恐ろしさは理解頂けたと思う。要は被害妄想を過度に増幅させなければ大丈夫なのである。そこを気をつけさえすれば、何げない文章しか載っていないつまらねえ本でも、いかようにも下品なことや「とんでもないイメージや物語」を妄想できるから便利である。たとえば物語中に赤ちゃんが一人登場したとする。普通なら「赤ちゃん＝小さくて可愛いくて愛らしい存在」ぐらいで終わるイメージを思いきり暴走させて、この赤ん坊が母体に受胎されるまでになされた夫婦の夜毎の下品な性●の数々を、母親の性●の形や、●の締まり具合いや、汗や体臭、ま●汁やオ●モノの味やニオイ、親父が舌先でナメあげる母親の肛●のシワの微妙な感覚や、その際わずかに感じる苦くて臭い糞の香り、または月経時にナメるま●この鉄臭くて生ぐさい経血の味と匂い、夫婦の性●の体位や親父の持続時間、親父のペ●スを嬉しそうに吸い上げる女房の頬のへこみ具合いなどを微に入り細にわたって綿密に妄想するのだ。いもしない

他人のまぐ●いを妄想するのが困難なら、自分のまわりにいる身近な友人夫婦などを思い出して妄想しよう。友人のカップルの性●を綿密に妄想して興奮してせ●ずりをブッこくなどというハレンチな行為は、友人としてどころか人間として最低の行為の一つなので皆さんにも大いに推奨する。それでも足りない奴は自分の両親や祖父母たちの激しく下品な性●や乱●を妄想しろ。どんな偉くて立派で清い奴でもそいつが人類である限り、切られてなければ股間にはチ●ポかま●このどちらかが付いていて、その隣のけつの穴からはとびきり臭せえ糞をするものなのである（だから何だということもないが……）。

　このような妄想がごく自然に行えるようになると、どんな本を読んでいても、行間から「とんでもねえ事実」が発覚して（妄想）、勝手に怒ったりあきれたりできるから退屈することなど全くなくなる。俺のようにアタマの妄想ベクトルをお●んこモードに合わせておけば、「日本国憲法」を読んでも「こぶとり爺さん」を読んでも「三匹のこぶた」を読んでも激しいポルノグラフィーにしか読めないから大変なもんだ。

　ここまで書けば俺が何を言いたいかはお分かりだろう。**俺はお前ら読者諸君に、そんなに「とんでもねえ本」が読みたければさっさと俺のように発●しろと言っているのだ。** 人がアタマの中でする妄想には一切の規制も法律も国境もなく、何を考えても思っているだけなら絶対に罰せられないから安心だ。これはどんな人権派で良識派のヒューマニストども（この世で一番迷惑なキ●ガイ）も、因縁をつけられないからざ

まあみやがれだ。悔しかったら「今こいつは心の中で人道的に許せない妄想をした！」といって俺を逮捕してみろ！　できねえだろう、馬鹿野郎。思考統制なんてお前らの一番嫌いなファシズムでしかねえからな。お前らがいくら頑張ろうがこの世は腐り堕ちるしかねーんだよ。わかったか、このバ〜〜〜カ！　しかしまあ、こういう下品な妄想を通して自分の抱える心の闇を自覚して生きれば、適当なストレスのガス抜きになって、平穏な一生を送れるかもしれない。ヘタにつまらん良識をブラさげてバカ善人として生きるよりも、人でなしの鬼畜であった方が楽しいかもな、「人は孤独であるよりも悪と共にあったほうが良い」と言うではないか。

★鬼畜村崎百郎推薦の「とんでもねえ本」

さて、つまらねえ屁理屈と能書きばかりが続いてご退屈の皆様もいることだろうから、そろそろこのへんで大真面目に「通常意識を持った人間にとってのとんでもねえ本」の紹介でもしておこう。今回は、身近な所で恐縮だが、そもそもこの俺を発掘し、メディアデビューさせてくれた恩人であり、共に「すかし切った日本の文化を下品のどん底に叩き堕とす」運動の同志である特殊漫画家・根本敬氏や「幻の名盤解放同盟」の面々の書いた「因果本」についてを紹介していこうと思う。　絵を目にしたことのある人間ならお分かりだろうが、根本敬氏の漫画は大変ハードルが高くて、世間一般の評価にしても「好き／嫌い」などという感想以前に、「読めるか／読めないか」という所で大きく分かれてしまう

のが特徴だ。読める奴にはもの凄く面白く読めるが、読めない奴は表紙のタイトルですら満足に読みこなせないのが「根本漫画」なのである。具体的にどういう連中が「根本漫画」を読めないかというと、俺の経験とアマタで受信する電波調査（妄想）による統計上からは、「上っ面の正義を愛し、人を身なりや外見で判断したり、学歴だの家柄だのに必要以上にこだわり、自分が他人にどう見られるかという見栄や体裁ばかりを気にして、心の中は優越感やエリート意識で満ち満ちて、清潔で美しいものは愛するが醜いものや汚いものは思い浮かべるのも嫌いという、表層的にはとてつもなく上品な人々」がそれに該当するという驚くべき結果が報告されている。それでは根本漫画を読める連中はみんな下品で醜いものが好きなのかというと、そういうわけでは決してない。根本漫画を読むことができる連中とは、俺のような単なる下品趣味でなければ、基本的に、「表層的な美醜にとらわれず人や物の 本質を見ようという前向きな姿勢を持った連中」と思って間違いない。世間では根本世界の基本キーワードの「イイ顔」を「ホームレスの親父」とイコールで結ぶような大きな勘違いがまかり通っているが、同様に「根本漫画」＝「下手で汚い絵」と判断するのは浅薄な間違いで、あれは「特殊に抽象化された「人間の本性を真摯に見つめたうえで愛情を持った暖かい目で好意的に表現した絵」であるということを素直に理解して頂きたい。

たとえば人間の造形的な美醜なんて皮一枚の問題だ。美人だ何だと威張っても、皮一枚

下は肉と脂肪と血と骨がつまったグシャグシャの汚物なのだ。そこに美人も不美人もあったものではない。だからというわけではないが、俺はいまだかつてアイドルのたぐいに本気で夢中になったことなど一度もないし、連中の写真の笑顔を見て、モノも言わせずに殴り倒してハ●殺してやりてえと思ったことはあっても、人間として好意を持ったり愛したいなどと真面目に考えたことなど一度もない。俺にとっては、やつらの浮かべる営業上の愛想笑いを有り難く頂戴してカネをつぎこむ奇特な連中こそ「とんでもねえ連中」だし、そういうアイドル連中の写真集だのエッセイ集だのというのも全て残らず「とんでもねえ本」なのである。これらのことは一見根本漫画と何の関係もなさそうな話ではあるが、俺は根本漫画に登場する村田親父や吉田佐吉の顔を見ていると、何故かこれらのことが自然に思い出され「ああ、そういやあ人間ってホントに汚物なんだよなあ」としみじみ感じるのである。「人間なんてそんなにキレイなものじゃない。欲望だけは人一倍あるうえに絶えず汗や体液を分泌する汚い汚物なんだよなあ。糞しか産めない糞袋のぶんざいで美人もブスも奇麗も汚いも無い。俺も糞なら連中も糞。でも何で同じ糞同士、仲良くできねえんだ？」などと殊勝に考えてしまうのだ（約1秒間ぐらい）。根本漫画はこのように不浄観を学ぶうえでも格好のテクストとなるであろう。では、根本漫画は何から読み始めると良いか？　手近な所では『龜ノ頭のスープ』が河出文庫から出ていて、これが一番手に入り易い。この本にはイイ顔の親父ばかりを次々に殺していく連続殺人鬼・久保マサルの驚くべき出生の秘密を解き明かした「21世紀の精子ン異常者」や、「精子三部作」の題2弾に

あたる大河精子ロマン「ミクロの精子圏」という傑作が収録されているので大変に重要である。「ミクロの精子圏」は複雑怪奇なストーリーを言ってしまうと楽しみが半減するので詳しい説明は省くが、ち●ぽやま●こやSFの好きな連中なら大いに満足のゆく作品であろう。(「精子三部作」とは、他に『怪人無礼講ララバイ』(青林堂刊)に収録された「タケオの世界」と、いまだ未完の大作『未来精子ブラジル』(単行本未刊行)がある)

根本漫画の初期の名作は『豚小屋発犬小屋行き』(青林堂刊)に多数収録されていて、渋谷のチーマーの数千倍は恐ろしい伝説のチーム「こ●きびんぼう隊」の全貌や、実際の死体写真を使った「死体漫画」が読めるので見逃せない。根本漫画のメインキャラの村田一家を次々と襲う悲劇を徹底的に描いた『生きる1』『生きる2』(共に青林堂刊)はこの苛酷な現代社会を生き抜く為の聖典である。ダサくてドンくさくて周囲からいじめられるだけの村田一家の惨状を読み続けていくうちに、読者は弱者をいたぶる快感と、圧倒的に横暴な存在にいいようにいたぶられる弱者のマゾヒスティックな快感の二つを同時に体験することだろう。そして、少々鬼畜な感覚があれば「被害者であるよりは加害者でいたい。村田になるのはまっぴらごめんだ。それぐらいなら吉田佐吉になったほうがよっぽどマシだ。よし! 俺が村田になる前に、憎いあいつを村田にしてとことん追い込んでイジメ殺してやる!」という気分になって明日からの日常を攻撃的に生きる決心がつくかもしれない。

また、最近の根本漫画は電波的要素（簡単にいえばキ●ガイ度がアガってるってことだ）が強く出ているものが多く、とりわけ『キャバレー妄想スター』（ブルース・インターアクションズ刊）に収録されている各作品には濃密な電波が折り込まれていて、読む者の妄想に拍車をかける。見どころは、村田家のペットが次々に誘拐され、その度にしょーもないクイズの電話が村田家にかかってきて、それに正解しないとペットが惨殺されて死骸を送りつけられるという、背後に国際的な陰謀が渦巻くシュールな電波漫画「エリツィン、カスピ海にゴルビーを捨てないで」と、飲むと力と精力がみなぎる魔性の母乳を出すババアと、その魅力に取り憑かれたペット犬の繁殖仕掛人の親父を描いたジェンダーでフェミニズム感覚が大爆発のグレートマザー漫画（大ウソ）の「魔性の母乳」は最低でも10回は読まないと20世紀は越えられないという代物である。同様に重要なのが先ごろ刊行された『黒寿司』（ブルース・インターアクションズ刊）で、この本の帯には、本の中に一度も出て来ない幻の主人公・中田満の似顔絵（しかもその顔は『女犯坊』の竜水と岩松！）が入っていて、内容とは何の関係もない全くでたらめなストーリー解説が堂々と書かれていて実に素晴らしい。本書は表題作をはじめとする短編が数多く収録されているが、中でも根本氏が某編集部から執筆を依頼されながら、描きあげて渡したら社の上層部の命令で掲載を拒絶されたという、いわくつきの「超蠅」という短編が重要で、この国が抱える文化的貧困の実態を知るうえでも必読である。物語の中の登場する不良老人の

チーム「元赤ちゃんズ」もイカしている。心ある読者なら歳をっても人間はこうありたいものだと思うだろう。

漫画以外の根本氏の著書にも読むべき「とんでもなさ」は多数存在する。根本氏やその仲間の湯浅学氏や船橋英雄氏の「幻の名盤解放同盟」によるイイ顔の親父&因果者フィールドワークは上っ面だけではない「深い人間理解」を学ぶためには最重要の物件である。どんなジャーナリストやエッセイストや学者や研究家にも真似など絶対に不可能な（その理由は読めば分かる）韓国旅行記『定本ディィープ・コリア』（青林堂刊）、自主制作の歌謡曲のとんでもなくディープな世界を紹介した『ディープ歌謡』（ペヨトル工房刊）、イイ顔の親父や因果者フィールドワークの集大成（醜態性？）『夜、因果者の夜』（ペヨトル工房刊）の三冊に共通するものは、彼らが決して上っ面だけの真・善・美を求めるのではなく、その対極にある人間の弱さやどうしようもなさに目を向けて、一般の人々が取るに足らない存在と馬鹿にするもの、つまらないものやくだらないものとして蔑むものを軽んじることなく、それらの膨大なゴミのごときもののなかから「お宝」を見い出そうという前向きな姿勢である。

アタマでは「こんな馬鹿なことを」と思っていても、様々な理由で（あるいはさしたる理由もなく）ついついドツボにはまって破滅する人間存在の不可解さが、この3冊には凝

縮されて濃密に収められている。トントン拍子でエリート街道をまっしぐらに進むような人間には到底理解不能だろうが、泥沼というものは、足を取られてハマればハマったなりにヌルヌルと暖かい奇妙な快感も生じるものなのだ。俺が以前務めていた某区の製粉工場には、俺以外にも絶望的な個性を持った、この先生きていても仕方がないような人間のクズが一山ナンボで後から後からやってきては重労働の仕事がつとまらずにケツを割って逃げて行った。そういうクズどもは今もどこかの現場や工場で細々と生き長らえているのだろう。俺は、そういう奴らがこの国の経済を支えているなどと言いたいのではない。そういう奴らがこの国の経済にしがみついて足を引っ張っているというのが正しい物謂だろう。そんな奴らの中に聖性を感じようが、単に不愉快に思おうがそれは個人の趣味の問題であり、個人の勝手である。俺は根本氏たちほど愛情を持った目で他者に接することなどできないが、決して相手を見下したり、自分達に都合の良い身勝手な正義を押しつけたりしない彼らの態度やフィールドワークの方法に対しては好感を持っている。彼らは、本当に、他のみんなが忘れたり気にもとめない取るに足らない存在に目を向け耳を傾ける優しい人々なのだ。

そして「因果者フィールドワーク」の原点ともいうべき「内田研究」の概要が掲載されている根本敬著の『因果鉄道の旅』（ＫＫベストセラーズ刊）は最重要の必読書である。この本には、根本氏たちが大学生の頃に出会った超ド級の因果者・内田剛史を３年間追跡

調査して得た多くの証言や抱腹絶倒のとんでもないエピソードの数々が紹介されていて実に興味深い。この内田という男のことを、ここでかいつまんで説明することほど勿体ないことはないので、根本敬著の『人生解毒波止場』（洋泉社刊）で紹介されている十数人の因果者（手前味噌で恐縮だが、「ゴミの求道者」という項目で俺も紹介されている）を束にしても余りあるほど、この内田剛史という男の研究記録は面白いとだけ言っておこう。これらの因果者フィールドワークを読んで、単に「世の中にはこんなにどうしようもない連中がいる」と笑って済ませるか、そこから人間存在の不可解さや、誰もが抱える心の闇や、人生の儚さや奥の深さや、生命の神秘について深く真面目に考えるかは個人の勝手だ。ただ、この世に生きる人間は、俺のような電波系のキ●ガイでもない限り、普通は目にしたり耳で聞いたりした事柄からしか、何かをイメージしたりできないものだ。当たり前のことだが、自分の知らない所でひっそりと起きている悲劇については人は何も思いやれないし、考えられない。その方が精神衛生上、好ましいことだと思う。だから、本を読むという行為は、ある意味で電波系の人間が「電波」を受信するのに等しい部分もあるのだ。

　だから、俺はときどき新聞やＴＶの悲惨なニュースを見ながらしみじみ思う。「こいつらは見ず知らずの赤の他人の悲劇を報じて、俺に一体何を感じろというのだろう？　身内の死すら何とも感じられない俺のような鬼畜にとっては、赤の他人の悲劇など全て娯楽

せ」に過ぎないことが良くわかるぜ！

☆村崎百郎〈非公認〉ＷＥＢより

だ。してみると新聞やＴＶのニュースというのも、「報道」の名を借りただけの、低俗なワイドショーと全く等価な娯楽番組だし、そのくせ偉そうにジャーナリズム面してスカしていやがる「とんでもねえメディア」なんだよなあ」と。

最後になるが、根本系関係の本では幻の名盤解放同盟きっての論客、湯浅学氏の評論集『人情山脈の逆襲』『音海』（共にブルース・インターアクションズ刊）抜きには同盟を支える根本理論の「勝新太郎原理主義」は理解できないし、彼らの若き協力者の早田工二氏と直崎人士氏による共著**『痴呆系』**（データハウス刊）は一見ポップなギャグ本のようで痴呆性老人医療の現場が抱える深刻な問題を告発する「とんでもねえ本」である。この中にはギャグにまじって**医療の現場で虫けらのように●される痴●性の老人**の姿がノンフィクションで冗談みたいに次から次へと登場する。刊行されてほぼ一年になるが、**よくもまあ警察や善良な市民団体の連中が騒ぎ出さないものだ。**薬害エイズ問題もひどかったが、この中に書かれているのは誰がどう読んでも単なる殺人（というか虐●）でしかない。まあ、若くて前途あふれる納税者連中と違って、厄介者の痴●性老人が何万人殺されようが誰も困らねえってことだよな。**お前らクソ善人どもの正義なんてそんなものだろう。**この本を読めば**オレらの幸せが所詮は「養豚場の豚の幸**

☆H系マンガ

幼女殺人や猟奇事件が起こる度に、良識派や人権派のクソ善人どもを中心にしたマスコミがH系漫画やAVをヤリ玉に上げる状況にはもういい加減うんざりしている。よくもまあ「エロメディアこそが諸悪の根源で、健全な青少年の精神を蝕み性犯罪を助長している」などというブッたわけた妄想を後生大事に〝信仰〟できるもんだとアキレちまうが、そもそも「良識派」なんていう連中は、どいつもこいつも趣味で正義だの人権だのに燃えてるだけで、冷静にモノを考えられねえレベルの低い「こいつら馬鹿じゃやねーの？」だから、あいつらもホントに救いようがねえよな。

さて、単純にエロメディアの規制を叫ぶバカ善人どもの根本的なカン違いは、連中の発想がいわゆる〝正常な人間〟の域を出ていない所にある。俺のように生まれつき脳に障害があって意識のある時は常時幻覚や幻聴に悩まされ、激しい発作の度に傷害事件を起こすような凶暴な性格で、なおかつチ●ポが異様に太くて臭くて性欲が強く、10歳の頃から始めた下着泥棒に端を発してたいがいの性犯罪（ただしロリコンではないので幼女は襲わない／狂暴すぎて友人もいないので輪姦はしたことがない）をこなしたが、それでいて一度も警察の世話にはなっていない粗暴狡猾低能低俗下品が自慢の鬼畜な立場に立って「エロ

メディアの規制」を考えると、無意味どころかかえって逆に性犯罪を助長しないとも限らない愚挙としか思えねえからご愁傷様だ。

　前々から疑問に思っていたが、良識派のクズ善人どもは、どうして逮捕された性犯罪者が犯行動機を「○○というエロ雑誌を見て興奮してやっちまいました」などと説明する類の発言を真面目に信じるのだろう？　どうやら連中には犯罪者が平気で嘘をつける生き物だということが全然分かっていないようだ。俺もそうだが、そもそも無反省な犯罪者は嘘つきで、他人に対して正直になることなど全くない。他人ばかりか自分自身に対しても嘘をつき通すものだ。そういう犯罪者にとって「反省するフリ」など挨拶代わりの基本だということぐらいは、現場の刑事や警官が一番良く知っているだろう。犯罪者ができるだ大げさに反省したフリをして、罪が軽くなるように努力するのは当然のことである。どこの馬鹿が正直に「自分は幼い頃から性欲がもの凄く強くて、女を見る度に●りたくて●りたくて●りたくて●りたくて●りたくて仕方ありませんでした。今回被害者を襲ったのも、そうした強い性衝動のおかげです。自分は本当に●りたくて一生懸命女のあそこを●りまくりました。ちなみに今回●った女の締まり具合いは最高で、やっぱりナマはいいと思いました！」なんて言うのだ。起訴されたら裁判もあるんだから「(涙声で)ごめんなさい！　自分は……本当は女に声もかけられない気の小さい真面目で無害な一般小市民なんです。それがたまたま、目にして買ったエロ漫画を雑誌んでいるうちにムラムラと

性欲がわいてきて、自分が押さえられず、〝あの女を●らないと俺の人生は前に進まない〟などという妄想に精神が支配されて、ついつい犯行に及んでしまいました。したがって悪いのはボクじゃなくてボクの精神をおかしくして性犯罪を促したあのエロ漫画雑誌です。あれがなければボクはこんな大それたことなどしなかったと思います」なんて言いのがれをするぐらい当然だろう？

それとも何かァ？

全ての性犯罪者どもが逮捕後に口を揃えて「朝○新聞を読んでいたら、記事を書いている連中の品性の下劣さと邪悪さがダイレクトに電波となって僕のアタマに伝わって〝天下の朝○新聞が保証する。あの女はキミにハメ倒されるのを待っているぞ。いますぐ殴り倒して●っちまえ！〟という声が聞こえたので、ついつい強姦に及びました。あの新聞は恐ろしい淫乱電波を出しています」って言い出したら良識派のクソ善人どもは天下の朝○新聞の不買運動でも起こすのかァ？

俺はこれからも性犯罪で捕まる予定など全くないが、万が一捕まったらそのときは思いきりメディアの発信する情報そのものに責任転嫁してやろうと思っている。たとえば朝のテレビニュースをみていたらムラムラと性衝動が押さえられなくなって犯行に及びました！　と真剣にメディアの存在を犯行理由にするつもりだ。コレを読んでる読者諸君も、将来何かの犯罪で逮捕されたときに責任転嫁の対象にする善良メディアや良識派の人間を

決めておくといいぜ。

そんなわけで、おめでたいバカ善人どもは性善説でも信じているのか、人が性犯罪に走るのはエロメディアのせいだと、どうしても思い込みたいようである。しかしそれは全くの逆だ。

「我々性犯罪者はエロ漫画を見て女を●したくなるのではない。もともと女が●したくてたまらないのだが、やって捕まるリスクを考えて躊躇して、強●などの代償行為としてエロ漫画やAVを読んだり観たりするのである」

ということをよ〜く覚えておけ。

この世には俺のように、徹底的に他者への悪意に満ちて、さしたる理由もなく他人の権利や尊厳を完膚なきまでに侵害して蹂躙することに限りない喜びを感じる種類の人間もいるのである。しかも俺のような人間のクズは、己の行為にいかなる理由も正当性も一切必要としない。だから「人は何か明確な理由があって犯罪を犯す」などというお目出たい発想は、社会的に〝正常〟な意識や価値観を有するまともな人間のもので、我々変態クレイジー犯罪者の現状からはほど遠いものなのだ。そもそも非合法の犯罪に筋道の立った意義や理由は一切いらない。むしろそんなものがあればあるほど警察の捜査はたやすくなり逮捕される確率も高くなるので、完全犯罪を狙うときはなるべく動機のない名前も知らない

相手に対してする八つ当たり的な犯罪の方が有効であるといえるだろう。我々はさしたる動機も理由もなく通常意識のまま、ごく自然に平然とした顔でえげつない犯罪を犯せるからこそ変態クレイジー犯罪者なのだ。

……このへんで善人どもへ、音義ある提言でもしてやろう。

「青少年の性欲を刺激し、性犯罪を助長する本当にに罪深いモノ」が、一体何かお分かりか？

それは、過激なＡＶでもエロ漫画でもヘアヌード写真集でもない。それは皆さんの近所にいくらでもいる生身の異性(女)の存在である。写真や漫画やビデオなどは所詮、ナマの女の代償物でしかない。エロメディアの場合のように視覚や聴覚だけではなく、触覚や臭覚や味覚にまで訴えるからナマの女の存在感とその魅力は強烈である。何が一番ソソるかといってナマの女体ほどソソるモノはないだろう(一部のフェティッシュな連中を除く)。たとえば満員の通勤電車に無理矢理乗り込んで若い女と密着してしまい、女体の肉の質感を感じながらフェロモンたっぷりの汗や香水の二オイを鼻一杯に嗅いじまったらチンケな理性なんか簡単に飛ぶぜ。ましてや今年のようにキャミソールとかいう下着同然のヒラヒラした薄着に流行られてみろよ、「ああ昨年までは我慢できたが今年はもう駄目だ！　こうなったら●るしかない！　あいつら女どももあんな服着てソソってンだから、こりゃあも

う●ったって感謝されるだけだろう！」って思う奴が何百人も出るだろう。すでに春だというのに渋谷や新宿の路上なんかそういう太股まるだしの下着女が闊歩してるんだからたまんねえよ。こういう破廉恥な服を作ったり売ったりする奴らやグラビアに掲載するファッション雑誌はぜ～んぶエロメディア以上に性犯罪を助長する共犯だろう？　少々過激なエロメディアに触れるよりも、道を歩いていてナマの女と擦れ違った瞬間にほのかに香る女の体臭を嗅いでしまうほうが強烈で、そういうのが性犯罪のトリガーになりうることをバカ善人どもはホントに理解できねえのかねえ？

　そういうわけでエロメディアの規制なんてものは、お役所が大量の汚水で汚れた川の河口付近のみを掃除して川を奇麗にしようとするのに等しい愚行である。上流で汚水をたれ流す工場を何とかしないといつまでたっても問題は解決しないのだが、工場をツブすとおまんまの食い上げで食い詰める奴らが大量に出てしまうので工場をツブすわけにもいかず、住民に対しての体裁上、河口付近の掃除だけは続けているというのが現状だ。実際のところナマの女を規制するなんてのは到底無理な話だし、それ以前にナマの女以上に問題になってくるのが、我々男の〝性欲〟というやつだ。奔流のような〝男の性欲〟を何とかしなければ性犯罪の問題は何も解決しない。勿論、「ムラムラしたときは聖書を読んだりスポーツで健康な汗を流せばせばいい」などと言われて解決するようなら誰も苦労しねえんだよ馬鹿野郎。そういうときに役立つのがエロ漫画やＡＶやヌード写真集などのエロメ

ディアの存在だ。そうしたものをオカズにしてせ●ずりをこいて一発抜いてしまえば、強●決行直前であっても「また今度にしよう」という殊勝な気分になるものなのである。だからエロメディアはもっと淫らでいやらしく、見た瞬間に一発抜きたくなるようなエロいものが望ましいと俺は言いたい。

たとえばロリコンの問題がある。腐った熟女好きの俺は全くその趣味はないが、世界情勢は限りなくロリコンに不利な状況にあって、幼児に欲情するロリコン野郎は社会の敵どころか人類の敵で、できれば一人残らず地上から抹殺すべきだとの認識が常識となっていて、ロリータを扱うポルノへの規制はただごとではないのが現状だ。

しかし、末端のチャイルドポルノばかり規制して、幼女にしか性欲のわかない全世界約10億のロリコン野郎たちの性欲のケアについては何一つ考慮されていないのはどうしたことだろう。ロリコン連中の心情はわからないが、いまさら奴らに「君たちの性欲は間違っているから今後は成熟した大人の女や、腐った熟女のお●んこに欲情しろ」と強制したところで素直に納得すると思うか？　第一、人が何に対して欲情するかは個人の勝手で、それについてあれこれ言うのは重大な人権侵害であり余計なお世話というものだ。賞味期限の切れかけた熟女の腐ったお●んこにしか欲情できねえ俺にしても、グロくて臭え熟女のま●こを至近距離でしみじみ見ていると、ホントに「よくもまあこんな汚穢じみたモノに

欲情できるよなあ」と感心するぜ。あんなグロいモノに欲情するほうがロリコンよりも変態なのかもしれないねえ。すでに持ってしまった性的嗜好は洗脳でもしない限り変えようがない。だからこそエロ漫画やAVなどのエロメディアの〝性欲のガス抜き効果〟が重要になってくるのである。良質のオカズがいつでも手に入る状況があれば性犯罪はある程度抑制できる（それでも犯罪を犯す奴はどんな時代にも必ずいる。バカの絶対値ってのはあるからな）。だからエロメディアの作り手たちは共同体の性的秩序維持のためにも、それを目にした奴らが思わず一発抜きたくなるような良質のエロを作るという重要な使命がある。良識派のクソ善人どもは「性欲も食欲と同じ本能なのだから、エロメディアは田を耕す農民や街の食堂や定食屋と等価の重要性を持っているのだ」ということを認識しろ。全てのエロメディアを規制してこの世から抹殺しても性犯罪はなくならない。そんなことをすれば欲望のはけ口を失った連中によって今よりもっと陰惨な性犯罪が多発するだろう。お前ら良識派のクソ善人どもよりもエロメディアの作り手たちの方がよっぽど世の中のためになってるんだよ。

わかったら今後は黙ってろよ！

なぜいまホラー映画が流行するのか？

村崎百郎（鬼畜ライター）

ホラー映画の流行——それは単純に考えて〝恐怖〟が求められているということにほかならない。ホラー映画の現状を語る前に、〝恐怖〟そのものについて簡単に考えてみよう。

〝恐怖〟は本来、自己保存本能に基づく危機回避のために人間に備わった、個体の生死に関わる非常に重要な感情である。人類が恐竜や猛獣などの脅威にさらされていた原始時代にあっては、誰よりも早く〝恐怖〟を敏感に感じ取り、迫り来る危機を回避できた者だけが長く生き延びられたであろう。そういう時代に生きた人間は、生きるために〝恐怖〟したのである。ところが、現在のように高度に文明が発達し、社会が安定した状態の中では、〝恐怖〟という感情は本来の目的を越えて、個人の快楽追及のための〝娯楽〟として囲い込まれてしまっている。外敵からの脅威にさらされていた原始時代や、食料の乏しい飢餓の時代や、いつ死んでも不思議ではないような戦争中とは違って、今日一日を生き抜くことがさほど困難ではない現代日本に生きる我々にとっては、〝恐怖〟は暇つぶしの娯楽のための感情として機能していることの方が圧倒的に多いのが現実だ。

社会が安定し、穏やかな平和が続けば続く程、人々は娯楽としての〝恐怖〟を求めるだ

ろう。だらだらと続く変わりばえのない日常がもたらす〝退屈〟とまともに渡り合えるのは、発狂レベルの宗教信仰心や超国家主義的な目的意識（例えば世界征服とか）でなければ「絶対安全圏から安心して体験できる〝恐怖〟」にほかならない。

過度なストレスは個体の生命を危うくするが、適度なストレスは生命体が持つ免疫力を高める効果があり、「全くストレスのない平和すぎる生活」というのも健康には良くないらしい。そういう話を聞くと、遊園地のジェットコースターなどの絶叫マシーンの過激さが年々エスカレートし、遂には高所からの投身自殺シミュレーションとしか思えないバンジージャンプが流行るようになったのも、我々が単に〝娯楽としての恐怖〟を貪欲に追及するだけの馬鹿な生き物ではなく、潜在意識の奥底では種としての危機回避能力や免疫力を低下させないために努力をしようと考え、進んで恐怖を体験しているのではないかという、好意的な解釈も可能である。我々人類が種として強くあるためには決して〝恐怖〟することを忘れてはならないのだ。

さて、一口に〝恐怖〟というが、社会が高度に複雑化した現在、〝恐怖〟もまた同様に多種多様化している。試みに〝恐怖〟を産業の分類のように区分して考えてみよう。

自分自身の命に関わる恐怖――自分が殺されるかもしれない、誰かに襲われたり事故で怪我をしたり死んだりするかもしれないという、自分の身にふりかかる基本的な恐怖を「第一次恐怖」とするなら、自分が殺されるわけではないが、自分の家族や恋人や子供など、自分の愛する人々の命が危険にさらされ、それらが失われるかもしれないという、恐

怖は「第二次恐怖」ということになるだろう。
　ホラー映画は、そのほとんどが観客が主人公に感情移入して襲ってくるモンスターたちと戦う「第一次恐怖」に属するものが多いが、最近は「第二次恐怖」をメインのテーマにすえたものが多くなっている気がする。例をあげればスティーヴン・キング原作の映画化『ペット・セメタリー』や『痩せゆく男』のラストシーンなどがそうである。なまじ他者への愛という感情があるがゆえに起こる恐怖と惨劇――「第一次恐怖」の映画が「怖い映画」ならば「第二次恐怖」の映画は「イヤな映画」ともいえるだろう。中田秀夫監督の『リング』のラストもこれに該当する。愛する我が子の命を救うために、年老いた両親に死のビデオを見せに車を走らせる母親の姿は、愛や憎悪や慈悲や妄執のいりまじった判断のつかない複雑な感情を観る者に突きつける。子供を救うために主人公が老いた両親を犠牲にするという構図が、そのままお年寄りに冷たいこの国の福祉政策の不備を表すメタファーであり、実は我々は誰もが意識せずに老いた両親を殺しに行くあの母親と同じことをしているのであるという解釈も充分に可能で、それがあの映画の後味の悪さに拍車をかけているのかもしれない。
　もう一つ、産業でいえば主にサービス業の第三次産業に相当する「第三次恐怖」というのも確実に存在するだろう。これは、自分の命も愛する人たちの命も危うくなるものではないが、自分がこれまで築いてきた社会的地位や名誉が一瞬で失われてしまうかもしれないという、恥をかかされたり自分の所持する大切な「モノ」が損なわれてしまうのではな

いかという恐怖である。これには様々なパターンがあって、自分の大切な趣味の領域が犯される恐怖、たとえばアニメオタクたちが大切にしているプレミアグッズやフィギュアが無残に壊されるという恐怖もあれば、インターネットなどのパソコン上のコミュニケーションで正体もわからない連中にデマや誹謗中傷を受けて大恥をかかされるなどの恐怖も含まれる。大蔵省のエリート官僚が汚職で捕まって一夜で転落して人から蔑まれるという恐怖もあれば、部下の造反にあって社長の座を追い落とされる恐怖もあるだろう。締め切りが過ぎても原稿が上がらず本が出ないというのも、赤の他人にはどうでもいいことだが当事者たちにとっては充分に恐怖である。いずれにしても「第三次恐怖」は、現象だけ見ると「別に生命の危険など全くないのだが、個人にとって重大な意味を持つ有形無形の〝価値〟が侵害されたり失われたりする恐怖」であり一次恐怖や二次恐怖に比べると「贅沢な恐怖」なのである。しかし、社会が複雑化すればするほどこうした「贅沢な恐怖」が死ぬか生きるかの切実な恐怖へと変わってしまう可能性は充分考えられる。よく我々日本人は恥を重んじる民族だと言われるが、それでなくとも、若い女性にとっての「自分が太っていく恐怖」「年老いて醜くなっていく恐怖」「仲間からイケてない子という烙印を押されて無視される恐怖」などは、命にかかわる「第一次恐怖」以上の恐怖で彼女らにとっては生きるか死ぬか以上の問題かもしれないのだ。今後はこうした「第三次恐怖」に関するホラー映画が作られるようになるかもしれない。福本伸行氏の描くディープなギャンブル漫画『アカギ』や『金と銀』などの映像化もこれに該当するだろう。

こうした様々な恐怖が映画化されることは映画の観客としては非常に楽しみである。個人的な感想だが、こと邦画やVシネマに関しては、どういう理由か知らないが、今まであまりにも安易にヤクザが出てくる映画が多すぎたような気がする。ヤクザ映画は仕方がないにしても、そうでない映画でも実によくヤクザが登場してくるのが邦画の特徴で、これが映画の安っぽい仕上がりに絶大な効果をもたらしている気がしてならないのだが、どんなものだろう。ヤクザの持つ暴力性と恐怖にも見るべきものはあるが、それも健さんの時代の仁侠映画ならいざ知らず、現在邦画で描かれるヤクザは恐怖というよりひたすら鬱陶しさしか感じられない。そうした現状から、観客がヤクザの恐怖とは別の、良質な恐怖を求めていることもホラー映画が流行する理由の一つとなっているのではないだろうか。

最後になったが、個人的にお薦めのホラー映画（邦画）は何といっても黒沢清監督の『CURE』である。これは霊感商法や宗教サギを助長する荒唐無稽の下らないオカルト映画とは違って人間という生き物の不可解な部分をリアルに描いた秀作だ。今後に期待する監督は『女優霊』と『リング』の中田秀夫監督だ。どちらも凄くイヤな映画で良かった。

思い出の鬼畜せ●ずり

村崎百郎

下着泥棒を初めたのは、ち●ぽ汁が出るようになったのとほぼ同時の十歳の頃だったな。

なんせ、当時の俺には「自分のズリ●タは自分で調達する」という「自立の思想」があったからねェ。ああそうだ、ち●ぽ汁が出始めた頃のせ●ずりは大切だよォ〜、チ●ポの勃●は「オトコの自立」を象徴するモンだからな。この時期に立てるモンをちゃ〜んと立てておかないと、後の人生で強靱なま●こに出会ったときに太刀打ちできなくなっちゃうからね。そんなことでは相手に対して失礼だと思うワケよ。だから、ち●ぽ汁が出始めの頃は人間としても男としても思い切り発情して妄想ふくらまさなけりゃ嘘だと思うんだよ。

だいだい俺は3歳の頃から母親の鏡台の前でブリーフを絞ってTバック状態にして、自分の尻を眺めながら悦に入っていたようなフェティッシュなガキだったから、成長して女の下着かっぱらって匂いかいだりしゃぶったりしてせ●ずりするぐらい当然なんだよ。

それに俺は昔っからテレビに出てるアイドルが大の苦手でさ、マジで好きになったことなんかないし、ましてやズ●ネタにしようと思ったこともないね。俺が欲情していたの

をやっても全くバレなかったんだから、いま考えると呑気な村だったんだよなあ。

自分で言うのも何だけど、俺の手口は巧妙だったね。だいだい深夜2時前後のイナカの人間がみんな寝静まった頃に家の窓から外へ出て目当ての家に行くんだけど、せ●ずり目的で押し入った家では絶対に盗みはやらなかった。何となく「欲張ると失敗する」って気がしてたのよ。目標の家のまわりを妄想電波で探って鍵がはずれやすい窓を見つけて、窓枠を小刻みに揺さぶって鍵を外して中に入る。入ったら誰もいないのを確かめてから、タンスや風呂場を物色して奥さんや娘の下着をゲットして、ゆっくり眺めたりして楽しんでから布団をしく。その上で全裸になって、パンティやガードルを履いたり頭に被ったりして思い切り女を●す妄想をアタマが焼きキレるぐらい走らせながらせ●ずりを楽しんでから射●後には現状を元通りにして帰るワケだ。

下着や布団がチ●ポ汁で汚れないかって？　それは大丈夫なんだよ。俺は隣町に行ったときに自販機で大量にコン●ーム買ってたからね。コン●ームを装着したうえでせ●ずりをするからちり紙さえたっぷり持っていけば大丈夫なんだ。まあ、そもそも俺のせん●りは厳密にいうとせ●ずりとはいえない。俺のオ●ニーは、ぺ●スをしごくいて射●するタイプの「しごき型オ●ニー」ではなく、ぺ●スをフトンなんかに押しつけて圧迫感で快感をひき出す「押しつけ型オ●ニー」なんだ。このときに自分のア●スに何か適当なもの（バイブとか魚肉ソーセージとか）を挿入しながらやると快感は2倍以上で気持ちがいいぜ。まあ、男も女もア●ルの快感は若いうちに開発しとかなきゃダメだね。いちいち恥な

は、いつも隣近所にいるおねえちゃん達――たいして美人でもないんだけど、ちゃんと現実感があって、やろうと思えばいつでもあぜ道で押し倒してコトに及べそうな身近な存在――要は「手をのばせばとどく距離」にある下着の持ち主に発情してたワケだ。そのへんは俺も妙に現実的なガキでさ、ド田舎に住んでたせいもあって、どうせヤレるはずもないのにテレビに出てる女に発情したって仕方がないって、ハナから諦めてたんだな。まあ、清純そうにしているアイドルなんて、今も昔も全員嘘っぽくてヘドが出そうだね。連中の股●からは一人の例外もなくドロドロゲロゲロのこえ溜めじみた精●と糞の入りまじった超最低のゲスで下品なニオイがプンプンとニオってくるような臭え電波がビンビンに来るからどいつもこいつも目の前にいたらブン殴りたくなるよ。そうそう、俺は端正な美人見ると無性に殴り倒したくなるんだよ。犯したいんじゃなくて、ただただ思い切りブン殴りたくなるだけ。そういうネガティブなコト考えてる奴は俺だけじゃないから身に覚えのある美人は道を歩くときはキチガイに気をつけな。

……ええと、ちょっとばかり話が脱線しちまったようなんで、せ●ずりに戻ろう。

　下着泥棒の次に俺が当時ひんぱんにやったのは、ご近所の留守宅に忍び込んで、奥さんや娘の下着をオカズに一発抜いて帰るという「押し込み強盗せ●ずり」だ。

　全部で五十回ぐらはやったねえ。それで中学を卒業して村を出るまで、4年間で半径数百メートル以内の、俺の好きなタイプの女のいる家のほぼ全てを制覇したもんだよ。いま思い出すと甘酸っぱいカルピスみたいな「輝かしい青春の思い出」だよ。それだけのコト

んか考えてちゃあ、質の高い快感は得られねえよ。

とにかく一度もつかまらなかったんだけど、たった一度だけ、奥さんが一人で家に残っている新婚家庭の家の窓を開けちまって、奥の寝室で寝ていた奥さんに「だあれ？」って声を立てられて驚いて逃げたこともあったね。それから半年ぐらい人の家に忍び込むのを止めて様子を伺っていたんだけど、警察の捜査も何もなかったんで懲りずにまた忍び込んではせ●ずりをしていたよ。

いろんな家があってさ、ある家なんかは家の連中が全員すごくだらしなくて、忍び込んでみたら、家の床じゅうにせんたく物が畳まれもせずに放置されていて驚いたことがあった。俺の前に盗みに入った奴がいるのかなと思ったらそうじゃなくて、ただ単に、家ぐるみで「だらしない一家」だったのよ。その時はあまりにもキタナイんで、ぜ●ずりもしないで帰ってきた。世間にはそういう家もあるんだよ。地味な奥さんが派手な下着持ってたり、服はいつもお洒落なんだけど下着だけはボロばっかりって奥さんもいたし、人の家に忍び込んで探ればいろんなことが分かって面白かったね。そういうことを思い出してみると、後年俺の趣味になった「プライバシーあばきのゴミ漁り」の基礎は、その頃できあがってたんだな。で、何がいいてえのかというと、「人に歴史とせ●ずりあり」――どんなツマラナイ奴にも、これまでたどってきた過去やせ●ずりの歴史があって、その人間のせ●ずりを知ることとは、その人間を理解するうえで最重要とはいえないが、知っておいたほうがいいかもしれないぞと――まあ、要はそういうことだ。

ノゾキの快楽を考える

村崎百郎

ノゾキの快楽は女の●みたいに奥が深いぜェ。何を隠そうこの俺は10歳の頃からすでに下着泥棒をやっていた早熟なエリート変態で、12歳頃からは深夜にこっそり家を抜け出して、他人様の留守宅に忍び込み、タンスの中や洗濯機の中からそこの家の奥さんや娘の下着を総チェックして、汚れたパンティを頭から被ったり履いたりしながらニオイを楽しみセ●ズリをこきまくって、その後片付けて帰るという「家宅侵入オ●ニー」を数十軒楽しんでいたんだが、そういう時のオ●ニーは普段家でするオ●ニーの何倍も気持ちがイイものだった。その理由は、単純にチ●ポをこすって行う肉体的な「射精の快楽」だけではなく、「自分は今、相手の承諾無しに勝手に相手の家に押し入り、相手のハズカシイ秘密をノゾキ見ている」という精神的な「ノゾキの快楽」が加わっていたからに他ならない。この快感は、相手が他人に知られたくないプライベート情報（下着の汚れやクサいニオイなど）を自分だけが密かに知ってしまったという満足感から無根拠に得られる征服感と達成感に、「自分はいま男としても人間としても最低にカッコ悪くて下らない〝ノゾキ〟というゲス行為をやっている人間のクズなんだ」という自己の美意識を完全否定するタブー破りの倒錯的な快感が加わって絶妙な相乗効果を上げたワケだが、ここで注目すべきは「タ

ブー破りの快感は、そのタブーの度合いが強ければ強い立場の人間がやればやるほど大きい」ということである。要は、非合法な犯罪的ノゾキ行為は、中卒で倫理感が全くない恥知らず鬼畜の俺のような馬鹿よりも、医者や弁護士や上級公務員など、高学歴で高い知性と強い倫理感を要求される知的階層の要職にある人間がやったほうが得られる快感が大きいということであり「将来、ノゾキを楽しむために医者や弁護士をめざす」というのも変態として立派な生き方の一つである」ということだ。そういう向上心も持つのも悪くないぜ！

ゲス

✹村崎百郎書き下ろし小説



フリークスキラー

フリークス・キラー

村崎百郎

　非合法の復讐屋をやっている俺が、身体障●者や知的障●者ばかりを狙い陰惨な殺人をくり返す殺人鬼、通称「フリークス・キラー」の殺害依頼を受けたのはつい昨日のことだった。

「犯人が警察に逮捕される前に、確実に殺してほしい」「できれば、あの子が味わった以上の恐怖と苦痛を犯人に与えてから、思いきり酷く殺して下さい」

　依頼人の中年夫婦は、被害者の遺族にありがちの魂を抜かれたような憔悴しきった表情を浮かべながら、力なく淡々と、それでいて憎悪のこもった強い口調で俺に語った。いいじゃねえか、イイ顔してるぜ、あんたらよォ。俺は赤の他人の強烈な憎悪の感情を見るのが大好きなんだ。

「確か三人目の犠牲者といえば、き●玉を蹴り潰されてから心臓をえぐられて殺され、そのあと御丁寧にナタでカチ割ったアタマの傷口に百科事典のＣＤ-ＲＯＭを三枚も差し込まれてＴ大の校門にさらしものにされた哀れな知的障●児のボーヤだったよな。アレ以上の酷さで殺せばいいいんだな」

そう言ったら、ババアの方は息子の悲惨な最期を思い出しちまったのか声をあげて泣きだしちまった。いいねえ、いいよォ、そうやってマジで泣かれると、ひと事なんだけど俺も何となく燃えるぜ。やっぱり遺族はこうじゃなくちゃいけねえよな。

「あんたらのボーヤの死体に添えてあった犯人の手紙の『彼には知性が不足しているようなので、頭に辞書や事典を入れておきました。天国の大学で真面目に勉強して立派になって下さい』ってのもフザケてたよなあ。まるで親切のつもりで殺してるみたいでよォ」

「……ウチの息子の場合もそうですが、この犯人によると思われる一連の殺人事件の殺害方法や猟奇性を考えれば、このままでは犯人が逮捕されても精神鑑定を受けて無罪になる可能性は充分あります。私達はそんなことでは絶対に納得なんかできません！」

ジジイの方が悔しそうに言う。

確かにこいつは犯人逮捕後に良識派の人権屋弁護士どもがアツく燃えそうな事件だ。すでにマスコミでは心理学者や教育評論家どもが「この事件は教育や社会や政治の荒廃が生んだもので、犯人を逮捕するだけでは解決する問題ではありません」などと言って、何とか自分の得意分野の商売に結び付けてワイドショーに出演し、自著の宣伝をはかろうと手ぐすね引いて待ち構えていやがる。これでもしも犯人が未成年だったら、世をあげて「いったい私たちはどこが間違っていたのだろう？」という大反省ブームが巻き起こることは間違いない。まあ勝手にやってくれという感じだが、虫ケラみたいに惨めに殺された被害者たちの遺族が、「罪を憎んで人を憎まず、みんなで犯人の更生を温かく見守りま

仕事をこなしたことを証明するのが目的なのだが、本当は誰かに見ていてもらわないと俺一人ではついズルをして、そのへんを歩いている適当な奴を殺して「復讐を終えました」といいかげんな報告をしたくなるからなのだ。その方が楽だが、そんなことを続けるといつか悪徳復讐屋という悪い評判が立って客がこなくなりそうなので自粛しているのだ。
「俺が復讐を完了した後に、あんたらが発作的に良心に目覚めて覚悟の自殺をやらかしたって、それはあんたらの自由だから別に止めないけど、頼むからそういうのは復讐代を全部払ってからにしてくれよな」
ちなみに俺の復讐代はそれほど高くはない。「イイ殺しを安く」をモットーに、必要経費を別にして、世間でいう婚約指輪の相場(誰が決めたんだか知らねえけどよ)と同様に依頼人の給料の三か月分という無理のない良心的な価格で引き受けている。だからこそ、代金の取りっぱぐれは極力避けたいのだ。
「わかりました。宜しくお願いします」
「復讐相手の最期はちゃんとビデオに録画してテープを渡してやるから安心しなよ」
そう言って依頼人の夫婦と別れた俺に、アタマの奥に取り憑いている別人格のホタルが語りかけてきた。
《鬼畜界で大人気のフリークス・キラーの殺害とは、随分とやっかいな依頼を引き受けたねえ》
「俺と同じサイコ野郎だ。相手にとって不足はねえだろ」

しょう」という善良で慈悲深く、単に正しいだけの意見に素直に納得できるワケがない。
「そうだろう、そうだろう。あんたらの無念は復讐屋のこの俺が確実に晴らしてやる」
俺は口元を歪め、依頼人のジジイとババアのツラを覗きこみながら念押しした。
「だけどカン違いするんじゃねえぜ。あんたらは発狂鬼畜復讐屋のこの俺に復讐を依頼した時点で犯人と同じ、いや、ことによると犯人以下の人でなしになり下がっているんだからな！」
「俺の復讐方法はハンパじゃねえ。行きがかりで赤の他人を間違えて殺すこともあれば、犯人殺害のために居合わせた無関係な人間を大量に殺傷することも厭わない。実際、これまで仕事上で随分と無関係な奴らを大量に殺してきた。多分、俺自身は本当は誰でもいいから人が殺したくて復讐屋をやってるんだろうよ。俺 は手段の為なら目的なんかどうだっていいっていうサイコ野郎なんだからな」
そう言いながらわざとらしくバカみたいな高笑いをしてみせたが、ジジイとババアはとうに肚をすえていたのか、俺の言葉にはほどんど動揺しなかった。
「もう一度聞く。俺は犯人殺害のためなら何でもやる。この行為は正義とは何の関係もないただの殺戮だ。あんたらはそれを承知で依頼した。それでいいんだな」
ジジイもババアも少しも躊躇することなく深くかぶりを振った。交渉成立だ。
復讐の見届け人は殺されたボーヤの姉がやるという。見届け人には、俺が犯人を捜査する過程と殺害する所を逐一同行して見てもらう。この制度は、依頼人に俺が確実に復讐の

《そうかい？　本当は奴の活動を応援したいクチなんじゃないの？》

「フン、たかが連続障[redacted]者殺し程度しかできないカス野郎に、偉そうにこの世で一番の鬼畜を気取られたんじゃタマンねえよ。誰が一番最低で最悪なのかを思い知らせてやるぜ」

生まれながらに強度の幻聴幻視癖のある真性キ印体質の俺は、一人でいるとアタマの中に渦巻く声や眼前に広がるシュールな光景にしばしば我を忘れて何をするか分からなくなる。他人と一緒にいるのは苦痛だが、誰かといれば少なくとも自分が誰かを確認することはできる。何とかそれを自分一人でできないものかと、あるとき心の中に「もう一人の架空の人格」を作り上げて名前をつけたのがこのホタルだ。そうやって一人になる度にホタルと対話を続けていたら、そのうちにホタルはまるで本当に独立して実在する人間のように好き勝手に振るまい、俺にあれこれ意見をするようになった。しかも便利なことに、ホタルはウルサイばかりではなく、ときどき俺の身体から離れて遠くの街を徘徊し、他人の意識の中に潜入して他人の記憶をかき回したり、他人の情報を持って戻って来るという異様な能力を発揮しはじめた。こんなのは冷静に考えれば全部が狂った俺の妄想で、「超能力」とは程遠い「妄想力」だとしか思えないのだが、実際に仕事の面で色々と役に立っているんだから、それほど深く考える必要もないだろう。

「とりあえずは、事件の情報集めだな。ホタル、俺の脳神経を妄想インターネット内の〈なかよし鬼畜サイト〉の猟奇犯罪ＨＰにつないでくれ」と、言うが早いか俺の眼前になまなましい血色の画面が現われた。カン高くけたたましい笑い声と、人を小馬鹿にしたよ

うな皮肉な口調のダミ声が大音響で耳元に響く。
《オーッホッホッホッ、イーッヒッヒッヒッ！　オーッホッホッホッ、イーッヒッヒッヒッ！　元気かな便器かな？　ゲーンキに便器にしゃがんでフンばって臭いクソをひり出してるかな？　ウジの糞以下の最低のクズども諸君よォおおおおお！　リョ～キはいいぜえええええ、リョーキ事件はよおおおおおお！》
《さあさあ今夜も世間を騒がすホットで悲惨な猟奇事件のヒットチャートの時間だぜェ！　今夜のＢＧＭの女の悲鳴は、二年前にシブヤで起きた連続幼女殺人事件の二人目の犠牲者ゆかりチャンと三人目の犠牲者のりかチャンが肛●に焼け火箸をつっ込まれて殺害されたときに犯人が録音した断末魔の悲鳴だあ！　こいつはご当局のお偉いさんから流出した超レアモノの貴重な音源だぜェ～！　心して聴きやがれこのカスどもおおおお！》
　番組のＤＪのスーパー猟奇マンは、もったいぶって偉そうに言うが、何のことはない。「ママー」とか「助けてエ～」とかいう声のあとに「ギャー」というウルサイだけのガキの悲鳴がくり返し聞こえるだけだ。こんなにド退屈なつまらねえ悲鳴でも幼女虐待マニアにはたまらねえんだろう。興味のない俺にはサッパリだ。
《さあて、今週10位は初登場で、先日起きた尼崎の通り魔殺人だ！　犯人はシャブでテンパッて「伊藤博文と聖徳太子が福沢諭吉と結託して俺を十円死刑にしようと細川ガラシャに色仕掛けを頼んだ！」と意味不明の被害妄想を持って柳刃包丁をふり回して走りだし、表通りで目についた一番弱そうな通行人の屋島佳子ちゃん（８歳）に襲いかかり馬乗りに

が、そのくせいつも「俺はいつかデカいことをやってやる！」というのが口グセでした。今回の事件があいつのいう「デカいこと」だとすればホントーにお笑いです。このままでは「犯行時に心身喪失」ということで無罪になりそうな気配が濃厚ですが、あんな奴はこの先、生かしておいてもロクなことをするわけかないので、医学の進歩のための生体実験にでも使って殺しちまうのが上等だと思います〉だってさ！　いやあ、人気者は生まれも育ちも一味違うねえ！》

《他にこんなのもあるぞ〈スーパー猟奇マンさんはじめまして！　私は尼崎の事件で殺された佳子ちゃんの親友の晴子です。殺されたとき佳子は、私の家に遊びに来る途中でした。周りのみんなは今度のことで「気を落とさないでね」とか「がんばってね」とか言って私を励ましますが、実は私は美人で可愛くてみんなに人気のある佳子なんか大キライで、心の中ではいつも「おまえなんか死んでしまえ！」と願っていたので今度のことはとっても嬉しかったです。きっと神様が私の願いを聞き届けてくれたのでしょう。今は人が沢山お参りに行くのでできませんが、落ち着いたら佳子の墓に小便をぶちまけて糞を塗りたくってやるつもりです〉う〜ん麗しい友情だねえ！　最低だぜ！　最悪だぜ！　ついでにテメエも死にやがれよ、腐れマ●コのションベンガキがぁ！　そして第9位は先週から2ランクダウンの福岡の保険金殺人！　犯人の……》

　善良な正常人が聞けば怒りのあまりに脳溢血を起こしちまいそうな不謹慎な発言の数々だが、真性鬼畜の俺には三十秒も聴けば充分過ぎるぐらい眠気を誘う退屈さだ。俺はホタ

す、あなたの行う卑劣極まりない殺しの現場を思い浮かべるたびに、私のあそこはいつもグショグショに濡れっぱなしでついついオ●ニーに耽ってしまいます。何の罪もない非力な障●者の皆さんが理不尽な暴力で徹底的にいたぶられて殺されるなんて、ぜんぜん民主的でもないし、大切な人権が侵害されているような気がするんだけど、そうであればあるほど私の身体の深いトコロがうずいてたまらなくなるんです。ウフッ、何て罪深い私なんでしょう。そんな私でも学校や家庭などで友人や家族といるときにこの事件が話題になると、鬼畜であることがバレないように、半狂乱になって「弱者である身障者ばかりを狙って殺すなんてホントに最ッ低の犯罪者だわ！　犯人は絶対に死刑にするべきよ！」と怒りに燃えたフリをして涙ぐんで真剣に叫んでいるんです。そういう嘘つきの自分がなぜかとっても可愛く思えます。フリークス・キラーさん、これからもどんどん身●者を殺しまくって下さい。世間のみんなは事件に憤っているフリをしているだけで、ホントーは拍手喝采を贈っている鬼畜もたくさんいるんですから〉なんていう正直な少女もいるぜ！〈もしかするとフリークス・キラーはこの国の永遠の繁栄を願って国内の役立たずを一掃しようとしている超国家主義的な思想を持った愛国者ではないでしょうか？　でなければあんなに人でなしの鬼畜な行為をあんなにも続けることはできないと思います〉という好意的な意見も多数寄せられてるしなぁ！》

　アホぬかせよ、仮にそうだとしてもキ印には変わりねえよ。そう考えるとホタルが横から口を出した。

なってメッタ刺しをしたという、とっても電波なサイコ野郎で、こいつはすぐさま駆けつけた警官に向かって、「このガキの裂いたハラワタの直腸付近にたまっていた糞は臭すぎる、一体親はどういう教育してるんだ馬鹿野郎！」と見当違いの文句を言って、怒った警官に発砲されて右肩を貫通する重傷を負ったりというナカナカのナイスガイで、逮捕後も弁護士を通じて「銃で撃たれた腕が痛くてクソをしても尻が拭けない。どーしてくれるんだ！　足利尊氏の顔を立てて取調べには応じてやるから、俺のケツ拭き専門の若くてキレイなナイスバディの婦警さんをつけてくれェ！」と贅沢なコメントを発表して顰蹙を買ってるらしいから立派なモンだねえ》

　あ～そうかい。

《リクエストの祝電やメールも続々届いてるぜ！　その中から犯人の中学校時代の元同級生というK大の学生（21歳）のメールを紹介しよう！〈スーパー猟奇マンさんコンニチハ！　いつも楽しく猟奇事件ヒットチャートを拝見しています。昨晩ニュースを見ていたらイキナリ中学のときの同級生の顔写真が通り魔殺人の犯人として登場していたので笑っちゃいました。あいつはハッキリ言ってどうしょうもないクズ野郎で街中のみんなが、こういう事件が起きるのは時間の問題だと思っていたので、亡くなった佳子ちゃんには悪いけど、今回のことは当たり前すぎて大笑いです。あいつの親父もシャ●の元締めをやっていた最低のヤー公で、あいつは中学生の頃から親父のシ●ブをくすねて教室で腕をまくって堂々と打っていました。頭もサル並みに素晴らしくて成績はいつもクラスの最低でした

う二文字言葉が死ぬほど嫌いだ。

《愛のある殺人か！　道理で強いわけだ！》ホタルがチャチャを入れる。

「だったら余計に不愉快だよ」

俺はそれまでさほどフリークス・キラーに腹が立たなかったが、〈愛〉と聞いて無性にムカついてきた。「何てけがらわしい野郎だ！　キリストのつもりかよ」

こいつは殺した後に逆さハリツケにして五寸釘で性●を打ち付けて教会の屋根から吊るしてやろう。俺はそう決めて眠りについた。

翌朝、見届け人の姉ちゃんが俺を訪ねてやってきた。地味な顔立ちだがえらく気の強そうな女だ。こいつなら人殺しの現場に立ち会っても冷静にビデオで撮影できるだろう。俺は彼女に8ミリビデオと鋭いナイフを手渡しながら言った。

「復讐相手を探している間に何があるか分からない。自分の身は自分で守ってもらうぞ」

「はい」

「俺自身が最凶最悪の超サイコ野郎であることも両親から聞いているはずだ。身の危険を感じたらいつでもそれで俺を刺せ。いいな？」

「……はい」

「あんたの役目は俺が復讐を完了するまで俺を監視することだ。あんたの両親にも言ったが、俺は復讐相手を追いつめる為の手段は選ばない。おそらくあんたの目から見て、これ

ルに番組の早送りを命じた。

《そして今週も第1位は堂々連続二十五週目の皆さんもご存じのアノ事件、警察の必死の捜査をかいくぐり、障●者ばかりを連続十二人も殺した「フリークス・キラー」だあああああ！　しっかし、先週土曜日の殺しも凄かったねえ！　都内の盲学校に通う十六歳の少女が、両の目玉をえぐり取られてでっかい魚眼レンズをブチ込まれてシブヤにあるプラネタリュウムの座席に放置されていたという猟奇的な手口にはさすがの俺もマイッタぜェ！　『東京には空がありません。せめてここでキレイな星を存分に眺めて下さい』っていう優しさにあふれた置き手紙も詩的で凄すぎるよなあ。あれは四番目の殺人で、聾●者に携帯電話を四十八個も無理矢理食わせて窒息させて殺した事件と発想が同じだねえ！　いやあ、ファンとしちゃあ、次はどんな殺しをやるのか楽しみで仕方がないねえ。聴いてるかフリークス・キラー⁉　絶対に捕まるんじゃやねえぞ！　お前は俺達ゲス鬼畜のヒーローだ！　俺達はもっと悲惨で陰惨な悲劇や殺しが死ぬほど見たい！　俺達の好奇心とゲス根性が芯から震えて小便をチビるばかりかクソまでもらすような、とびきり残虐で圧倒的に理不尽な最凶最低最悪の地獄を見せくれョオオオオオオオオ！　お願いだぜこん畜生ォオオオ！オーッホッホッホッ、イーッヒッヒッヒッ！　オーッホッホッホッ、イーッ ヒッヒッヒッ！》

《そして支援の手紙も沢山来てるぜ！〈フリークス・キラーさん頑張って下さい。あなたの芸術的な殺人行為はナチよりも美しく、満州で活躍した大日本帝国陸軍よりもステキで

話だが、それでもこの女は依頼人の家族で復讐の見届け人だ。仕方がないので、「あんたの無念は良く分かった。必ず俺が復讐してやる」と言って女の肩を優しく抱いて励ましてやった。

人生は猿芝居の連続である。

泣きやんだ女を連れて俺が最初に向かったのは新宿にあるホラー関係の専門書店「ブッククラブ怪」だった。店主の親父は店に入ってきた俺の顔を見るなり不快感をあらわにして、「ここではまずい、話があるなら店の奥の事務所で聞こう」と目で合図を送ってきた。

事務所へ入ると親父はいきなり怒鳴りはじめた。

「おい、約束が違うぞ！　もう金輪際ここへは来ないって言ったじゃないか！　頼むから黙って帰ってくれ、俺はもうあんたにウチの会員の情報を売るのは嫌なんだ！　あんたはいったいウチの顧客を何人殺せば気が済むんだよ！」

「お前、なんかカン違いしてねえか？　見た目は変わらないかもしれねーけど、今日の俺はこの前来た俺とは全く赤の他人なんだぜ。人間は一人二人の単位で数えるんじゃなくて、一回二回という回数で数えるもんだってことがまだわかんねえようだな、このタコ！」

「何だと！」

クソ親父がいつになく反抗的な態度を取ったので、俺はとりあえず殴り倒して、机の上

《「人は自分のためではなく、愛する人や国家のためなら平気で人でなしにもなれる」って言ってたのはあんたじゃなかったのか？　え？》

そうだっけ？　俺はその時の状況次第で何でも言うし何でも思う。そんなことはいちいち覚えていないし忘れたくもない。基本的に自分以外の物事は何でもどうでもいいという俺のコトバには何の意味もこだわりもないのだ。そういうワケで俺はホタルを無視してフリークス・キラーに関する記事を検索した。参考になりそうな意見はほとんどなかったが次のような要旨の小論が目に留まった。

「フリークス・キラーが従来の殺人鬼と決定的に違うのは、弱者である身体障●者や知的障●者ばかりを狙って殺人をくり返すという部分だけではなく、フリークス・キラー自身がその猟奇的で残酷な連続殺人に個人の私利私欲を超えた何らかの強烈な使命感や目的意識を持ってそれを意識的に行っていることだ。その顕著な例は、彼が殺人現場に残していった多数の置き手紙の中に、被害者の障●者たちに対する侮蔑用語や差別用語が一言も書かれていないことからも明らかである。いや、フリークス・キラーは明らかに尊敬を込めて障●者を殺している。彼は崇高な使命感に燃え、殺人をくり返す自分を殺人鬼ではなく障●者たちの魂を救う〈救済者〉としてとらえているようだ。私には、それはある種の宗教的なドグマからきているように思えてならない。フリークス・キラーは間違いなく〈愛〉ゆえに障●者たちを襲っているのだ」

ことの真偽はともかく、俺はこの文中に登場する口に出すのもけがらわしい〈愛〉とい

「…と、いいますと？」
親父は顔についた血をタオルで拭き、鼻にティッシュをまるめて突っ込んだ情けない格好でびくびくしながら俺の顔を見上げた。
「ここの姉妹店にガイアクラブとかいうニューエイジ向けの専門書店があるだろう？　その顧客の宗教本マニアの中で、ドタマが限界以上にハジけてそうなサイコ野郎のリストが欲しい。特にキリスト教系の神秘学思想書を集中的に買っている連中のデータを過去十年まで遡れるだけ遡ってピックアップして今日中にリストを送ってくれ。頼んだぜ」
そう言い残して俺は女を連れて店を出た。
どういうことなんですか、と言いたげな女の表情を見て俺は歩きながら親切に説明してやった。
「あの書店の顧客には犯罪者や犯罪予備軍のサイコなマニア野郎が多いんだ。店の親父はそれを承知で犯罪をアオるような挑発的な情報が満載の本や雑誌を専門に売っている確信犯の鬼畜野郎だしな。だから少々ブン殴ったって火イつけたってバチなんか当たらねえのさ」
「そういう店だったんですか」
「ああ、都内に生息するマニアックなサイコ野郎の調査をするにはサイコーの場所だね。俺も復讐の仕事の情報収集でいつも利用させてもらっているんだけど、その度に店の客があとで何人かまとめて死んじゃうんで親父も最近俺に冷たくてさ……」

から俺のやることに合法的なことや理にかなったことはただの一つも無いだろうが。それでも黙って見ていて貰う。いいな？」

「はい、弟の復讐のためなら……」

気丈な女だ。俺は顔を近付けて女のあまり大きくない瞳を覗き込みながら訊いた。

「弟を殺した犯人が本当に憎いか？　殺したいと心から願うか？」

「……はい。確かに重度の知的障●をかかえた弟は家の中では厄介者でした。それは間違いありません……。私も小さい頃から弟のことで周囲にはやしたてられたり苛めにあったりして、〝あんな弟なんかいなければ良かったのに〟と思ったことも何度もあります……。だけどそれはほんの一瞬で……あんな弟でも私たちにはかけがえのない家族だったんです！　……弟は子供の頃、何もわからないくせにどこへ行くにも私を頼って私の後を必死でついてきたんです。みんなに苛められるから、ついてくるなって言っても、ヨダレを流してヘラヘラ笑いながら私の後をついてくるんです。私はそんな弟が憎くて可愛くて……」

そう言いながら女は退屈そうにしている俺を無視して声を押し殺してさめざめと泣き出しやがった。何でも小さい頃に思い余ってついてくる弟の顔に石をぶつけて四針も縫う怪我をさせたのを、両親には階段で勝手にころんだ傷だと偽ったりしたことを悔やんでいるらしい。石をぶつけられて血を流して泣きながらも必死ですがりついて甘えてくる弟の姿が今でも目に焼きついて離れないという。聞くに耐えないほど退屈で辛気臭い

「……ワリイワリイ、俺もだよ。これはいつもの発作なんだ。気にしないでくれ……」
「最初に言ったろう？　俺は自他共に認める発狂探偵だって」
「それって大丈夫……なんですか？」
「ああ、多分ね。俺は何も一日二十四時間中、一秒残らず狂っているわけじゃない。だからこうして普通に会話もできるんだ。不安だろうが俺を信じてくれ！」
「……」
女はいよいよ不審そうな表情を浮かべて黙って俺の顔を見ていた。
「並外れて狂った心と対等以上に闘えるのは、正常な心などではなく、それ以上に狂ったスーパー狂気の心なんだ。俺の狂気は俺の凶器さ。俺はこの狂気を武器にしてこれまで多くのサイコ野郎を葬ってきた。だから安心して見ていてほしい」
もちろん、こんなことを言われて安心できる奴などこの世に一人もいないだろう。それでも俺は言わずにはいられなかった。それは女に向けて言ったのではなく、自分に向けて言った励ましの言葉だった。

その日の夕方、俺はホタルからの連絡を受けて、女を連れて都内最大の強●チーム〈ビッグボーイ〉の首領に会いに行った。
待ち合わせの場所に現われた男は、一見地味な背広姿のどこにでもいそうなサラリーマン風のやさ男で、とても夜な夜な若い女を拉致しては●しまくる凶悪な犯罪者には見えな

にあった鉛筆を二つに折って、ささくれた部分を先端にして、親父の鼻の穴と耳の穴に片方ずつ無理矢理突っ込んでやった。そしたら親父はひどく喜んで床をころがって耳や鼻から汚い血をたれてギャアギャア泣き出したので、俺は き●玉を蹴飛ばしながら慰めの言葉をかけてやった。

「お前も懲りねえ野郎だな、また店に火ィつけられたいのかァ？」

　胸ぐらをつかんで引きずり上げたら親父は泣きながら血だらけの顔をブンブンと何度も横に振った。

「俺への協力を拒むなら、明日の朝までには、もうすぐ満四歳になるお前の可愛い愛娘の処●膜は１ミリ残らずあとかたも無くなってるぞ。それでもいいんだな？」

　そう言うと親父は悲鳴をあげて血相を変えて首を横に激しく振って泣きながら「何でも言うことを聞くからそれだけはやめてください」と俺への非礼を素直に詫びた。こいつは俺が単なる言葉だけの脅しを言う人間ではなく、いつでも平気で実行する超最悪の鬼畜であることをよく知っているのだ。

　見届け人の女は眉をひそめて俺の行動を見ていたが、文句を言うそぶりは全くなかった。だが、それでいい。並外れた鬼畜野郎を追いつめるには、こちらも相手以上の鬼畜にならなければやっていられない。

「安心しろよジジイ。今回はお前の店の顧客の鼻たれホラーマニアどもの情報が欲しいんじゃねえ」

ヨハネとか、そういう名前を名乗っていたと思います」
「そいつはエライな。聖者気取りかよ」
「何でしょうねえ……我々は本業の仕事の合間に集まっては非合法な犯罪を楽しんでいる反社会的な組織ですから、誰も本名を明かして活動したりはしません。みんな勝手に自分の好きな名前を名乗ってます」
「で、そいつはどんな奴だったんだ?」
「我々強●チームの新参者は、仮入団が認められたら挨拶代わりに一か月は毎週末にハクい女を一人以上、先輩たちのために拉致って調達してくるのが慣例なんですが、〈女犯堂書店〉のメンバーによれば、そいつが調達してくる女はどれもこれも美人とかブスとかそういうレベルじゃなくて、脳性マヒの知的障●児とか、小児マヒで手足がワヤな状態の少女とか、事故で両足を切断した女とか、我々の許容範囲をはるかに超えた種類の女ばかりだったそうです。最初は悪い冗談だろうと思って笑って見ていたメンバーたちも、さすがにそいつが毎週毎週そういう女ばかりを拉致して、アジトへ運んできて朝まで何度も嬉しそうに●すのを見て気分が悪くなって、幹部会でも満場一致で除名が決まったと聞いています」
「ちょっと悪趣味かもな」
　男は少し恥かしそうに言った。
「我々強●チームのメンバーは全員、正義や道徳や倫理などとは何の関係もない人でなし

「……それはあなたが殺したんですか？」
「ははは、さあねえ……」
「あなたは先程、店主にキリスト教関係の本を専門に買ってる人たちのリストを要求していましたが、その中に弟を殺した犯人がいると思うのですか？」
「うん。俺の予想ではフリークス・キラーはホラーマニアというよりは宗教オタクという気がするんでね」
「何か根拠があるんですか？」
「単なるサイコ野郎の犯罪にしては殺し方とその後のディスプレイの仕方が残酷すぎる。そのくせ死体に添える置き手紙は何となく優しさにあふれている……。人を過剰に残酷にしたり慈悲深くしたりできるのは宗教以外にないだろう。それもこの事件は東洋的な仏教観に基づく犯罪ではなく、西洋的なキリスト教神秘主義犯罪特有の慈悲深くてケダモノ臭いがするんでよおおおおおおおおおおおおおおおおおお」といいながら、俺はいつものことだが突然精神が崩壊して、身体のコントロールがきかなくなり、壊れたレコードプレイヤーのように呂律がまわらなくなって、わけの分からないことを口走りはじめた。数十秒後にそれに気がついて、あわてて顎を押さえてその場にしゃがみ込んだ。女は不思議そうな顔をしてぼんやり立っていたが、やがて恐る恐る話しかけてきた。
「あの……失礼ですが、あなたのおっしゃられることの意味が良くわからないんですが……」

としか思えませんからね」
「なるほど。非番時の暇潰しに入院患者を●す医者や看護師って、どこの病院にもありそうな話だしな」
「銀行員が平気で大口預金者の顧客を殺しちゃう時代ですからね、もう何でもアリですよ」
男は静かに愛相笑いを浮かべた。俺は丁寧に礼を言って、何か新しい情報があったら連絡をくれるように頼んで男と別れた。会見の間中、終始無言で俺たちの話を聞いていた女は、不安そうな表情で俺に説明を求めた。
「いま会った男は都内全域の強●チームを全て束ねる頭目なんだよ。夜な夜な街を車で徘徊しては通行人の若い女を拉致して●す〈●姦チーム〉の噂は聞いたことがあるだろう」
「はい、何となく……」
「奴らは手口が巧妙で頭がいいから警察に捕まるような奴は一人もいない。被害者の女にしても、自分一人黙っていれば●されたことなど誰にも知られないのだから警察に被害届けも出さない。だから連中のやる強●はほとんどが立ち小便並みのお手軽な完全犯罪になっちまうのさ」
「フリークス・キラーもそこにかかわっていたと？」
「アタマのキレる人間のクズどもは、アタマの悪い低能不良どもがこぞって暴走族に入るように、何らかの形で強●チームにかかわる時期があるものさ。俺の意識の一部が方々を

い。この男とは仕事上のいきがかりで何度か会っているが、彼に言わせれば、強●チーマーも復讐屋と同様、不用意に目立ってはお仕舞いという商売なのでなるべく影の薄い格好をして気配を消しているのだという。

「久しぶりですね復讐屋さん、今日はどういう用件ですか？」

「首都圏に二百を数える強●チームを束ねるあんたなら、もしかしたら心当りがあるんじゃないかと思ってね。何年か前にどこかのチームに身●者ばかりを狙って強●する趣味の悪いメンバーがいて、あまりにも不気味なので除名されたという噂話の真偽を詳しく教えて欲しい」

俺がそう言うと男は少し驚いて、しばらく考え込んでから意を決したように喋りはじめた。

「……いいでしょう、メンバーの事について部外者に口外するのはタブーなんですが、これは元メンバーの話だし、復讐屋さんにはこれまでもいろいろと恩義があるから話しましょう」

「そいつは有り難い」

言わなきゃこの場で殴り倒して半殺しにしてでも口を割らせるつもりだった。その手間が省けるのは確かに有り難い。

「その男は、おそらく三年前に杉並区を中心に活動するチーム〈女犯堂書店〉を除名になった奴です。他チームのことなので私もあまり憶えていないのですが、確かヨセフとか

「まあ見てなって」
妄想屋はボロボロの紙袋をいくつもかかえて、傍目にはホームレスにしか見えない汚い格好でヨロヨロと歩道を歩いていた。声をかけるとクシャクシャの顔をさらに歪めて嬉しそうに笑った。
「やあ、あんたかい、久しぶりじゃなあ！」
「いつも急で申しわけないんだが、また仕事を頼みたい。引き受けてくれるか？」
「おやすい御用だ。あんたからの仕事はいつでも大歓迎じゃよ！」
「ありがとう、助かるよ」
「今度は何を妄想すればいいんじゃい？」
俺は持ってきた資料を手渡しながら説明した。
「いま巷で話題のフリークス・キラーは知ってるよな？　今回の標的は奴だ」
「そいつは大物じゃな、わしらも新聞は全紙拾い読みしとるから、奴を妄想するのは簡単じゃよ」
「間違いなく奴は東京二十三区内のどこかにいる！　今回は念のために神奈川、千葉、埼玉の各駅にいる妄想屋も全て動員して妄想結界を張ってくれ。時間は明朝八時から十時の間だ。そこに全ての勝負をかける」
「わかった。それではすぐに仲間に連絡をして用意をせんとな」
そう言って妄想屋は不自由な足をひきずりながら新宿駅の方へ引き返して行った。

の鬼畜で、チームによってはSMやア●ルセ●クスやス●トロなどを専門に行うマニアグループもあります。ですが、それでも重度の障●をかかえて苦しんでいる女を積極的に●したいと考えて、それを実行するようなハイホーな野郎はただの一人もいませんし、いくら我々でも、●していい女と悪い女を見分けるぐらいの分別はありますよ。過去にそういうことがあったからというわけではないのですが、我々自身の保身のためにも現在は〈極端にハジけたサイコ野郎は絶対に入団させてはならない〉という不文律が各チーム暗黙の了解事項になって います」

「まあ、当然だろうな」

「何でもそいつは、障●者の女を●すのをとがめたメンバーに、〝あなたには女たちをみんな平等に●してやろうという公平な精神や慈悲の心がないのか！　愛のない強●をして何が楽しいんだ！〟と言って食ってかかったそうです。マジで〈愛のある強●〉を目指していたんでしょうかね」

「とことんフザケた野郎だな。そいつの消息は分かるか？」

「知っていれば教えますが、何せ三年も前のことですからね。誰も知らないし関わりたくもないでしょう」

「だよなあ……」

「チームのメンバーたちはその男が調達してきた女たちの状態を見て、〝こいつは医療関係者だろうな〟と思っていたらしいですね。どう見たって入院患者ばかりを拉致してきた

んだよ」
そう言ったら、女はこれまでで一番不安そうな顔をして黙り込んだ。極めて正常な反応だ。
「明日の朝、俺は予定通り発狂して奴を殺す。あんたはビデオを持って俺の後を十メートル以上離れてついてこい。発狂中の俺はホントに危険だから、不用意に声をかけたり近づきすぎたりするんじゃないぞ！」

翌朝、俺は武器をしこたま携えて靖●神社へ向かった。すでに「ブッククラブ怪」の親父からせしめたリストの中の人名と住所は昨晩一夜漬けでアタマの中に叩き込んでいる。強●チームの頭目からは、件の男を最近も新宿や池袋で見かけたメンバーがいたという情報が携帯の留守電に入っていた。
待ち合わせの場所に行くとすでに見届け人の女は来ていて、そわそわと落ち着かない様子だった。
「別に武運長久を祈願するためにこの場所を選んだんじゃないぜ、発狂するならここが一番だからさ」
「よろしくお願いします」
緊張気味の女は姿勢を正して頭を下げた。
「弟の写真は持ってきたか？」

かぎ回って、過去に一人だけ、障●者を専門に強●していたサイコ野郎が●姦チームに在籍していたことがあったらしいという噂をつかんできたから聞いてみたんだ」
「それが弟を殺した犯人なんですか」
「断定はできないが、フリークス・キラーとの共通点は多い。聖者の名前を名乗っていたという所も怪しいし」
　俺がそう言うと女は無言で眉をひそめた。
「安心しな。俺たちは確実に奴に近づいている。復讐の時は近い」
　それは気休めでも何でもなかった。俺はあと数日以内に奴を必ず殺すだろう。その自信と予感は俺の中に確かにあった。

　フリークス・キラーとの直接対決を前に、俺が最後に向かったのは、妄想屋の元締めのところだった。
《奴は現在、新宿駅地下構内から中央公園方面へ向かってゴミを物色しながら歩行中だ。急げ！》
　ホタルからの情報にしたがって新宿へ向かう道すがら、女が俺に訊ねてきた。
「いったい何ですか、妄想屋って？」
「名前の通りさ。金を払えば何でも妄想してくれる頼もしい連中だ」
「？」

ホタルの意識を通じて、俺は首都圏二千人の妄想屋が俺の殺戮を妄想し始めているのを明確に感じた。

女に写真を返し、俺は発狂するために●国神社の大きな鉄の鳥居の真下に立って精神を統一し、大声であの歌を歌い始めた。

「きィいいいいいいいいみぃいいいいいがぁあああああよォおおおおおわァあああああああ！」

それが俺の精神を発狂モードに導くためのキーワードだった。たちまちアタマの中に壮大な妄想大日本帝国や真珠湾攻撃や●●大虐殺や硫黄島の玉砕や広島長崎の原爆投下や東京大空襲の記憶と膨大な憎悪が一瞬で甦り、俺は完全に発狂した。

この先は意識が戻った後でホタルから聞いた話である。

●国神社の鳥居の下で発狂した俺は、大声で「奴は日比谷公園だあああ！」と叫んだ後で、よだれをたらして柳刃包丁をふり回して●国通りのまん中で両手を広げてタクシーを止め、運転手を脅して日比谷公園へ向かったらしい。女もカメラをまわしながらタクシーをつかまえて後を追ってきた。

発狂モードに入った瞬間に、俺はフリークス・キラーの正体が障●者相手の介護ヘルパーのボランティアであることを知り、そいつが現在、日比谷公園で車椅子を押して障●者と朝の散歩中であることも知ったのだ。奴の次の殺害目標は奴の押す車椅子に座ってい

「どういうことなんですか？」
それまで黙って後で見ていた女が口を開いた。分からないのも無理はない。
「マトモな連中には理解不能のキチ●イ妄想魔術の一つさ。俺の依頼で都内全域にちらばる二千人の妄想屋が一斉に同じ一つのヴィジョンを妄想するんだ。この俺がフリークス・キラーを一方的になぶり殺しにする楽しい光景をね」
「？」
「ある物事を実現するにはイメージの力も大切なんだ。たとえばそこのバカでかい都庁ビルを見てみろよ。一人じゃ何千年時間があったって作れるもんじゃないが、それでもあのビルは最初の一人が〝ここにこういうビルを建てよう〟とアタマの中でイメージを思い描いたところから始まってるんだぜ」
「それは……そうですが」
「妄想屋たちはほとんどみんなホームレスだけど、彼らの発する思念は常人の倍以上に強烈だ。そして物事を細部までリアルに思い描くことにかけては超一流のエキスパートなんだ。俺は彼らに俺の勝利の情景を強烈にイメージしてもらい、現実化の後押しをはかるのさ」
「……良くわかりませんが、それって、ホントに効くんですか？」
「だから前にも言ったろう？　マトモじゃない奴を相手にするには、こっちはそれ以上マトモじゃなくなる必要があるんだって！　こういう勝負は先に最大限に狂った方が勝ちな

やった。奴がどのあたりで絶命したのかはホタルも憶えていなかった。復讐はこれで完了だ。

気がつくと俺は血だらけの手にズタズタに引き裂いた人間の臓物を持って路上に立っていた。

何やら周囲がさわがしい。いつものことだが見届け人がいなくなっている。でも、見届け人って誰だったっけ？　この復讐の依頼は誰が受けたんだろう……復讐？　依頼？　ああ、アタマが痛い。毎度のことだが全然思い出せない。記憶の全てはおぼろげで足元に転がっている出来たての死体の血の色だけが鮮やかだ。サイレンの音が近づいてきた。警察がやってきたのだろう。まあいい、捕まってもどうせ元の病院に連れ戻されるだけだ。次の依頼が来るまでゆっくりと休養させてもらおう。

《さて、今週は、何といっても殺し方の酷さから日比谷公園で起きた障●者のボランティア殺害事件が段トツ1位だ！　いやあ、それにしても精●病院を抜け出した精●病患者の凶行とはいえ、まじめで善良なボランティア野郎があんなにむごく殺されるなんて、ホントにこの世は理不尽だねえ。オーッホッホッホッ、イーッヒッヒッヒッ！　オーッホッホッ、イーッヒッヒッヒッ！》

「はい、ここに」

　俺は差し出された家族四人の記念写真をじっと見つめて殺された弟の生涯を妄想した。写真の中の弟は正面にあるカメラの方を向いておらず、視点の定まらない虚ろな目でぼんやりと遠くを眺めていた。おそらくは殺されるときも、こんな目をして殺人鬼の顔を見ていたんだろう。なあお前、さほど長くもない人生だったけど、こういう優しい家族に囲まれてたんだから、きっとそれなりに幸せだったんだよな。生きててホントに良かったなって思う瞬間ぐらい、一回や二回はあったよな。でなきゃ嘘だぜ。お前は殺されずに長生きしていても、確実に死ぬまで童●のままだったろう。だけど別にセ●クスだけが人生の快楽じゃないし、走る車や電車を見たり、暖かい陽の光をあびたり、涼しい風に吹かれるだけでも、楽しくて面白くて楽しくて面白くて楽しくて面白くてたまらくなってヘラヘラ笑ったりしていたんだからいい人生だったよな。

　殺される時はわけも分からず怖かったろう、痛かったろう、苦しかったろう。何も悪いことをしていないのにお前がこんな酷い目にあったのは単に運が悪かっただけで、元々この世界はそういう理不尽や出鱈目があふれてるんだから、自分のどこが悪かったのかなんて気にするんじゃねえぞ。これから俺がお前になって、お前の家族の無念を晴らしてやる。そんなことをしてもお前が生き返るわけじゃないけど、復讐も葬式と一緒で、生き残った者たちのために行われる行為なんだから、それなりの意義はあるんだよ。

「……そろそろ時間だ。少し離れて見ていてくれ」

ろ！鬼畜のススメ別冊／エヴァンゲリオンという名の電波」と鬼畜のススメの入門編として「村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ！鬼畜のススメお試し版」を追加してシリーズ全7冊になりました。

2冊目の「村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ！②鬼畜のススメ　誕生編～中学生　日記から芸術論まで」の配信の際に、内容に問題があるとして大手企業の配信を中止されてしまったため、不本意ながら、1冊目の「鬼畜のススメ」も含めて全作品の危険な（笑）言葉に伏せ字を入れての配信となってしまいましたが、前後を読んで類推していただければ、どんな言葉かご理解できるようになっていると思います。

最後になりましたが、この「鬼畜シリーズ」にご協力くださった沢山の方々に心から感謝いたします。

皆さまのご協力がなかったらこのシリーズの全ては配信することが出来ませんでした。

そして、ダウンロードして読んでいただいた読者の方々にも心から感謝いたします。

本当に有難うございました。

２０２１年　10月7日　森園みるく

る筋ジストロフィー患者の少年だった。しかも奴のズボンの後ポケットには小型で強力なスタンガンがある。もう一刻の猶予も許されない！

公園に着いた俺は真っしぐらに妄想ヴィジョンで奴を見た場所へ向かって走り出した。

二千人の妄想屋たちの強烈な妄想攻撃が背後から俺を力づける。

広い公園の中で車椅子を押す奴の後姿を数十メートル前方に発見した瞬間から、俺は叫ぶのを止めた。少し息をととのえてから無言で全力疾走して奴の背中に柳刃包丁ごと体当たりをかました。

大きな悲鳴が上がり、車椅子が倒れて少年が路上に投げ出された。

「よおおおおし！　ここからはアップで撮れよ！」

俺は後も見ずに背後から追いかけて来ているはずの女に声をかけた。

こうした場合、殺す前にフリークス・キラーから犯行動機やその目的を問いただすのが筋なのかもしれないが、復讐屋は結果重視の商売だし、何より発狂中の俺にそんな余裕があるわけもない。

俺は奴が動けなくなるまで胴体を包丁で刺してから、ナタを取り出して手足を少しずつ切断した。なるべく苦痛が増すようにである。それから奴の両目に指をつっ込んで目玉をえぐり出して、ペンチで前歯を全部抜いてから鼻と耳の穴に折ったワリバシを突っ込んでやった。仕上げは小型のノコを取り出して奴のアタマをこめかみのあたりから輪切りにしようとしたのだが、うまく切れなかったのでき●玉を蹴り潰してから、ハラワタを裂いて

村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ！⑤
鬼畜のススメ
覚醒編～豊かにこころを腐らせよう！❷

著者　村崎百郎
発行者　有限会社　ミルキーワールド
スキャンニング　株式会社　エレキテル　電子化代行スキャンＰＲＯ事業部
新表紙デザイン　森園みるく
編集　校正　森園みるく　小山繭子　中嶋誠

☆参考サイト
「まぼろし博覧会」

あとがき

この「村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ！⑤鬼畜のススメ　覚醒編～豊かにこころを腐らせよう！❷」が「鬼畜のススメ」シリーズの最後の作品になります。

当初は書籍として発売された「鬼畜のススメ」（１９９６年／データハウス刊）の１冊を電子配信する予定だったのですが、村崎の昔の原稿や未発表の文章と日記、そして発売は決まってなかったものの遺稿（元のタイトル紫の炎）が残されていたことで、それらを「村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ！」というシリーズにして電子配信することにしました。

村崎の昔の原稿や未発表の文章と日記は「村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ！②鬼畜のススメ　誕生編～中学生日記から芸術論まで」と「村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ！③鬼畜のススメ　復活編～純粋妄想電波批評」の2冊に分けて、遺稿は「村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ！④鬼畜のススメ　覚醒編～豊かにこころを腐らせよう！❶」と「村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ！⑤鬼畜のススメ　覚醒編～豊かにこころを腐らせよう！❷」に分けたのですが、どれも内容が濃い、というか文字量が多いため、エヴァンゲリオンに特化した「村崎百郎のパンデミック時代を生き延び

村崎百郎非公式ＨＰ
http://murasaki100.com/index_00.html

森園みるく公式ＨＰ
http://morizono.babymilk.jp/

情報は以下よりチェックよろしくお願い致します。

森園みるくＦＢ
https://www.facebook.com/milk.morizono

森園みるくＴｗｉｔｔｅｒ
https://twitter.com/noritakamilkmor

村崎百郎（むらさき・ひゃくろう）

61年シベリア生まれ。中卒。80年に上京。凶悪で暴力的な性格が災いし、陰惨な傷害事件をくり返しながら多くの工場や工事現場を点々とする。現在は工員兼鬼畜ライター。生まれつき神や悪魔の声が頭の中に直接聞こえてくるという「電波系」であり、その体質を利用して、「妄想神経」と呼ぶ透明無形の神経繊維を体外に無限に伸ばして、他人の体に潜入＆憑依をしたり、路上のゴミを探査したりと、いつ精神病院からスカウトがきても不思議ではない状態のキ●ガイ技を多数会得している。95年より「すかしきった日本の文化を下品のドン底に叩き堕とす」ために「鬼畜系」を名乗り、この世の腐敗に加速をかけようと、「卑怯＆卑劣」をモットーに日本一ゲスで下品なライター活動をはじめる。（この活動に関する同志＆奴隷＆喜び組＆敵対する「正義の味方」は常時募集中）主な執筆雑誌は『危ない1号』（データハウス）、『GON！』（ミリオン出版）、『イマーゴ』（青土社）など。共著に『ジ・オウム』（太田出版）、近刊予定に『鬼畜系』（太田出版）、『電波系』（太田出版／根本　敬と共著）などがある。

http://maboroshi.pandora.nu/

「怪しい少年少女博物館」

http://ayashii.pandora.nu/

「猫の博物館」

http://nekohaku.pandora.nu/

「セーラちゃん」Ｔｗｉｔｔｅｒ

https://twitter.com/maboroshimusume

ＹｏｕＴｕｂｅ　アムールみるくチャンネル

（「まぼろし博覧会」内「村崎百郎館」の完成工程動画が観られます）

https://www.youtube.com/user/1225MILKMILK

ｎｏｔｅ（村崎百郎の過去の文章が読めます）

https://note.com/kitiku